飛驒市文化財調査報告書　第５集

杉崎廃寺跡２

２０１２
飛驒市教育委員会

杉崎廃寺跡全景（北西から）

巻頭図版2

1 トレンチ　伽藍北東隅区画施設検出状況（北東から）

2 トレンチ　寺院に伴う建物跡 SB58 検出状況（東から）

序

岐阜県の最北端に位置する飛騨市は、平成16年２月１日に、古川町・河合村・宮川村･神岡町の旧２町２村が合併して誕生しました。北は富山市、南東は高山市、西は白川村に接し、面積792.31㎢、そのうち、森林が約92%を占める山間地域に約27,000人の人々が生活しています。

その４町（合併後、河合村は河合町に、宮川村は宮川町に）の中で最も多くの人口を擁する古川町域は、古川盆地内に位置し、西寄りを清流宮川が貫流しています。そして町内には古墳や古代寺院、古代遺跡が数多く分布し、旧国府町域とともに古代飛騨の中心地であったことを物語っています。

さて、今回、飛騨市において、貴重な文化遺産である「杉崎廃寺跡」の隣接地が保育園建設の候補地となったことから､試掘確認調査を実施しました｡その結果､｢寺院の北東隅を区画する塀の発見により、伽藍の規模がほぼ判明したこと」と「伽藍の東側に寺院に付属する雑舎の存在が想定されたこと」の２点は、特筆すべき成果であり、今まで不明であった飛騨の古代寺院の内部に踏み込んだという点で重要な知見であると認識しています。

また、古川町内ではこの他に４ヶ寺、国府町域でも６ヶ寺の古代寺院が確認されており、これだけの数の寺院が集中するのは全国的にも珍しく、飛鳥の宮殿や寺院の造営に携わった「飛騨匠」の経験が土壌になっていると言われています。

以上のようなことからも、今回まとめるに至りました『杉崎廃寺跡2』の発掘調査報告書は、今後、先人の生きた足跡として貴重な価値をもつものになるであろうと思います。本報告書が、今後の考古学研究の礎として、さらには文化財保護への関心を高めるための一助となることを願っています。

終わりに、発掘調査及び出土遺物の整理、そして本報告書の作成等に対しまして、多大なるご指導・ご支援を賜りました関係諸機関・関係者の皆様に心からお礼申し上げます。

平成24年３月

岐阜県飛騨市教育委員会

教育長　山　本　幸　一

例　　言

1　本書は、岐阜県飛騨市古川町杉崎に所在する杉崎廃寺跡（岐阜県遺跡番号 21217 － 000151）の試掘確認調査報告書である。

2　本調査は、飛騨市が文化庁の国宝重要文化財等保存整備費補助金（市内遺跡等）を得て実施したものである。試掘確認調査及び整理作業は、飛騨市教育委員会が実施した。

3　試掘確認調査は、文化庁、独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所、岐阜県教育委員会社会教育文化課、株式会社玉川文化財研究所の指導協力のもとに、調査は平成 22 年度に、整理作業は平成 23 年度に実施した。

4　本書の執筆は、飛騨市教育委員会事務局文化振興室主査（学芸員）・三好清超が行った。なお、第４章については、株式会社玉川文化財研究所調査研究部長・河合英夫氏に執筆頂いた。また編集は三好が行った。

5　試掘確認調査における作業員雇用、現場管理、掘削、測量などの業務は、株式会社アーキジオ飛騨に委託して実施した。

6　遺物の写真撮影は、アートフォト右文に委託して実施した。

7　発掘調査及び報告書の作成に当たって、次の方々や諸機関から御指導・御協力をいただいた。記して感謝の意を表する次第である（敬称略・五十音順）。

　牛丸岳彦、小淵忠司、河合英夫、近藤大典、島田敏男、鈴木景二、髙橋浩二、戸田哲也、長沼　毅、馬場伸一郎、早川万年、松野晶信、松村惠司、森　郁夫、渡辺丈彦

　杉崎光寿会

8　本文中の方位は座標北であり、座標は国土交通省告示の平面直角座標系第Ⅶ系を使用する。水準はＴ．Ｐ．である。

9　土層の色調は、小山正忠・竹原秀雄 2007『新版標準土色帖』（日本色研事業株式会社）による。

10　調査記録並びに出土遺物は、飛騨市教育委員会で保管している。

目　次

巻頭図版
序
例言
第１章　調査の経緯 …… 1
　第１節　調査に至る経緯と目的 …… 1
　第２節　これまでの調査 …… 2
　　１　伽藍中枢部の調査 …… 2
　　２　周辺域の調査－寺地の広がり …… 4
　第３節　2010 年度の試掘確認調査 …… 11
　　１　調査の方法 …… 11
　　２　調査の経過 …… 12
第２章　遺跡の環境 …… 15
　第１節　地理的環境 …… 15
　第２節　歴史的環境 …… 15
　　１　町内及び周辺の主な遺跡 …… 15
　　２　飛驒の古代寺院 …… 17
第３章　調査の成果 …… 21
　第１節　層序 …… 21
　第２節　遺構と遺物 …… 22
　　１　１トレンチ …… 22
　　２　２トレンチ …… 28
第４章　総括 …… 43
引用・参考文献
写真図版
報告書抄録

挿図目次

第１図　遺跡位置図 …… 2
第２図　杉崎廃寺跡既往調査図 …… 5
第３図　東側寺地検討図（1）…… 6
第４図　東側寺地検討図（2）…… 7
第５図　東側寺地検討図（3）…… 8
第６図　南側寺地検討図 …… 8
第７図　西側寺地検討図 …… 9
第８図　北側寺地検討図（1）…… 9
第９図　北側寺地検討図（2）…… 10
第10図　北側寺地検討図（3）…… 11
第11図　遺跡周辺地形図 …… 16
第12図　杉崎廃寺跡と周辺の遺跡分布図 …… 19
第13図　基本土層図 …… 21
第14図　１トレンチ平面図 …… 24
第15図　１トレンチ断面図 …… 25
第16図　１トレンチ遺物出土状況図 …… 26
第17図　１トレンチ出土遺物実測図 …… 27
第18図　３号区画塀跡遺構図 …… 28
第19図　２トレンチ平面図 …… 29
第20図　２トレンチ断面図（1）…… 30
第21図　２トレンチ断面図（2）…… 31
第22図　建物跡 SB58 遺構図 …… 32
第23図　土器埋設炉 SL7 遺構図 …… 34
第24図　土器埋設炉 SL7 出土遺物実測図 …… 34
第25図　２トレンチ遺物出土状況図 …… 35
第26図　２トレンチ出土遺物実測図（1）…… 36
第27図　２トレンチ出土遺物実測図（2）…… 37
第28図　２トレンチ出土遺物実測図（3）…… 38
第29図　杉崎廃寺跡遺跡全体図 …… 45

挿表目次

第１表　発掘調査並びに整理作業の体制 …… 2
第２表　杉崎廃寺跡と周辺の遺跡一覧表 …… 20
第３表　遺構一覧表 …… 39
第４～６表　遺物一覧表（1）～（3）…… 40 ～ 42

挿入写真目次

写真１　遺構検出作業の様子（西から）…… 13
写真２　３号区画塀跡柱掘り方の段下げ作業（北から）…… 13
写真３　建物跡 SB58 確認の様子１（南西から）…… 13
写真４　建物跡 SB58 確認の様子２（南から）…… 13
写真５　寺地東端を確認した様子（南西から）…… 13
写真６　現地説明会の様子（北から）…… 13

写真図版目次

巻頭図版１　杉崎廃寺跡全景（北西から）
巻頭図版２　１トレンチ伽藍北東隅区画施設検出状況（北東から）
　２トレンチ寺院に伴う建物跡 SB58 検出状況（東から）
図版 1　１トレンチ３号区画塀跡の延長部検出状況（西から）
　１トレンチ柱穴跡 SP4・SP5 検出状況（南から）
図版 2　２トレンチ古墳周溝 SD57 検出状況（北東から）
　２トレンチ遺構検出状況（南から）
図版 3　２トレンチ建物跡 SB58 検出状況（南から）
　２トレンチ柱穴跡 SP9 検出状況（南から）
図版 4　２トレンチコの字状石囲炉跡 SL7 断面（東から）
　２トレンチ地山の落ち込み検出状況（南西から）
図版 5　１トレンチ出土遺物（１）
図版 6　１トレンチ出土遺物（２）
図版 7　２トレンチ出土遺物（１）
図版 8　２トレンチ出土遺物（２）
図版 9　２トレンチ出土遺物（３）
図版 10　２トレンチ出土遺物（４）

第１章　調査の経緯

第１節　調査に至る経緯と目的

岐阜県の北部、旧飛騨国に位置する高山盆地や古川・国府盆地内には、国分僧尼寺をはじめとする古代寺院の存在が知られ、その数は推定地を含めると 16 ヶ寺に達する。そのうちの一つ、古川盆地の北西部に位置する杉崎廃寺跡は、飛騨市古川町杉崎字あわら地内に所在する（第１図）。水田の中に整然と並ぶ金堂礎石と二重孔式塔心礎の存在が古くから知られていた。これらの礎石について、『飛州志』等の地誌はいずれも『宮谷寺跡（きゅうこくじあと）』と記し、地元でも長い間、平安後期から織豊時代にかけて天台宗寺門派の法灯を維持した宮谷寺の遺址とされてきた。古い写真には金堂礎石の間にも稲が植えられている様子も残されており、礎石を動かさずに田植えを行ってきたことが知られる（角竹 1938 犬塚編 1939）。また、塔心礎の窪みに溜まった雨水はイボに効くともされ、千年以上もの間、地元では畏敬の念をもって守り伝えられてきた。

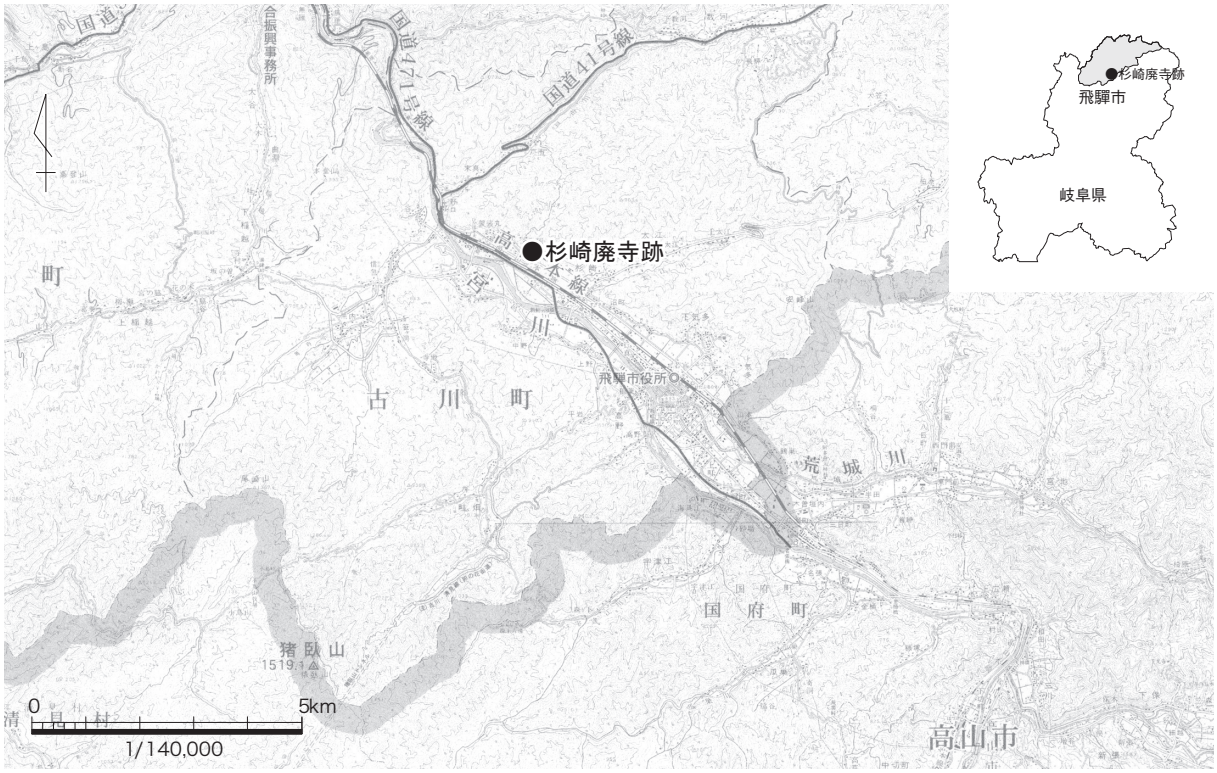
杉崎廃寺跡の調査は、古川町教育委員会（現飛騨市教育委員会）により 1991（平成 3）年から 1995（平成 7）年にかけて県営土地改良事業に伴う発掘調査の一環として実施された。延べ５ヶ年に及んだ調査の結果、7 世紀末葉から 8 世紀初頭に創建された白鳳期の寺院跡であることが明らかとなった。小規模ながら主要堂塔を備え、一本柱塀で区画された伽藍中枢部は、金堂の東に塔を配する。中門・金堂・講堂が直線上に並ぶ伽藍配置は他に例をみず、伽藍内の全面に敷き詰められた玉石敷も全国で初めての発見であった。1992（平成 4）年 10 月には、伽藍地全域の保存と周辺を含めた用地を取得し、遺跡公園として整備することが決定した。1997（平成 9）年 3 月には伽藍中枢部の基壇復元と伽藍地北側の多目的広場整備を行い、事業は完成をみた。

2005（平成 17）年には公衆便所の建設計画がおこり、多目的広場の東端において試掘確認調査を行った。2009（平成 21）年には伽藍中枢部の北側に位置する多目的広場が保育園園舎建設の候補地の一つとなり、遺構の有無と遺構面深度の試掘確認調査を行った。翌 2010（平成 22）年には多目的広場が園舎建設の第１候補地となったことを受け、飛騨市は伽藍中枢部の調査でも現地指導を受けていた松村恵司氏（文化庁文化財鑑査官）に状況説明を行った。そこでは、トレンチ調査による寺地の確認を行い、園舎は寺地の外側に建設するべきであるという指導を受けた。これにより、飛騨市は伽藍中枢部北東隅区画施設及び東側地区の遺構確認を目的とする調査を行うこととし、その調査を飛騨市教育委員会が実施することとなった（第１表）。

調査区の設定については、島田敏男氏（独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所文化遺産部建造物研究室長）の指導を受けた。また調査・整理指導については、伽藍中枢部の発掘調査・報告を担当した河合英夫氏（株式会社玉川文化財研究所調査研究部長）に依頼した。

調査の結果、伽藍を区画する北東隅区画塀と東側地区における遺構群を確認した。2010（平成 22）年 8 月 27 日には、島田氏・渡辺丈彦氏（文化庁文化財部記念物課埋蔵文化財部門文化財調査官）による現地確認、並びに同年 9 月 30 日には文化庁松村氏への概要報告を経て、飛騨市は杉崎廃寺跡の重要性を鑑み、多目的広場を保育園園舎の候補地から外すことを決定した。

平成 23 年度には遺構・遺物図等の整理作業を行い、発掘調査報告書を刊行することとなった。



第１図　遺跡位置図

第１表 発掘調査並びに整理作業の体制

教育委員会教育長	松葉　　正（平成 22 年度）、山本　幸一（平成 23 年度）
教育委員会事務局長	岩塚　泰男（平成 22 年度）、藤井　義昌（平成 23 年度）
文化振興室長	佐藤　康雄（平成 22 ～ 23 年度）
文化財係長	佐藤　直樹（平成 22 ～ 23 年度、平成 23 年度は施設係長を兼務）
主査（学芸員）調査・整理担当	三好　清超（平成 22 ～ 23 年度）
臨時職員	上川渡理絵（平成 23 年度）
整理作業員	中嶋　美香、橋本真由美、畠中　裕子（ともに平成 23 年度）
調査・整理指導	河合　英夫（平成 22 ～ 23 年度、㈱玉川文化財研究所調査研究部長）

第２節　これまでの調査

1　伽藍中枢部の調査

杉崎廃寺跡の調査は、1991（平成 3）から 1995（平成 7）年に行われた延べ 5 ヶ年に及ぶ調査の結果、小規模ながら主要堂塔を備えた 7 世紀末葉から 8 世紀初頭に創建された白鳳期の寺院跡であることが明らかとなった。主要堂塔の伽藍配置は、南面する金堂の東に塔が並び、金堂の正面に中門、後ろに講堂、北東隅に鐘楼を配し、伽藍中枢部を一本柱塀が取り囲む。また、伽藍の中軸線に対してやや西に寄る金堂の南北軸線上に中門と講堂を置くなど、全体として変則的な伽藍配置となっている。伽藍の内部に敷き詰められた玉石敷は全国でも初めての発見であり、その荘厳さは伝飛鳥板蓋宮跡や飛鳥稲淵宮殿跡など、飛鳥の宮殿遺構を彷彿とさせるものであった。

主要堂塔　西に金堂、東に塔を並ぶ伽藍配置は法起寺式であるが、金堂の前方には八脚門の中門、金堂の後ろに講堂が配された配置は他に例をみない。金堂や講堂・鐘楼の礎石は、創建当時の位置を保ち、伽藍を区画する一本柱塀は中門から発して講堂に取りつき、ほぼ矩形に囲繞している。

金堂跡は塔跡と近接して並び、平面が正方形に近い三間四面の形式となっている。塔跡は、小塔の事例として知られる室生寺五重塔や浄瑠璃寺三重塔などと同様に本格的な組物であると考えられる。講堂跡は桁行４間、梁行２間の身舎の南北二面に廂をもつ両面廂付建物跡であった。桁行柱間が偶数間となる例として飛鳥寺講堂や四天王寺創建期の講堂などと共通しており、古式の形態を残している。鐘楼跡は伽藍の北東隅に配され、西を正面とする桁行３間、梁行２間の南北棟建物である。また、伽藍の西側には排水施設としての溝跡を設けていたことも明らかとなった。

寺院付属施設　杉崎廃寺跡では伽藍中枢部の北から掘立柱建物を中心とする遺構群が発見された。それらは区画塀に囲まれ、遺構間の先後関係や配置をもとに復元すると、３期の変遷が明らかにされた。各期とも中心となる建物は、桁行５間、梁行２間の東西棟で、それらは僧房と考えられる。細長い切妻造り建物を棟割式に区切って単位房にあてたものと思われる。また、各期を通して東側に２棟の倉を配し、２期以降は西側にも建物が増設されている。

出土遺物　伽藍中枢部から出土した遺物には、浄瓶･水瓶･獣足火舎･鉄鉢･高盤などの供養具、丸瓦･平瓦･熨斗瓦などの瓦類、坏･埦を主とする食器類、それに建築部材を中心とする木製品などがあり、寺院に関連した遺物が多い。供養具は講堂跡や鐘楼跡から発見され、また仏具として使用された灯明器は講堂からまとまって出土しており、万灯会に使用された可能性もある。瓦類は金堂跡と塔跡付近から出土した以外にあまり認められなかったが、主たる屋根材については、伽藍の西側に配された排水施設から多量の檜皮が発見されたことで解決した。食器類は盆地内で生産された須恵器が中心で、土師器とともに用途に応じた様々な器が主に僧房域から出土した。建築部材等は排水施設から様々なものがまとまって発見された。その中には組み物の一つである「方斗」「肘木」などの部材が出土している。方斗は小形の製品で模型の部位の可能性もある。また、排水施設からは調査当時、岐阜県では初例の古代木簡が発見された。木簡には「符　飽□（見ヵ）」と記載があり、『和名抄』にみえる荒城郡７郷の一つ「飽見郷」を指すと考えられる。これは郡から郷への下達文書である郡符木簡と推測された。他に「見寺」「寺見」「寺」「田倉」「寺冊立」などの記載がある寺院に関連する墨書・刻書土器が注目される。

創建と廃絶の年代　創建の年代については時期の決め手となる遺物が少ないため難しいが、講堂の基壇面や主要堂塔を区画する一本柱塀あるいは整地層から出土した猿投窯編年の岩崎41号窯式並行の須恵器坏類や平城宮Ｉと推測される畿内産土師器坏Ａなどを手がかりに考えると、概ね７世紀末から８世紀初頭の年代が推測された。また、廃絶の原因については、主要堂塔、僧房域とも火災によって焼失しており、その年代は折戸10号窯式～井ヶ谷78号窯式並行と推測され、概ね８世紀末から９世紀初頭頃と考えられる。

2　周辺域の調査ー寺地の広がり

寺地の広がりについては、これまでトレンチによる調査に留められていたため明確ではなかった。外廓との関連では、伽藍中枢部を区画する一本柱塀と並列して確認された西側の排水施設（1 号溝）が西側寺地の境界であった。この排水施設は南に延び、また西側の一本柱塀も南側に延びるため、中門の南側には南門の存在が推測された。北及び東の寺地については不明であった。

2010（平成 22）年度の調査では、寺地の広がりを明確にするため、再度過去の調査成果を検討し、調査区の設定を行った（第 2 図）。周辺域での調査成果は未報告であったため、ここで 2009（平成 21）年度までの成果を報告したい。なお、層序については、今年度の成果と合わせて第３章第１節で詳述する。

東側地区　1992（平成 4）年の東トレンチとサブトレンチ 94 － TP1 ～ 5、2005（平成 17）年のトレンチ、2009（平成 21）年の 2 トレンチにおいて調査が行われた。

1992（平成 4）年の東トレンチでは、硬化面とその直上から多数の遺物が発見された。遺物の出土状況から遺構の存在が推測されたが、伽藍中枢部の調査が主目的であったため遺物出土状況の記録に留めた。遺物には古墳時代の須恵器が含まれていたものの、大半は伽藍中枢部と同時期の 8 世紀代の遺物であった（第 3 図）。

その南側に設定されたサブトレンチ 94 － TP1 ～ 5 では遺構面を確認することができず、第Ⅰ層の除去後、その直下は第Ⅳ・Ⅴ層地山であることが確認された（第 3 図）。

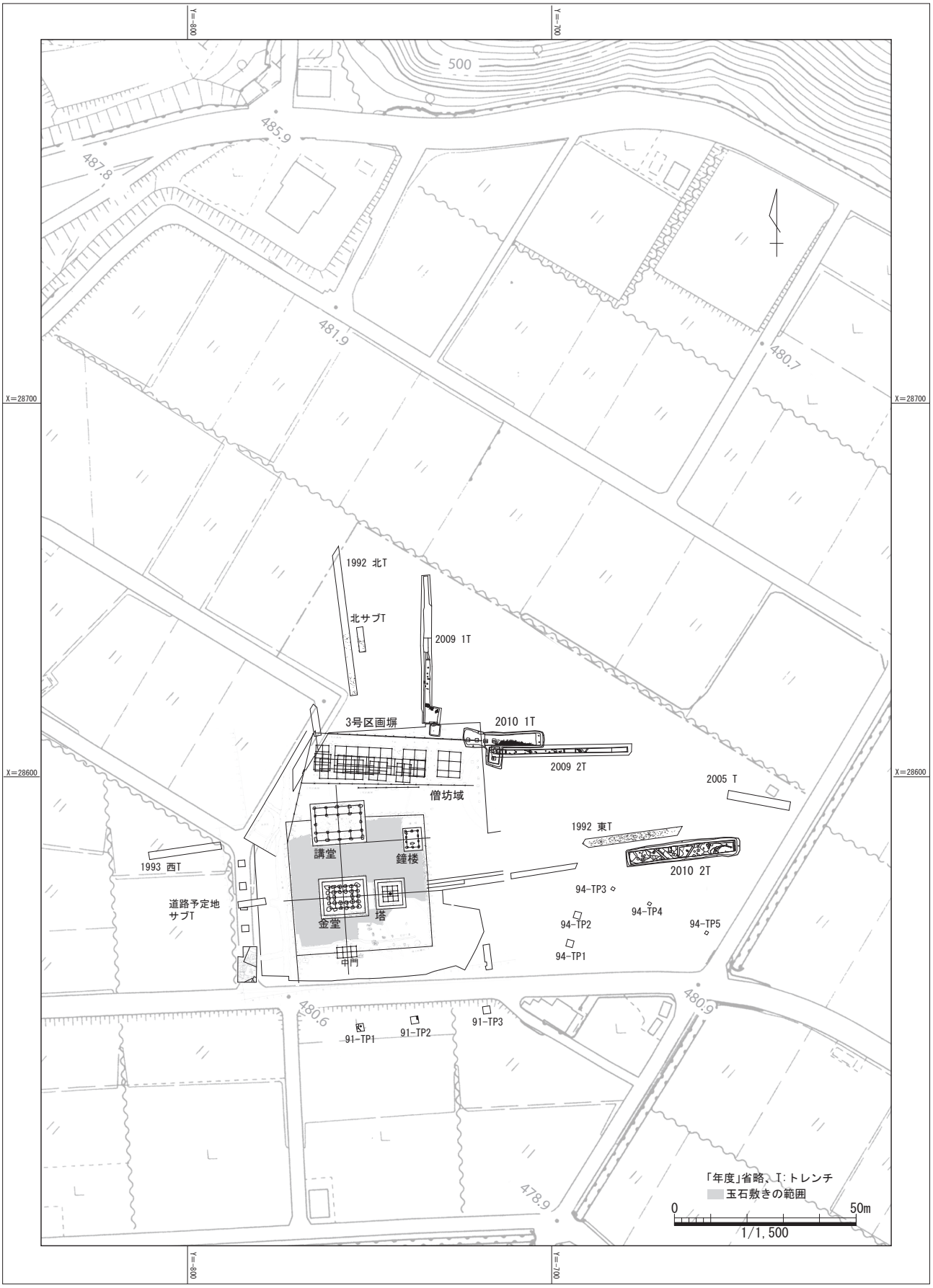
2005（平成 17）年のトレンチでは須恵器や瓦の破片をわずかに確認したものの遺構は検出できず、遺跡はこの地点まで広がらないことを確認した（第 3 図）。

2009（平成 21）年の 2 トレンチでは古墳の周溝を確認したが、伽藍地の東側を区画するような施設の確認には至らなかった（第 4 図）。しかし、トレンチの東端において第Ⅳ層地山が大きく下がる地点を確認した（第 4・5 図）。

南側地区　サブトレンチ 91 － TP1 ～ 3 として、道路を隔てた伽藍中枢部の南側に調査区を 3 ヶ所設けた。この調査は中門南側の土層堆積や遺構・遺物の状況を把握するためのものであった。寺院に関係する遺構･遺物は確認されなかったが、91 － TP1･2 の地区は伽藍中枢部よりもやや下がるものの、第Ⅳ層地山の安定した堆積と、柱穴跡等の遺構を確認した（第 6 図）。これにより、伽藍中枢部を区画し、南側に延びる一本柱塀との関連性に期待が持たれた。91 － TP3 は深い沼田であることが判明した。

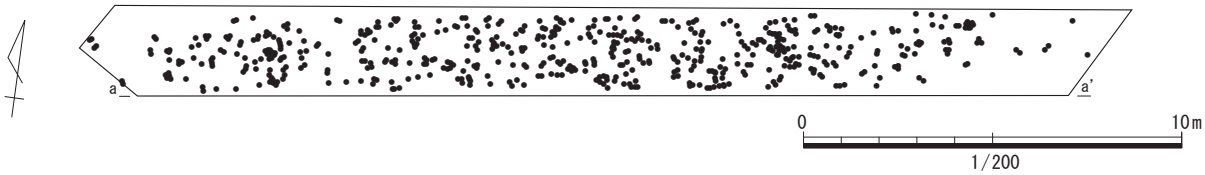
西側地区　道路予定地のサブトレンチ並びに 1993（平成 5）年度の西トレンチにおいて調査が行われている。道路予定地のトレンチでは第Ⅲ層上面で杉崎廃寺跡造営以前の掘立柱建物跡と古墳中期の竪穴住居跡が発見されている。一方、西トレンチの状況は第Ⅲ層で遺構は確認できず、西側に向かって急激に落ち込むことが判明した（第 7 図）。この所見により遺跡範囲は道路予定地の付近までであり、杉崎廃寺跡の西限は 1 号溝（排水施設）であることが確かめられた。

北側地区　1992（平成 4）年の北トレンチ・北サブトレンチ、2009（平成 21）年の 1 トレンチにおいて調査を行った。北トレンチ・北サブトレンチの調査では遺物の分布状況から遺跡北端をほぼ確定することができた（第 8 図）。2009（平成 21）年の調査では地山が北側寄りで落ち込む地点を確認した（第 9・10 図）。これらの所見により北側の範囲を概ね把握することができた。このことより僧房域の境界であった 3 号区画塀が伽藍地北側を区画する施設であることが判明した。

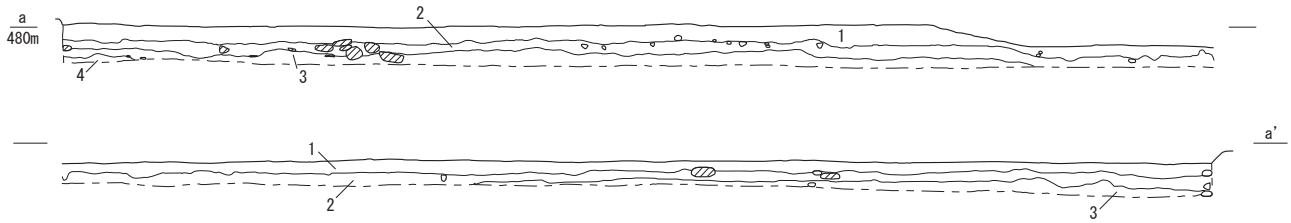


第２図　杉崎廃寺跡既往調査図

1992（平成4）年度東トレンチ遺物出土状況

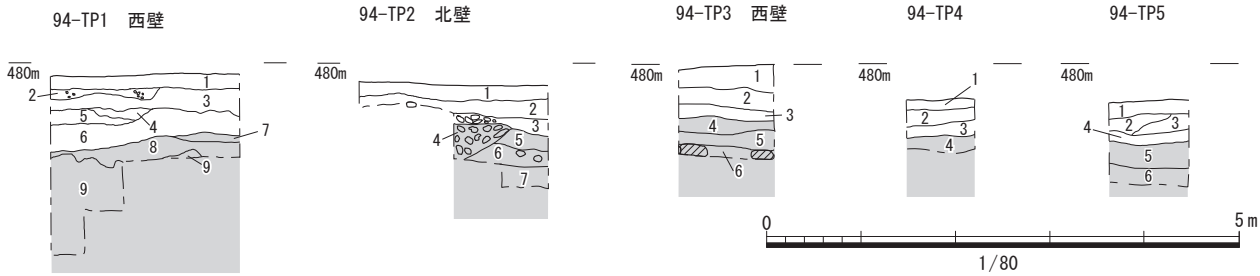


1992（平成4）年度東トレンチ　南壁



1　10YR2.5/2黒褐色土　1～3cm大の礫3%　やや粗い　［Ⅰ］
2　10YR2/1.5黒色土　鉄マンガン斑紋状1%、炭化物2%、1～2cm大の礫1%　密　［Ⅱ］
3　10YR2/1黒色土　細砂斑紋状1%　密　［Ⅲ］
4　10YR2/2.5黒褐色土　ヨシ3%　細砂含有70%　やや密　［Ⅲ］

1994（平成6）年度調査　サブトレンチTP



94-TP1
1　10YR3.5/2黒褐色土　1～5cm大の小礫10%混　層下位を中心に斑鉄及びマンガン斑3%集積　やや密　［Ⅰ］
2　10YR3/1.5黒褐色土　斑鉄及びマンガン斑5%・5～10cm大の亜円礫・層右端を中心に40%　やや密　［Ⅰ］
3　10YR3/3暗褐色土　斑鉄及びマンガン斑20%・5～10cm大の亜円礫30%やや粗　［Ⅰ］
4　10YR3/1.5黒褐色土　斑鉄及びマンガン斑7%・腐植質3%・径5cm大の小礫3%やや密　［Ⅰ］
5　10YR4/6褐色小礫　マンガン斑及び斑鉄の浸食をうける　極粗　［Ⅴ］
6　10YR4/3にぶい黄褐色砂　10YR4/6褐色小礫　斑鉄及びマンガン斑の浸食をうけた層が交互に堆積　粗　［Ⅴ］
7　10YR2/2黒褐色土と10YR5/3にぶい黄褐色砂が交互に堆積　やや粗　［Ⅴ］
8　10YR5.5/4にぶい黄褐色礫と10YR4.5/3灰黄褐色砂が交互に堆積　粗　斑鉄及びマンガン斑50%混　［Ⅴ］
9　10YR2.5/1黒色土　粒子極めて密で粘性が強い　下位にいくほどしまり弱く粘性が増す　［Ⅴ］

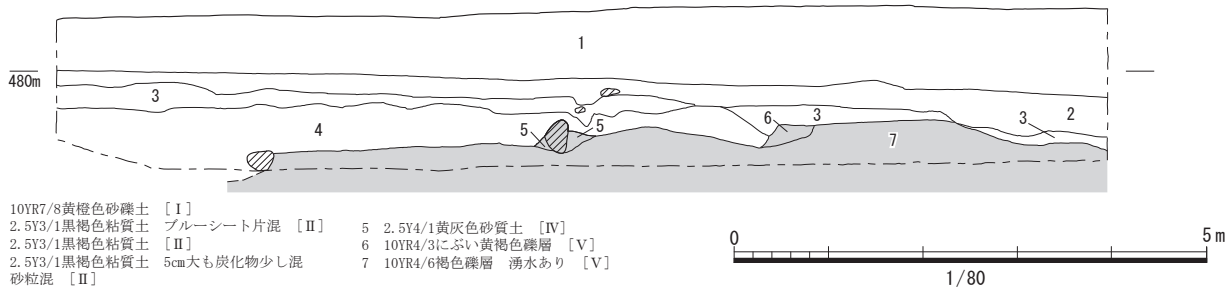
94-TP2
1　10YR3.5/2黒褐色土　5cm大の小礫層下位を中心に5%混、やや密　［Ⅰ］
2　10YR3.5/1.5黒褐色土　斑鉄及びマンガン斑20%・5cm大の小礫2%混・やや密　［Ⅰ］
3　10YR3.5/1.5黒褐色土　斑鉄及びマンガン斑10%、腐食質3%、1～10cm大の亜円礫7%やや密　［Ⅰ］
4　径10～15cmの亜円礫層　［Ⅴ］
5　10YR3/1.5　1～5cm大の亜円礫1%・腐食質3%・斑紋状砂1%　やや密　［Ⅴ］
6　10YR2.5/1.5黒褐色土　5～10cm大の亜円礫60%　［Ⅴ］

94-TP3
1　10YR3/3.5暗褐色土　1～20cm大の礫30%混　粗　［Ⅰ］
2　10YR3/2黒褐色土　5cm大の礫層上位を中心に5%混　密　［Ⅰ］
3　10YR2.5/1.5黒色土　斑鉄及びマンガン斑7%混　密　［Ⅰ］
4　10YR3/1黒褐色土　斑鉄及びマンガン斑3%　斑紋状の黄砂3%　［Ⅳ］
5　10YR2/1.5黒色土　斑紋状黄砂7%　1～5cmの亜円礫1%　［Ⅳ］
6　礫層［Ⅴ］

94-TP4
1　10YR3/3暗褐色土　1～5cm大の小礫3%混　やや密　［Ⅰ］
2　10YR3.5/1黒褐色砂　暗褐色土40%・斑鉄及びマンガン斑10%混　やや密　［Ⅰ］
3　10YR3/1黒褐色土　1～5cm大の炭化粒1%未満・斑鉄及びマンガン斑5%・斑紋状砂　20%混　密　［Ⅰ］
4　2.5Y4/2暗灰黄色砂　やや粗　［Ⅳ］

94-TP5
1　10YR2.5/2黒褐色土　暗褐色土混50%・1～5cm大の礫5%混　やや密　［Ⅰ］
2　10YR3/3暗褐色土　黒褐色土が塊状及び斑紋状に20%・1～10cm大の礫7%　やや密　［Ⅰ］
3　10YR2/2.5黒褐色土　暗褐色土混　やや密　［Ⅰ］
4　10YR3.5/2黒褐色土　1～10cm大の礫7%混　やや密　［Ⅰ］
5　10YR3/2黒褐色土　5～10cm大の亜円礫50%混　やや粗［Ⅴ］
6　礫層［Ⅴ］

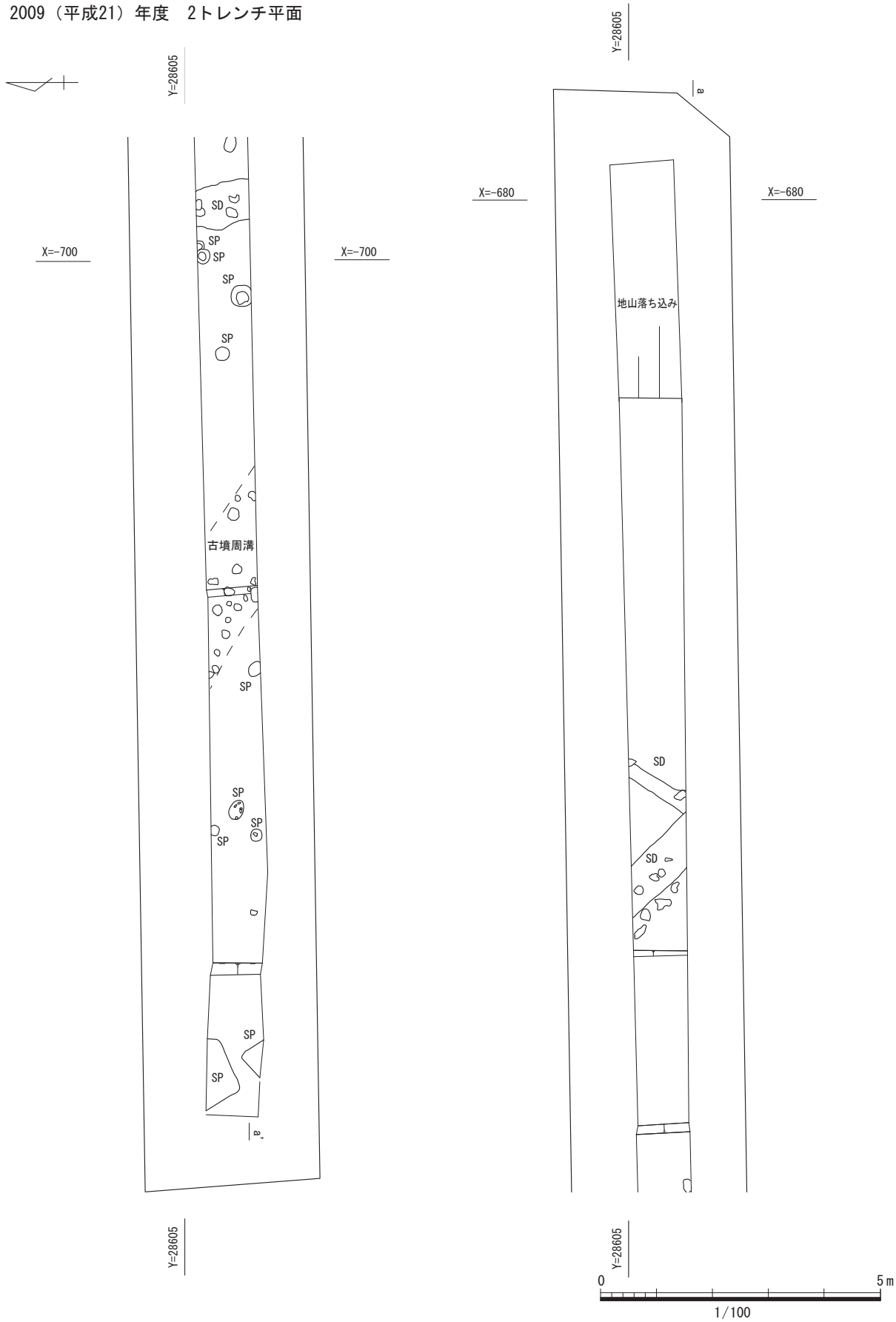
2005（平成17）年度トレンチ　北壁



1　10YR7/8黄橙色砂礫土　［Ⅰ］
2　2.5Y3/1黒褐色粘質土　ブルーシート片混　［Ⅱ］
3　2.5Y3/1黒褐色粘質土　［Ⅱ］
4　2.5Y3/1黒褐色粘質土　5cm大も炭化物少し混　砂粒混　［Ⅱ］
5　2.5Y4/1黄灰色砂質土　［Ⅳ］
6　10YR4/3にぶい黄褐色礫層　［Ⅴ］
7　10YR4/6褐色礫層　湧水あり　［Ⅴ］

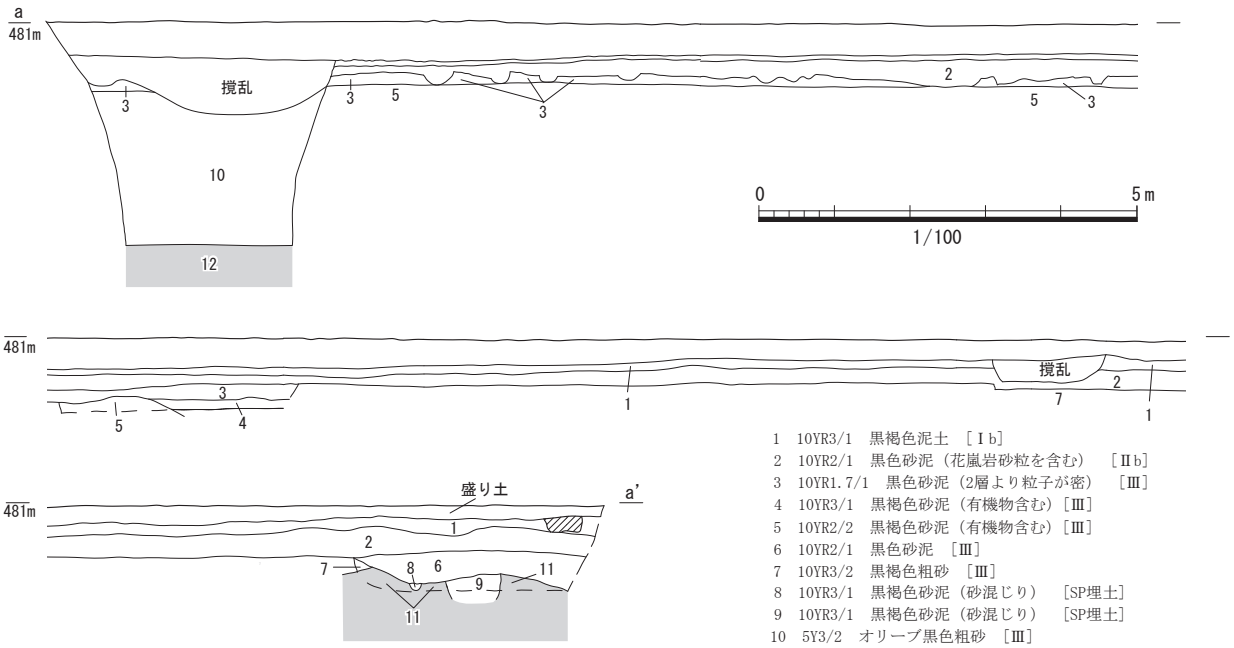
第３図　東側寺地検討図(1)

2009（平成21）年度　2トレンチ平面



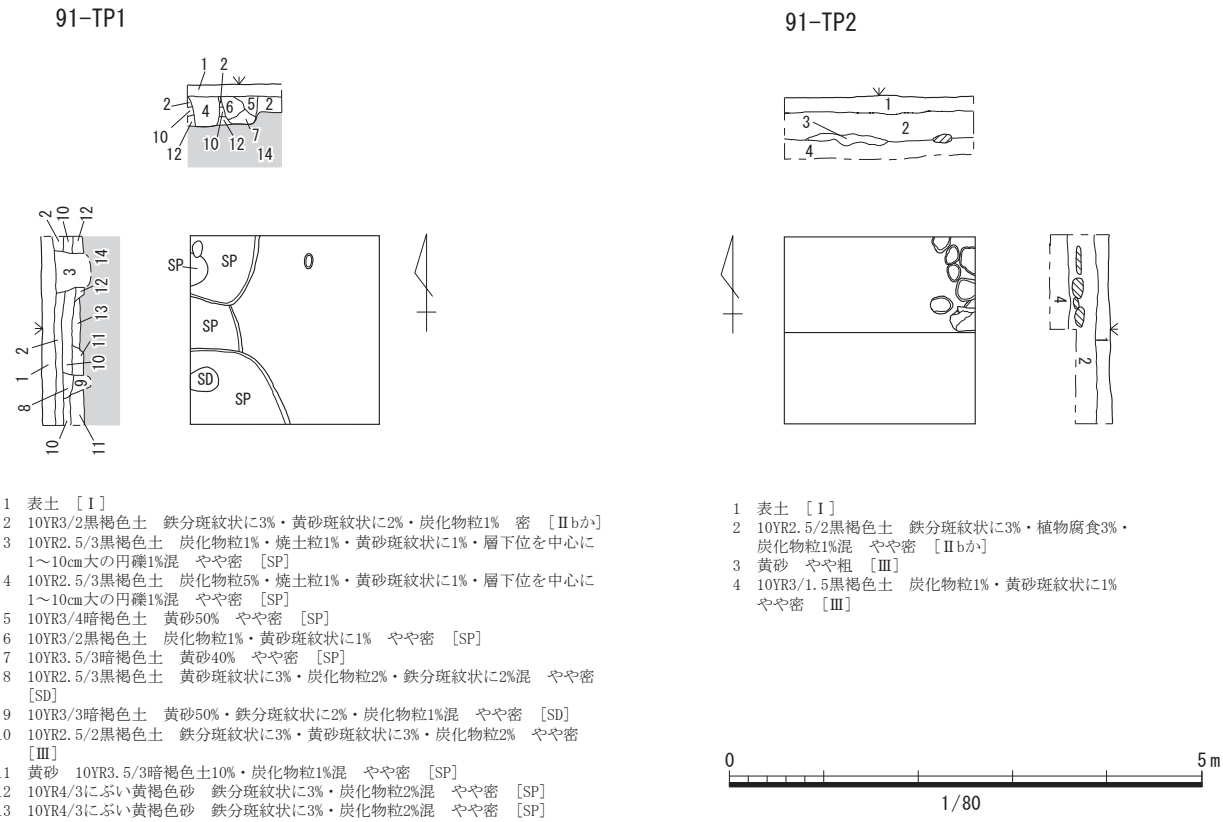
第４図　東側寺地検討図(2)

2009（平成22）年度　2トレンチ南壁



1　10YR3/1　黒褐色泥土　［Ⅰb］
2　10YR2/1　黒色砂泥（花崗岩砂粒を含む）　［Ⅱb］
3　10YR1.7/1　黒色砂泥（2層より粒子が密）　［Ⅲ］
4　10YR3/1　黒褐色砂泥（有機物含む）［Ⅲ］
5　10YR2/2　黒褐色砂泥（有機物含む）［Ⅲ］
6　10YR2/1　黒色砂泥　［Ⅲ］
7　10YR3/2　黒褐色粗砂　［Ⅲ］
8　10YR3/1　黒褐色砂泥（砂混じり）　［SP埋土］
9　10YR3/1　黒褐色砂泥（砂混じり）　［SP埋土］
10　5Y3/2　オリーブ黒色粗砂　［Ⅲ］
11　黒色泥土　砂礫層　［Ⅳ］
12　5Y3/2　オリーブ黒色粗砂　［Ⅴ］

第５図　東側寺地検討図(3)

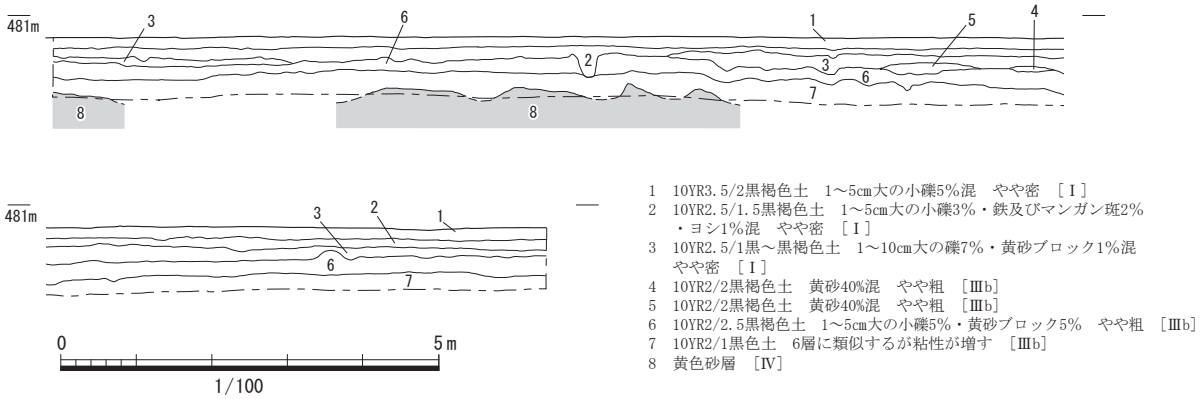


1　表土　［Ⅰ］
2　10YR3/2黒褐色土　鉄分斑紋状に3%・黄砂斑紋状に2%・炭化物粒1%　密　［Ⅱbか］
3　10YR2.5/3黒褐色土　炭化物粒1%・焼土粒1%・黄砂斑紋状に1%・層下位を中心に1～10cm大の円礫1%混　やや密　［SP］
4　10YR2.5/3黒褐色土　炭化物粒5%・焼土粒1%・黄砂斑紋状に1%・層下位を中心に1～10cm大の円礫1%混　やや密　［SP］
5　10YR3/4暗褐色土　黄砂50%　やや密　［SP］
6　10YR3/2黒褐色土　炭化物粒1%・黄砂斑紋状に1%　やや密　［SP］
7　10YR3.5/3暗褐色土　黄砂40%　やや密　［SP］
8　10YR2.5/3黒褐色土　黄砂斑紋状に3%・炭化物粒2%・鉄分斑紋状に2%混　やや密　［SD］
9　10YR3/3暗褐色土　黄砂50%・鉄分斑紋状に2%・炭化物粒1%混　やや密　［SD］
10　10YR2.5/2黒褐色土　鉄分斑紋状に3%・黄砂斑紋状に3%・炭化物粒2%　やや密　［Ⅲ］
11　黄砂　10YR3.5/3暗褐色土10%・炭化物粒1%混　やや密　［SP］
12　10YR4/3にぶい黄褐色砂　鉄分斑紋状に3%・炭化物粒2%混　やや密　［SP］
13　10YR4/3にぶい黄褐色砂　鉄分斑紋状に3%・炭化物粒2%混　やや密　［SP］
14　黄砂［Ⅳ］

1　表土　［Ⅰ］
2　10YR2.5/2黒褐色土　鉄分斑紋状に3%・植物腐食3%・炭化物粒1%混　やや密　［Ⅱbか］
3　黄砂　やや粗　［Ⅲ］
4　10YR3/1.5黒褐色土　炭化物粒1%・黄砂斑紋状に1%　やや密　［Ⅲ］

第６図　南側寺地検討図

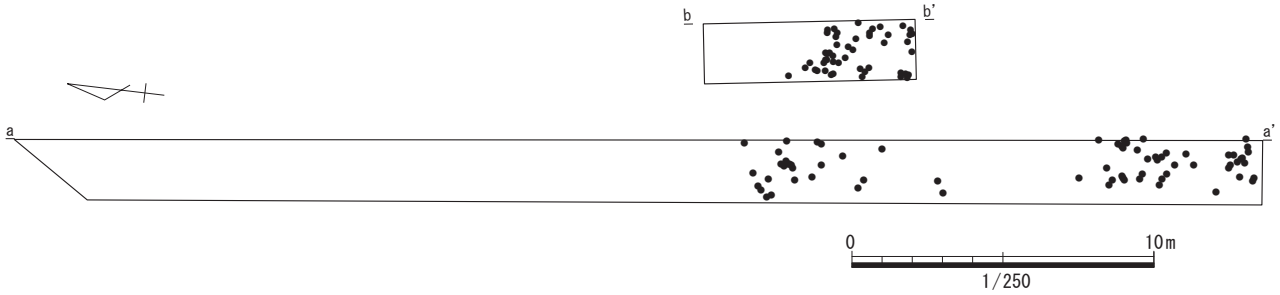
1993（平成5）年度西トレンチ　北壁



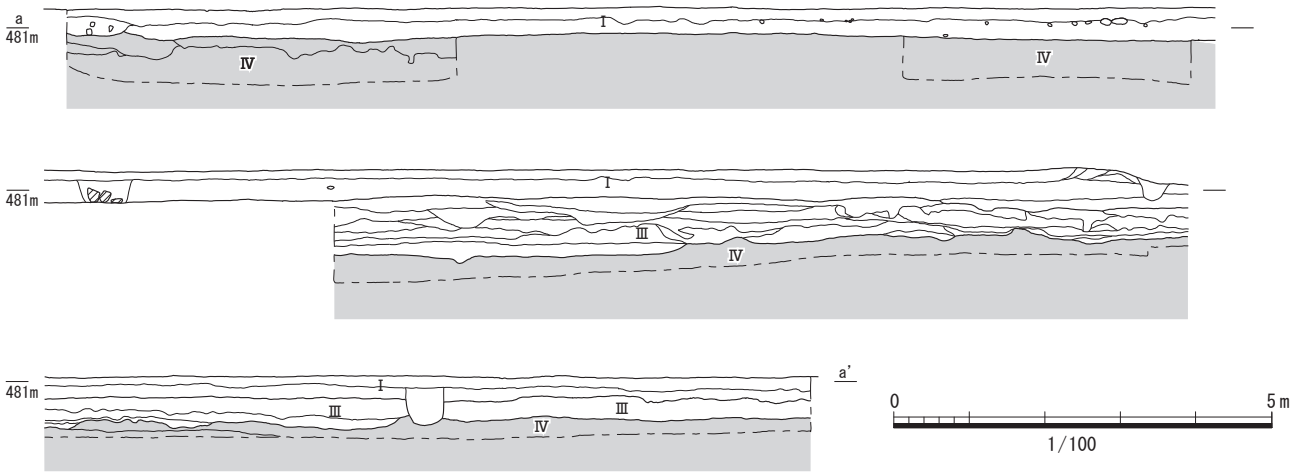
1　10YR3.5/2黒褐色土　1～5cm大の小礫5%混　やや密　［Ⅰ］
2　10YR2.5/1.5黒褐色土　1～5cm大の小礫3%・鉄及びマンガン斑2%・ヨシ1%混　やや密　［Ⅰ］
3　10YR2.5/1黒～黒褐色土　1～10cm大の礫7%・黄砂ブロック1%混　やや密　［Ⅰ］
4　10YR2/2黒褐色土　黄砂40%混　やや粗　［Ⅲb］
5　10YR2/2黒褐色土　黄砂40%混　やや粗　［Ⅲb］
6　10YR2/2.5黒褐色土　1～5cm大の小礫5%・黄砂ブロック5%　やや粗　［Ⅲb］
7　10YR2/1黒色土　6層に類似するが粘性が増す　［Ⅲb］
8　黄色砂層　［Ⅳ］

第７図　西側寺地検討図

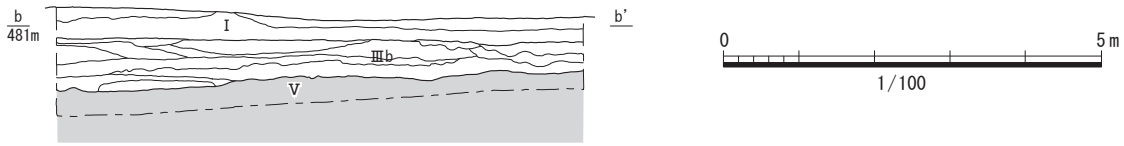
1992（平成4）年度北トレンチ・北サブトレンチ遺物出土状況



1992（平成4）年度北トレンチ東壁

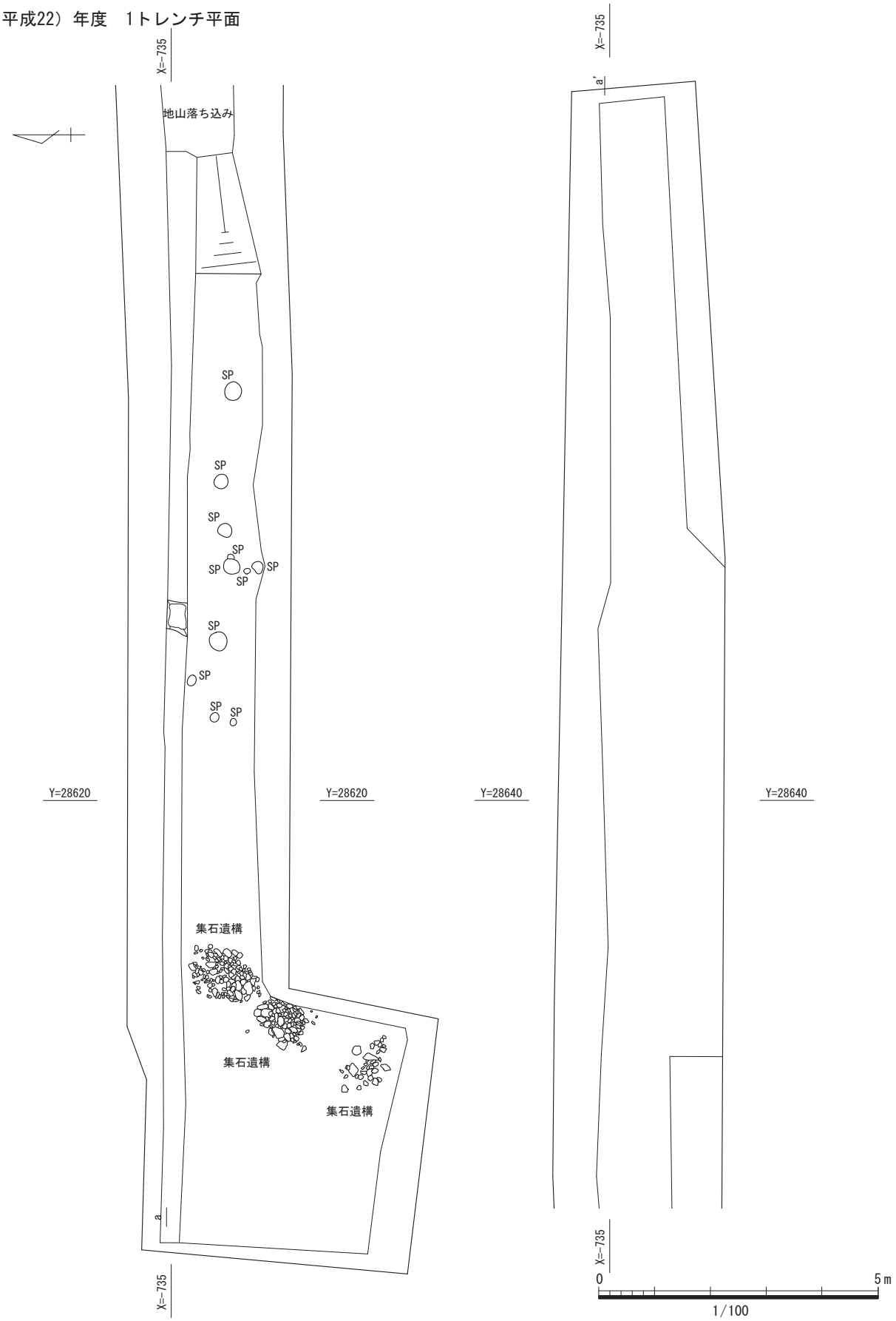


1992（平成4）年度北サブトレンチ東壁



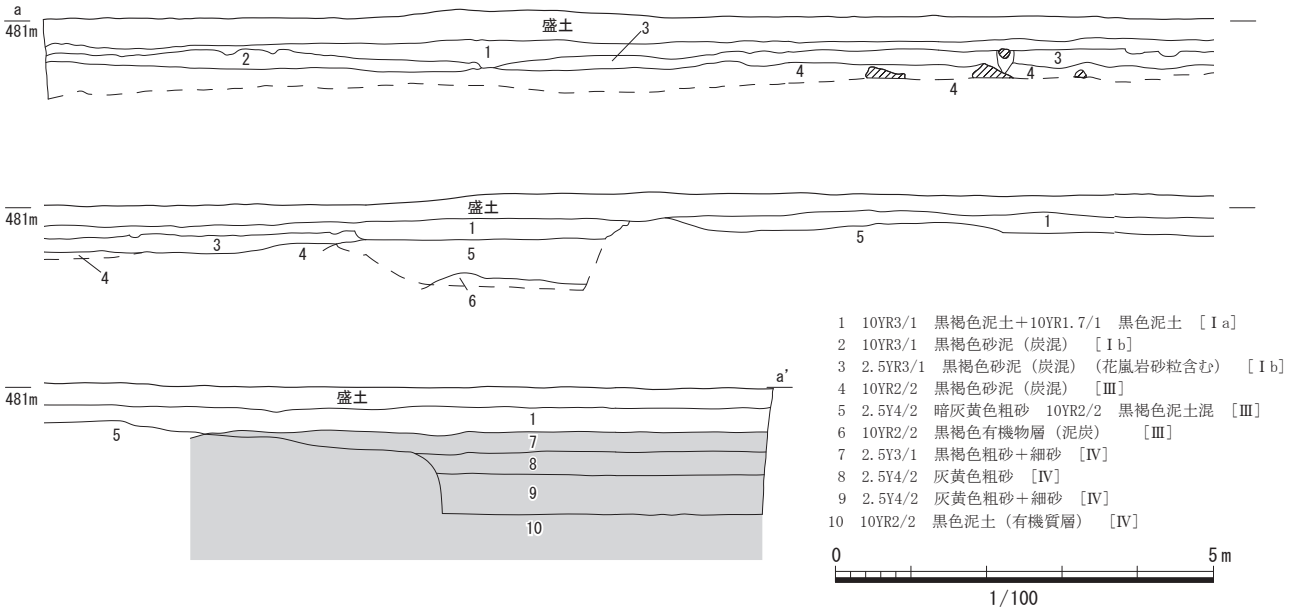
第８図　北側寺地検討図(1)

2009（平成22）年度　1トレンチ平面



第９図　北側寺地検討図(2)

2009（平成22）年度　1トレンチ北壁



第10図　北側寺地検討図(3)

第３節　2010 年度の試掘確認調査

1　調査の方法

(1) 2010（平成 22）年度の調査目的

前節までの知見により、杉崎廃寺跡の地点は周囲よりやや一段高い微高地上に立地していることが明らかになった。しかし、その境界は明確ではなく、とくに土地利用について不明な部分が多かった。

今回の調査では、伽藍中枢部の北及び東側に広がる多目的広場が園舎建設の候補地となったため、遺跡への影響と、伽藍地北東隅の確認、並びに寺地東端の確認を目的とする調査を行うこととなった。

(2) 調査区の設定

伽藍地北東隅の確認、並びに寺地東端の確認を目的とするために２ヶ所の確認トレンチを設定した。

１トレンチ　伽藍地の北東隅に設定した東西トレンチである。僧坊域の北側では 1991（平成 3）～1995（平成 7）年度の調査において、僧房域とその北側を区切る東西方向の３号区画塀跡を確認しており、その東端は調査区外に延びると予測した。2009（平成 21）年度の２トレンチでは、区画施設は確認しなかったため、３号区画塀跡を伽藍中枢部北側を区画する施設と考え、３号区画塀跡を再度確認し、その延長部分を追って伽藍地北東隅の確認に努めた。

２トレンチ　寺地の東側地区の状況を把握するために設定した東西トレンチである。隣接する 1992（平成 4）年度の東トレンチでは硬化面並びにその直上より多数の遺物が発見されたことから、伽藍中枢部の東側に寺院関連の遺構群の存在を予測した。また、寺地東端の確認も目的とした。

(3) 調査の方法

各トレンチともグラウンド造成土を重機で除去した後、第Ⅱ層より下層はすべて人力で掘削を行った。1トレンチでは、第Ⅱ層の残りが良く、上層よりａ・ｂ層と分層できたため、第Ⅱｂ層の上面で遺構検出を行った。2トレンチでは後世の水田耕作により第Ⅱ層の残りが悪く、第Ⅲ層上面で遺構検出を行った。個々の遺構調査では、柱穴跡については柱痕跡や抜き取り跡を平面で確認した後、部分的に段下げを行って検証したが、半裁・完掘は行わなかった。竪穴住居跡、土坑についても同様に平面プランの確認に留めた。暗渠排水や近代の溝などにより壊されてた場合は、その部分を掘り下げ、土層堆積状況の断面観察を行った。また、埋設土器を伴うコの字状石囲炉跡については、平面観察の後に半裁し、断面観察後に土器を取り上げて完掘した。

(4) 遺構番号

遺構番号については、平面プラン確認順の通し番号とした。遺構の性格を表す略号については、掘立柱建物跡をSB、溝跡をSD、竪穴住居跡をSI、土坑をSK、炉跡をSL、柱穴跡をSP、その他をSXで表記した。

(5) 遺構の埋め戻し

調査終了後、厚さ５㎝の川砂を敷き詰めて遺構を養生した後、埋め戻しを行った。

2　調査の経過

(1) 発掘作業の経過（2010年8月11日～9月21日）

8月11日、調査区設定。

17日、1トレンチより重機による掘削を開始。3号区画塀跡に伴う柱穴跡を再検出。飛騨市役所市民福祉部職員2名来跡。

18日、3号区画塀跡に伴う柱穴跡を新たに2基発見。

19日、近現代の水田暗渠と考えられる木材について、実測・写真撮影の上、取り上げて検出範囲を広げる。飛騨市役所市民福祉部職員1名来跡。

20日、第Ⅱｂ層掘削中に古墳の周溝SD57を確認。この面で3号区画塀に伴う柱穴跡の確認作業を行う。17～20日河合英夫氏現地指導。岐阜県教育委員会・松野晶信氏、近藤大典氏来跡。

23日、岐阜県文化財保護センター・小淵忠司氏来跡。市民1名来跡。

24日、1トレンチで3号区画塀跡の東端を確定する。2トレンチ重機掘削終了。

25日、1トレンチ拡張部、重機掘削。2トレンチ精査開始。

26日、1トレンチ拡張部で竪穴住居跡SI3及び柱穴跡を1基検出。また、SI3を壊す柱穴跡を1基確認。3号区画塀跡の北東隅を想定して調査にあたる。2トレンチでは上面が撹乱を受けていると判断し、第Ⅲ層で遺構検出を試みることとする。飛騨市長、副市長、市民福祉部職員4名来跡。

27日、1トレンチの遺構検出状況の確認。24～27日河合英夫氏現地指導。文化庁文化財調査官渡辺丈彦氏、岐阜県教育委員会・松野晶信氏、奈良文化財研究所・島田敏男氏来跡。

31日、2トレンチにおいて、第Ⅳ層の地山の落ち込みを確認するため東へトレンチを延長する。

9月1日、2トレンチ第Ⅲ層で遺構確認作業続行。柱根が残る柱穴跡を発見。掘立柱建物跡となる可能性を想定し、遺構確認を続ける。

2日、1トレンチ写真撮影。帝塚山大学名誉教授・森郁夫氏来跡。

３日、１トレンチ測量開始。２トレンチ遺構確認。９月１～３日河合英夫氏現地指導。

７日、１・２トレンチ写真撮影。２トレンチ測量開始。下呂市教育委員会・馬場伸一郎氏来跡。市民１名来跡。

９日、２トレンチ調査完了。河合英夫氏現地指導。岐阜大学教授・早川万年氏、富山大学教授・鈴木景二氏、岐阜県文化財保護センター・森下茂司氏、可児市教育委員会・長沼毅氏、飛騨市役所総務部古川町史編纂室職員１名来跡。現地説明会 51 名見学。

10 日、１・２トレンチ測量完了。市民３名来跡。

21 日、埋め戻し完了。

写真１：遺構検出作業の様子（西から）

写真２：３号区画塀跡柱掘り方の段下げ作業（北から）

写真３：建物跡 SB58 確認の様子１（南西から）

写真４：建物跡 SB58 確認の様子２（南から）

写真５：寺地東端を確認した様子（南西から）

写真６：現地説明会の様子（北から）

(2) 整理等作業の経過（2011 年 4 月～ 2012 年 1 月）

2011（平成 23）年

4 月、遺物注記作業。

5 月、遺物分類及び接合作業。遺物の分類については土師器や須恵器、瓦などの種別分類、坏や埦などの器種分類を行い、それぞれの器形などから細分類を行った。その中から、遺構や整地層に伴うこと、口縁部や底部が残存することなどを基準に 104 点を抽出した。

5 月 25 日、岐阜県文化財保護センター･小淵忠司氏より土師器高坏･須恵器について指導を受ける。

6 ～ 7 月、遺物実測・拓本・版組作業。

7 月 14 日、富山大学准教授・髙橋浩二氏より弥生時代から古墳時代の遺物について指導を受ける。

7 月 22 日、高山市教育委員会・牛丸岳彦氏より須恵器について指導を受ける。下呂市教育委員会・馬場伸一郎氏より弥生時代の土器・石器について指導を受ける。

7 月 28 日、河合英夫氏より遺物について指導を受ける。

8 ～ 9 月、トレース作業。遺物写真撮影。

10 月～ 11 月、河合英夫氏より遺物について指導を受ける。

12 月 23 日、河合英夫氏より遺物について指導を受ける。

2012（平成 24）年

1 月、河合英夫氏より報告書記載内容について指導を受ける。

第２章　遺跡の環境

第１節　地理的環境

杉崎廃寺跡は、岐阜県飛騨市古川町字あわら地内に所在する。

飛騨市は岐阜県最北端に位置し、北は富山県と県境を接し、南と東は高山市、西は白川村と接する。2004（平成 16）年２月に古川町・河合村・宮川村・神岡町の２町２村が合併し誕生した。人口は約27,000 人、面積は792.31km²である。周囲は3,000mを越える北アルプスや飛騨山脈などの山々に囲まれ、市域の約 92％は山地･森林である。山々の間には小河川や支谷が形成され、宮川や高原川などに注ぐ。これら河川が深いＶ字谷を刻みながら浸食により幾階層もの河岸段丘を形成している。市内唯一のまとまった平地は飛騨市古川町から高山市国府町へ広がる盆地で、一般に古川・国府盆地と呼ばれている。

盆地を取り囲む山地は、船津花崗岩類や手取層、濃飛流紋岩により形成される。船津花崗岩類は本遺跡の北側に広がる。手取層は礫岩・砂岩・頁岩等からなり、本遺跡の南側において宮川を東西に横切るように分布する。濃飛流紋岩は、大規模な火山活動によって形成された火砕流の堆積物であり、溶結凝灰岩である。岐阜県の３分の１に及ぶ広大な範囲に分布しており、本遺跡の南側に広がっている。

古川町では、盆地のやや西寄りを北西から南東へ宮川が貫流する。本遺跡は古川盆地の北西隅近くに立地する。宮川右岸の沖積微高地、標高は約 480 mである。遺跡の東側には山々が連なり、南及び西に向けて緩やかに傾斜し、南西約 700m で宮川に達する（第 11 図）。現在、遺跡の近辺は土地改良事業により平坦に均されているが、以前は「淡（あわら）」といわれる沼地であった。

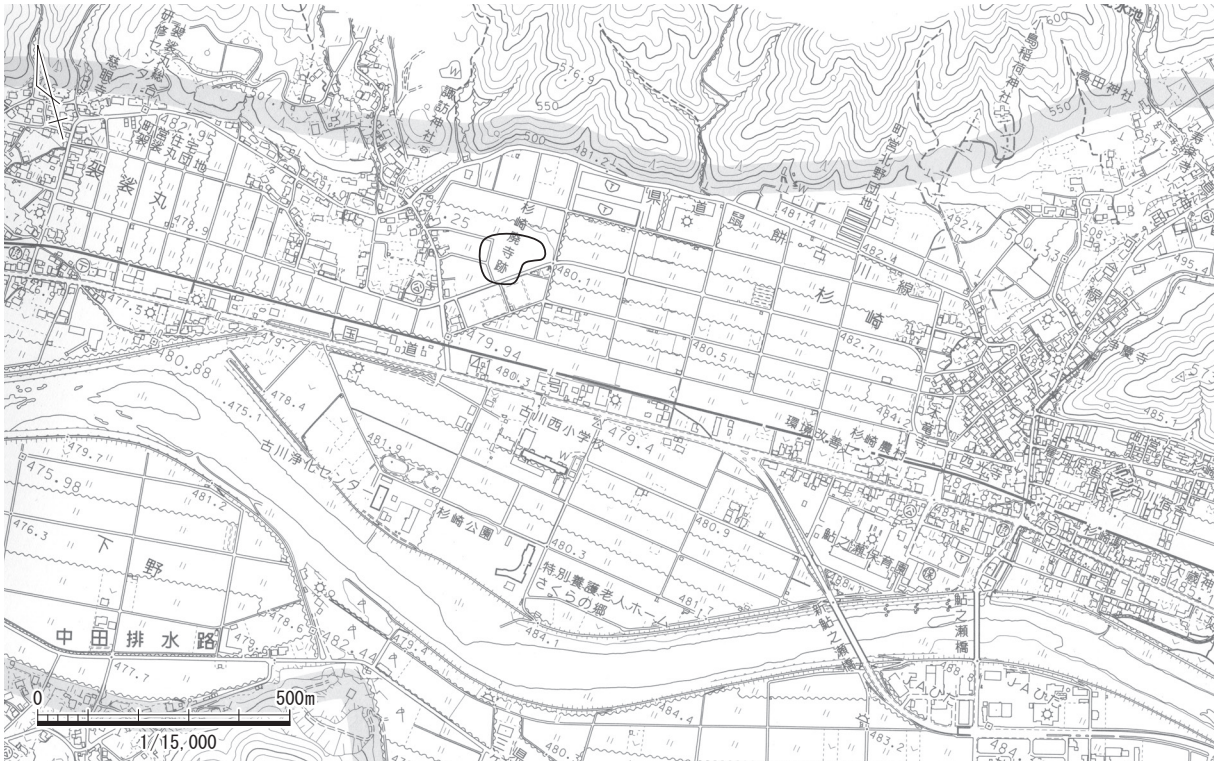
『岐阜県遺跡地図』（岐阜県教育委員会 2001）には「杉崎廃寺跡（岐阜県遺跡番号 21217 － 000151、白鳳時代・寺院跡）」として登録され、伽藍の一部は 1959（昭和 34）年に岐阜県史跡の指定を受けている。

第２節　歴史的環境

1　町内及び周辺の主な遺跡

飛騨市古川町から高山市国府町にかけて、宮川に沿って形成された盆地内の段丘や微高地上に多くの遺跡を確認している。とくに古墳時代以降では、古墳及び古代寺院推定地が数多く分布しており、高山盆地とともに古代飛騨の中心を形成していたと考えられている。

縄文時代　盆地内の麓に広がる上位段丘上には縄文時代の遺跡が多く分布している。これまで古川町内で発掘調査された縄文時代の遺跡には、中野山越遺跡（1）、岡前遺跡（2）、沢遺跡（3）、黒内細野遺跡（4）、御番屋敷遺跡（5）などがある。中野山越遺跡（1）は古川町中野字山越に所在し、1976 ～ 1979（昭和 51 ～ 54）年に発掘調査が行われ、縄文中期から晩期にかけて 32 軒の竪穴住居跡を確認している。1988（昭和 63）年より調査範囲は飛騨市史跡として保存されている。また、出土遺物のうち土器・土製品・石器・石製品 362 点が 1996（平成 8）年に重要文化財の指定を受けた。岡前遺跡（2）は杉崎廃寺跡の北西に位置する遺跡で、縄文中期後半を中心とする竪穴住居跡が８軒調査さ



第 11 図　遺跡周辺地形図

れている。沢遺跡（3）は古川町上気多字沢に所在し、1964（昭和 39）年の予備調査に続き、1967・1986（昭和 42・61）年の２次にわたり調査が行われ、竪穴住居跡や土坑などを発見している。縄文早期前葉の「沢式土器」の標識遺跡としても著名で、調査範囲は 1988（昭和 63）年より飛騨市史跡として保存されている。黒内細野遺跡（4）は古川町黒内字細野に所在する遺跡で、1998（平成 10）年に市道建設に伴い調査された。縄文中期から後期の竪穴住居跡５軒と多数の土坑を発見している。御番屋敷遺跡（5）は 1954（昭和 29）年に開田工事の際に縄文中期の竪穴住居跡が発見され、1959（昭和 34）年に「御番屋敷遺跡先史時代住居跡」として岐阜県史跡に指定された遺跡である。

弥生時代　古川町内では弥生時代の遺跡は非常に少ない。発掘調査により遺構を検出した遺跡では中野大洞平遺跡（6）がある。古川町中野字大洞平に所在し、2002（平成 14）～ 2003（平成 15）・2006（平成 18）年にかけて、農道整備に伴い岐阜県文化財保護センターにより発掘調査が行われた。弥生後期の竪穴住居跡４軒、弥生後期の方形周溝墓１基が調査されている。遺物では弥生中期後半の横羽状文甕の出土が注目された。また、杉崎廃寺跡の調査区内においても北陸系の弥生後期の土器が確認されている。

古墳時代　古墳は宮川の河岸段丘上を中心に点在している。前期の遺跡は少なく、上町遺跡（7）と中野大洞平遺跡（6）で方形周溝墓を調査している。前方後円墳では６世紀代と考えられる古川町信包に所在する信包八幡神社跡古墳（8）が著名である。宮川左岸の段丘端部に位置し、全長 77.8 m、前方部の最大幅は 56 mを有する。埋葬施設は横穴式石室で、奥壁には巨石を上下二段に積み、側壁は割石や扁平な自然石による小口積みである。金銅製の馬具類等が出土している。巨大な切石を用いた横穴式石室として、高野光泉寺古墳（9）や高野水上古墳（10）、中野大洞平第１号墳（11）や第２号墳（12）などがあり、墳形は前者２つは円墳で後者２つは方墳である。また、国府町には前方後円

墳として県内最大級の横穴室石室を持つこう峠口古墳（13）や、方墳の海具江古墳（14）などがある。群集墳は古川町内だけでも現在 103 基を確認している。

集落跡については、上町遺跡（7）において古墳後期の竪穴住居跡や掘立柱建物跡が調査され、また太江遺跡(15)では後期の竪穴住居跡や溝跡が、杉崎廃寺跡では中期の竪穴住居跡が確認されている。

古代　古代の集落跡は、上町遺跡（7）や岡前遺跡（2）、中野大洞平遺跡（6）などで竪穴住居跡や掘立柱建物跡が調査されている。古代寺院については次項で詳述する。

上町遺跡（7）は古川町上町を中心に所在する、東西 1.5km、南北 0.5kmを有する広大な遺跡である。7 世紀末から 8 世紀初頭を中心に、平安期まで存続する遺跡で、とくに奈良期では大形の掘立柱建物跡を含む大小の建物跡 11 棟が調査されている。南北棟と東西棟の建物群で構成され、柱の掘り方は方向を揃えて一辺１ｍ以上であること、宮川に近接した交通の要所であること、円面硯や畿内産土師器などの特殊遺物や須恵器の供膳形態の出土比率が高いことなどから官衙関連施設（荒城郡衙）の可能性が高いと考えられている。また、杉崎廃寺に近接する遺跡として、岡前遺跡（2）や岡前奥御堂跡（16）がある。岡前遺跡（2）では飛騨で初となる「和同開珎」の出土が注目され、岡前奥御堂跡（16）では須恵器片が採集されている。両遺跡からは古川盆地を一望することができる。

平安期の遺構としては、西ヶ洞廃寺跡（17）において鍛冶関連遺構が確認されている。他にも「十能寺」と線刻された須恵器や灰釉陶器が採集されており、山林寺院跡としての可能性が指摘されている。上町遺跡（7）・中野山越遺跡（1）・岡前遺跡（2）・太江遺跡（15）では平安時代の竪穴住居跡が調査されている。

中世・近世　盆地を取り囲む山々の山頂や尾根上には山城が分布する。飛騨国司であった姉小路氏との関連で知られる山城には古川城跡（18）、小島城跡（19）、小鷹利城跡（20）、向小島城跡（21）などが著名である。古川町杉崎字館には岡前館跡（22）として姉小路氏の館跡と推定される遺跡が所在する。盆地北西隅に所在する野口城跡（23）は主郭からは古川盆地や古川城跡を眺望でき、飛騨市史跡に指定されている。増島城跡（24）は古川町片原町に所在する飛騨地方唯一の平城である。金森長近が 1585（天正 13）年に飛騨に進行した後に築城された城である。本丸・二之丸曲輪を中心に 1997（平成 9）年・2004（平成 16）年・2005（平成 17）年・2008（平成 20）～ 2009（平成 21）年と 4 次にわたる調査が行われ、石垣・堀割などの曲輪の状況が明らかになった。天守櫓台は岐阜県史跡に指定されている。杉崎廃寺跡は調査が行われる前までは中世の宮谷寺（きゅうこくじ）跡とみられていた。宮谷寺は幾つかの史料よりその存在は実証されているが、明確な跡地は分かっていない。杉崎廃寺跡背後の谷を宮谷（みやだに）ということもあり、宮谷寺に関する調査も今後の課題である。

2　飛騨の古代寺院

古川･国府盆地内における古代寺院については、杉崎廃寺跡の他に、古川町内では寿楽寺廃寺跡(25)・沢廃寺跡（26）・古町廃寺跡（27）・上町廃寺跡（28）、国府町域内では塔ノ腰廃寺跡（29）・名張廃寺跡（30）・石橋廃寺跡（31）・光寿庵跡（32）・安国寺廃寺跡（33）・堂前廃寺跡（34）などの 11 ヶ寺を数える。高山盆地方面では、国分寺・国分尼寺・三仏寺廃寺跡・東光寺跡・大幢寺跡の 5 ヶ寺が知られるが、分布状況を見ても、飛騨における古代寺院造営の主体は古川から国府にかけての盆地にあったことが分かる。古川・国府盆地の古代寺院のうち、発掘調査が行われたのは今回報告の杉崎廃寺、寿楽寺廃寺跡、古町廃寺跡、石橋廃寺跡の 4 ヶ寺である。

寿楽寺廃寺跡は杉崎廃寺跡から最も近く、東 1.5㎞に位置する。1998（平成 10）～ 2000（平成 12）年にかけて岐阜県文化財保護センターにより調査が行われた。7 世紀第 3 四半期の創建と推測され、飛騨地方で最古の寺院と考えられている。『日本書紀』に記述され、朱鳥（686）年に新羅僧行心が大津皇子の謀反に関わって配流された「飛騨国伽藍」の可能性が指摘されている。遺構は講堂跡とそれに取り付く回廊跡が検出されている。遺物は「高家寺」と墨書された須恵器が注目される他、鴟尾・塑像・蹄脚硯・三足火舎などの寺院に関わるものが多く出土している。創建時の瓦と考えられ、3km ほど西へ離れた信包中原田古窯跡で生産された単弁八葉蓮華文軒丸瓦は、近江衣川廃寺、信濃明科廃寺、甲斐天狗沢瓦窯などとの共通点が指摘されている。また、忍冬文単弁六葉蓮華文軒丸瓦は尾張元興寺や河内野中寺と同型異笵であることが判明している。このことは、『先代旧事本紀』成務天皇朝の記事にある尾張氏の一族が斐陀（飛騨）国造に就任したこととの関連が注目されている。

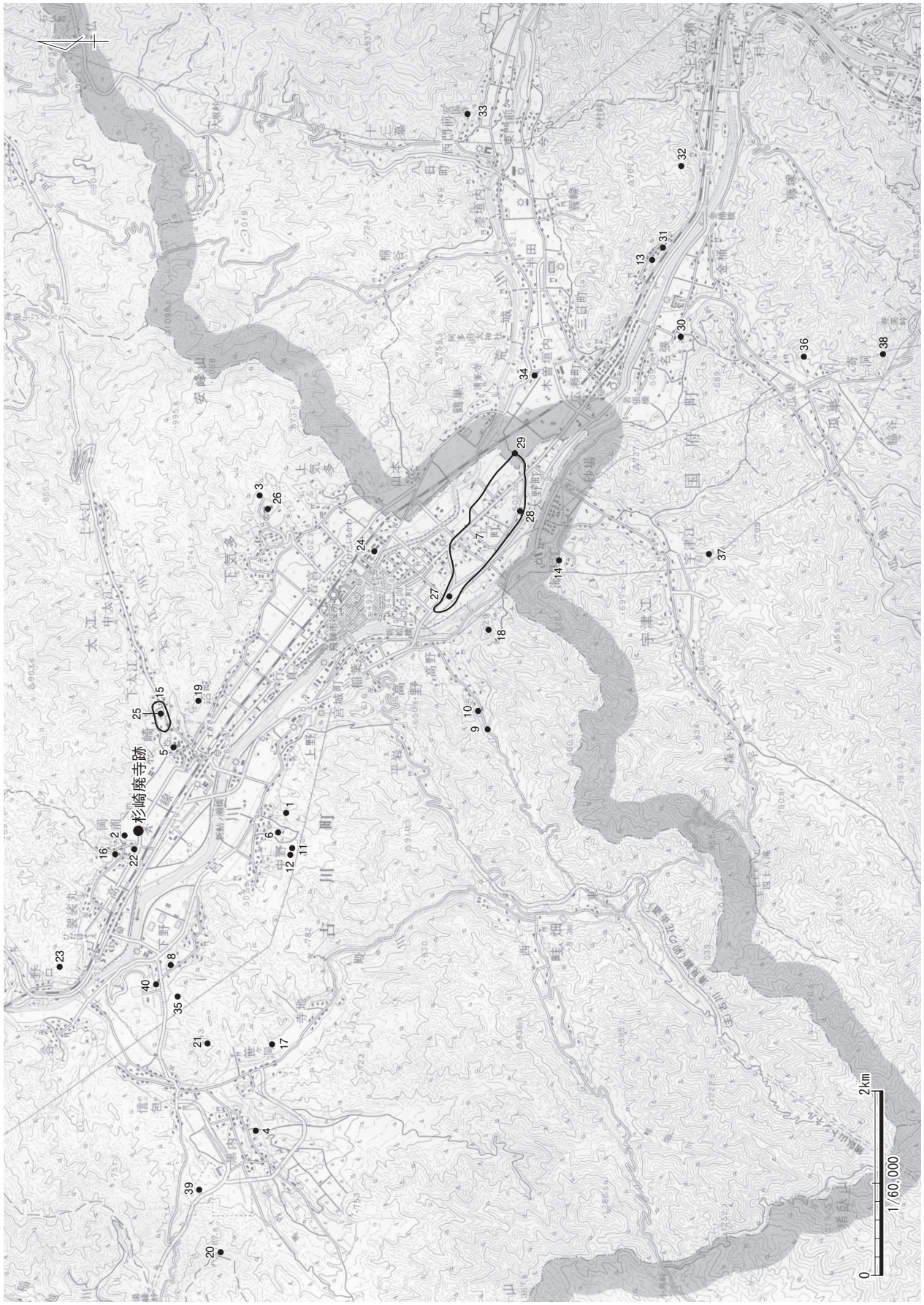
古町廃寺跡は杉崎廃寺跡の南東 4.5㎞に位置する。上町遺跡の調査に伴い 1988（昭和 63）年に発見された。限られた調査範囲のため明確な寺院関連遺構は検出されていないが、約 2,000 点の瓦片類が集中して出土したことから古代寺院推定地となっている。

石橋廃寺跡は国府町上広瀬に所在し、杉崎廃寺跡の南東 8.5km に位置する。1986（昭和 61）年に調査され、寺院に関わる遺構は発見されていないが、寺域の境域建物とされる礎石建物跡や付近からは塔心礎も確認されている。遺物では人物戯画が線刻された平瓦や円面硯、飛騨地方で初の出土となった畿内産土器など知られる。他の寺院については、白鳳期の軒瓦などの出土により寺院跡と推定されている。

これらの寺院に瓦を供給した窯跡としては、古川町内では信包中原田窯跡（35）、国府町内では釜洞窯跡（36）・芦谷古窯跡（丸山窯跡）（37）・瓜巣わせ洞古窯跡（下り谷窯跡）（38）などが知られ、いずれも瓦陶兼業窯と考えられている。町内での須恵器窯跡としては信包塩屋古窯跡（39）・下野羽根坂古窯跡（40）が知られている。

飛騨に寺院が林立することは、『養老賦役令』にある庸調の代わりに木工を都で従事させた、いわゆる「飛騨匠」との関連を想定させるが、これは万葉集に残る歌に木工に関したものがあることからも裏付けられる。造営者の姿としては、西暦 749 年に国分寺造営に際して、飛騨国造高市麻呂が財物を寄進していることからその一端を垣間見ることができる。

律令制下に飛騨国は下国とされていた。しかし、狭小な盆地にこれだけの寺院跡が存在することは、当地の仏教を受容した文化力の高さとともに、飛騨の卓越した木工技術が成し得た技と言わざるを得ない。



第 12 図　杉崎廃寺跡と周辺の遺跡分布図

第２表　杉崎廃寺跡と周辺の遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	時　代	種別	備　考
－	杉崎廃寺跡	飛騨市古川町杉崎	古代（白鳳）	社寺跡	白鳳後期建立の古代寺院
1	中野山越遺跡	飛騨市古川町中野	縄文・平安	集落跡	出土品は重要文化財
2	岡前遺跡	飛騨市古川町杉崎	縄文・古代（平安）	集落跡	和同開珎出土
3	沢遺跡	飛騨市古川町上気多	縄文	集落跡	縄文時代早期「沢式土器」の標識遺跡
4	黒内細野遺跡	飛騨市古川町黒内	縄文	集落跡	縄文時代中期の集落跡
5	御番屋敷遺跡	飛騨市古川町太江	縄文	集落跡	岐阜県史跡　縄文時代中期の集落跡
6	中野大洞平遺跡	飛騨市古川町中野	縄文・弥生・古墳・古代	散布地	方形周溝墓
7	上町遺跡	飛騨市古川町上町	古墳・古代・中世	集落跡	官衙関連施設（荒城郡衙）の可能性あり
8	信包八幡神社跡古墳	飛騨市古川町信包	古墳	古墳	岐阜県史跡　前方後円墳
9	高野光泉寺古墳	飛騨市古川町高野	古墳	古墳	岐阜県史跡　円墳
10	高野水上古墳	飛騨市古川町高野	古墳	古墳	岐阜県史跡　円墳
11	中野大洞平第１号古墳	飛騨市古川町中野	古墳	古墳	岐阜県史跡　方墳
12	中野大洞平第２号古墳	飛騨市古川町中野	古墳	古墳	岐阜県史跡　方墳
13	こう峠口古墳	高山市国府町広瀬町	古墳	古墳	岐阜県史跡　前方後円墳　県内最大級の横穴式石室
14	海具江古墳	高山市国府町宇津江	古墳	古墳	方墳
15	太江遺跡	飛騨市古川町太江	古墳・古代	集落跡	－
16	岡前奥御堂跡	飛騨市古川町杉崎	縄文・古代・中世	散布地	－
17	西ヶ洞廃寺跡	飛騨市古川町寺地	古代（平安）	社寺跡	「十能寺」と線刻の須恵器出土
18	古川城跡	飛騨市古川町高野	中世（室町）	城館跡	岐阜県史跡
19	小島城跡	飛騨市古川町沼町	中世（室町）	城館跡	岐阜県史跡
20	小鷹利城跡	飛騨市古川町信包・飛騨市河合町稲越	中世（室町）	城館跡	岐阜県史跡
21	向小島城跡	飛騨市古川町信包	中世（室町）	城館跡	岐阜県史跡
22	岡前館跡	飛騨市古川町杉崎	中世	城館跡	－
23	野口城跡	飛騨市古川町野口	中世	城館跡	－
24	増島城跡	飛騨市古川町片原町	近世初頭	城館跡	岐阜県史跡
25	寿楽寺廃寺跡	飛騨市古川町太江	古代（白鳳）	社寺跡	「高家寺」と墨書の須恵器出土
26	沢廃寺跡	飛騨市古川町上気多	古代（白鳳）	社寺跡	丸瓦出土
27	古町廃寺跡	飛騨市古川町向町	古代（白鳳）	社寺跡	大量の瓦片出土
28	上町廃寺跡	飛騨市古川町上町	古代（白鳳）	社寺跡	－
29	塔ノ腰廃寺跡	高山市国府町広瀬町	古代（白鳳）	社寺跡	別名：大日廃寺跡
30	名張廃寺跡	高山市国府町名張	古代（白鳳）	社寺跡	－
31	石橋廃寺跡	高山市国府町広瀬町	古代（白鳳）	社寺跡	塔心礎・出土品は高山市指定文化財
32	光壽庵跡	高山市国府町上広瀬	古代（白鳳～平安）	社寺跡	出土瓦は岐阜県重要文化財
33	安国寺廃寺跡	高山市国府町西門前	古代	社寺跡	－
34	堂前廃寺跡	高山市国府町木曽垣内	古代	社寺跡	－
35	信包中原田古窯	飛騨市古川町信包	古代（白鳳・奈良）	古窯跡	－
36	釜洞窯跡	高山市国府町瓜巣	古代（白鳳）	古窯跡	－
37	芦谷古窯跡	高山市国府町宇津江	古代（白鳳・奈良）	古窯跡	－
38	瓜巣わせ洞古窯跡	高山市国府町瓜巣	古代（白鳳）	古窯跡	－
39	信包塩屋古窯跡	飛騨市古川町信包	古代（奈良）	古窯跡	－
40	下野羽根坂古窯跡	飛騨市古川町下野	古代（奈良）	古窯跡	－

※第２表の番号は第12図と同じ。

第３章　調査の成果

第１節　層　序

1991（平成３）年から1995（平成７）年にかけて行われた発掘調査では、調査区内の基本層序について大きく６層に区分された。伽藍中枢部の整地や掘込地業、基壇の築成など、大規模な土層の移動を明確にし、堆積土の検討を行っている。

Ⅰ層　近世以降の遺物を含む。土質や分布によりａ・ｂの２層に細分している。

Ⅰａ層は水田耕土と床土からなる表土層。褐灰色を呈し､断面で複数面を確認した場合は分層した。

Ⅰｂ層は明黄褐色砂層に黒褐色土がラミナ状及び斑紋状に混在する砂質土層ないし黒色土である。黒褐色土が混じる明黄褐色砂層は講堂基壇より北側に分布する。黒色土は近世の遺物を包含する。

Ⅱ層　杉崎廃寺創建後に堆積した土層である。土質によりａ・ｂの２層に細分される。

Ⅱａ層は14～16世紀までの中世遺物を包含する黒色土層。講堂基壇周辺から南側に分布する。

Ⅱｂ層は寺院焼失後に堆積した土層と、創建から焼失までの間に堆積した土層に分けられる。前者は黒褐色を呈し、伽藍地を覆う土層。土質は緻密でよく締まり粘性を有する。下位を中心に焼土粒子や炭化物粒子を含む。後者は僧房域周辺で確認される。創建後、建て替えられた建物跡については、Ⅱｂ層中で検出できる場合がある。本層が当該期の遺物包含層である。

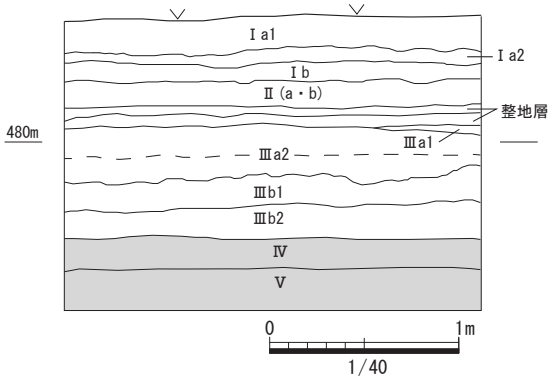
整地層･版築基壇　寺院の造営にあたって整地された土層で、整地層は僧房域を中心に二分される。掘立柱建物の掘り込み面の観察から、少なくとも２回以上の造成が行われている。なお、金堂・塔間は粘土敷となっている。主要堂塔の版築基壇として、黒色土と黄砂の薄層の交互堆積が確認され、黄白色粘土や花崗岩片が混じる。また、講堂の北側では掘込地業を伴う版築層が確認され、現伽藍に先行する基壇建物の存在が推測された。金堂や塔の基壇とは異なり、黄白色粘土を多用し、黒色土と黄砂の互層が確認されている。

Ⅲ層　杉崎廃寺建立以前の堆積土層である。層界は不明瞭であるが土質によりａ・ｂの２層に細分される。Ⅲａ層は黒色を呈し、土質はやや緻密で粘性を有する。黄色粒子の有無によってさらに二分される。調査区の西端付近では杉崎廃寺跡以前と推測される水田跡が確認される。西側地区の道路予定地区では杉崎廃寺跡創建に先行する掘立柱建物跡を確認している。

Ⅲｂ層はⅢ層からⅣ層への漸移層。古墳中期の遺物が包含するⅢｂ１層と、下位のⅣ層が浸食するⅢｂ２層に細分される。

Ⅳ層　宮川に由来する、にぶい黄橙色砂層。河岸礫層を覆う土層で、地山である。

Ⅴ層　宮川に由来する河岸礫層である。杉崎廃寺跡が立地する微高地において、山麓からの伏流水はⅤ層を通って宮川へ注ぐ。



第13図　基本土層図

第２節　遺構と遺物

１　１トレンチ

（1）調査概要（第 14・15 図）

１トレンチは、伽藍地区画塀の北東隅屈曲部の確認を目的に３号区画塀跡の東側延長線上に設定した調査区である。３号区画塀跡は僧房域の北辺を区切る区画塀である。その西端は伽藍地西辺の区画塀に接続すると考えられるが、東端は不明であった。伽藍地北辺区画塀の主軸方位は日本測地系国土座標に対し西に４度偏っており、世界測地系国土座標では西に 2.5 度偏っている。

まず、過去の調査で確認されていた３号区画塀跡の東端柱穴列２基の検出後、想定される主軸方向及び柱間間隔を考慮し、第Ⅱｂ層上面より手作業による確認作業を進めた。何度も確認作業を行い、Ⅱｂ層を掘り下げる過程で、新たに２基の柱穴跡 SP1・SP2 を確認した。それより東側については礫が充填された古墳の周溝 SD57 が存在しており、３号区画塀跡の続きは確認することはできなかった。これは３号区画塀跡が周溝の先まで延びていないことを示すものであり、３号区画塀跡の東端は柱穴跡 SP2 であることを想定して、調査区を南に振って新たな拡張区を設定した。その結果、第Ⅱｂ層直下の第Ⅲ層上面において新たに柱穴跡 SP4 を確認した。さらに、その先で発見した竪穴住居跡 SI3 を壊す柱穴跡 SP5 を確認した。これにより３号区画塀跡が柱穴跡 SP2 で南へ屈曲することが明らかとなり、伽藍地を区画する塀であることが明確となった。これらの成果から、伽藍地は概ね東西 54m、南北 80m 前後の規模と推定できよう。

遺構確認面と柱穴埋土の土質とが非常に似ているため、柱穴跡の南側半分の段下げを行い、平断面により再度遺構の追認作業を行った。今回調査では，それ以上の遺構覆土掘削を行っていないため、遺構確認時に出土した遺物が遺構の時期を考える上での資料となる。このため現状での知見となるが、確認時に遺構内から出土した遺物については出土層位ではなく遺構別に記録した。

（2）遺構及び遺構内出土遺物（第 16 ～ 18 図）

竪穴住居跡 SI3　拡張区において第Ⅳ層地山面上で確認した。北側以外は調査区外に及んでおり、全容は知り得ない。杉崎廃寺跡の伽藍地北東隅を区画する区画塀の一つ柱穴跡 SP5 に壊されている。出土遺物は遺構確認時に発見された土師器片 116 点である。そのうちの３点（1 ～ 3）を図示した。

1 は有段口縁を特徴とする北陸系の壺の口頸部片である。2 は高坏の坏部片。3 は高坏の脚柱部片である。ともに器面はヘラミガキによる調整である。遺構の時期は、出土遺物の年代観から古墳時代前期初頭と考えられる。

整地層　杉崎廃寺造営にあたっての整地層である。1 トレンチ西側の旧調査区の範囲内において、3 号区画塀跡再確認の際に遺物が出土した。その出土点数は、土師器小片 15 点、須恵器小片 119 点、瓦小片 1 点、モモの種子 1 点の計 136 点である。そのうち、土師器高坏 1 点（4）、須恵器坏・埦・蓋・鉢類 10 点（5 ～ 14）の計 11 点を図示した。

4 は土師器高坏の脚部片。低脚タイプの高坏である。時期は古墳時代中期と考えられる。

5 ～ 14 は須恵器坏・埦・蓋・鉢類の破片。5 はヘラ切り手法により坏Ｈ身の底部片とみられるもの。6 ～ 8 は蓋で、口縁部が残存し、6・7 の端部はほぼ垂直に屈曲する。8 は内面に研磨痕と墨の付着が観察できるもので、転用硯の可能性がある。9・10 は坏の破片であり、10 は坏Ｂの高台部片である。

11 は埦Ａの底部片で、糸切り未調整の製品。12 は底形が大きく、器壁に厚みがあるため鉢と考えられる。内面には研磨痕と墨の付着が確認できるもので、転用硯の可能性がある。13・14 は鉢の口縁部から胴部にかけての破片。

Ⅱｂ層　杉崎廃寺の創建から焼失までの間に形成された土層で、１トレンチの遺構確認面である。確認作業に伴い、弥生土器の小片２点、土師器小片 347 点、須恵器小片 144 点、瓦片１点、木片５点の計 499 点が出土。そのうち、弥生甕（15）・壺（16）の２点、土師器器台（17）・甕（18）の２点、須恵器蓋（19）の１点を図示した。

15 は横羽状文甕の胴部片で、弥生中期後半の内垣内式に属する。16 は頸部に横位の櫛描平行線文が施された中部高地系の甕と推測され、時期は弥生中期末から後期初頭の範疇とみられる。

17 は器台の脚柱部片。弥生後期終末から古墳前期初頭頃に属すると考えられる。18 は北陸系の有段口縁甕の破片。内面に段がないことから古墳前期初頭頃に属すると推測される。

19 は須恵器蓋の口縁部片。天井部、口縁端部がやや丸くなることから８世紀前半頃の所産と考えられる。Ⅱｂ層が杉崎廃寺存続期間に形成された根拠となる資料である。

３号区画塀跡（第 18 図）　僧房域北辺を区画する施設である３号区画塀跡として、16 基の柱穴が 39 ｍにわたり確認されていた。その東側で柱穴跡２基（SP1・SP2）を新たに確認し、今回の調査で北辺は全長 41.5 ｍとなった。主軸線上が僧房域第３期の建物と柱筋を揃えることから８世紀後半代に築造されたものと考えられた。また SP2 を東端として、南へ直角に折れる線上に柱穴跡 SP4 と SP5 が確認されたことから、伽藍中枢部と僧房域を合わせた伽藍地全体を取り囲む区画塀であることがほぼ確定されたものと考えられる。

伽藍地の北辺を区切る３号区画塀跡は、全体に掘り方が大きく柱筋の通りもよいが、柱間間隔がやや不揃いである。柱間寸法は大部分が 2.40 ｍないしは 2.70 ｍ（８～９尺）を基本としているが、３ｍを超えるものもある。今回確認した柱穴間の柱間寸法は、北辺東端の SP1 － SP2 間が 2.20 ～ 2.25 ｍ（約 7.5 尺）、南辺東端の SP2 － SP4 間が 2.40 ｍ（８尺）、SP4 － SP5 間が 2.25 ｍ（7.5 尺）で、概ね北辺の柱間寸法と一致する結果であった。

遺物は、柱穴跡 SP1 から土師器小片 19 点、柱穴跡 SP2 から土師器小片 15 点、須恵器小片１点の計 35 点が出土。SP2 から出土した須恵器小片１点（20）を図示した。図示した 20 は坏Ｇ身の底部片と考えられ、過去の３号区画塀跡を構成する柱穴跡からは埦Ａと坏Ｂが出土しているが、坏Ｇ身の出土は今回が初めてである。

(3) 遺構外出土遺物

Ⅱａ層　弥生土器小片１点、土師器小片 66 点、須恵器小片 11 点、石製品１点の計 79 点が出土した。そのうち、弥生壺の小片１点（21）を図示した。

21 は外面に櫛描波状文が施された壺の胴部片で、時期は弥生中期末から後期の範疇と考えられる。

Ⅰｂ層　弥生土器小片２点、土師器小片 70 点、須恵器小片９点、灰釉陶器小片１点、木片２点、石製品２点の計 86 点が出土した。そのうち、弥生甕の小片１点（22）、土師器坏の略完形品１点（23）、灰釉陶器埦の高台部片１点（24）、磨製石斧の完形品１点（25）の計４点を図示した。

22 は弥生甕の口縁部片で、口縁部は短く外反し、頸部下端の内面に弱い段を有する。形状より弥生後期の西日本系のもののと考えられる。

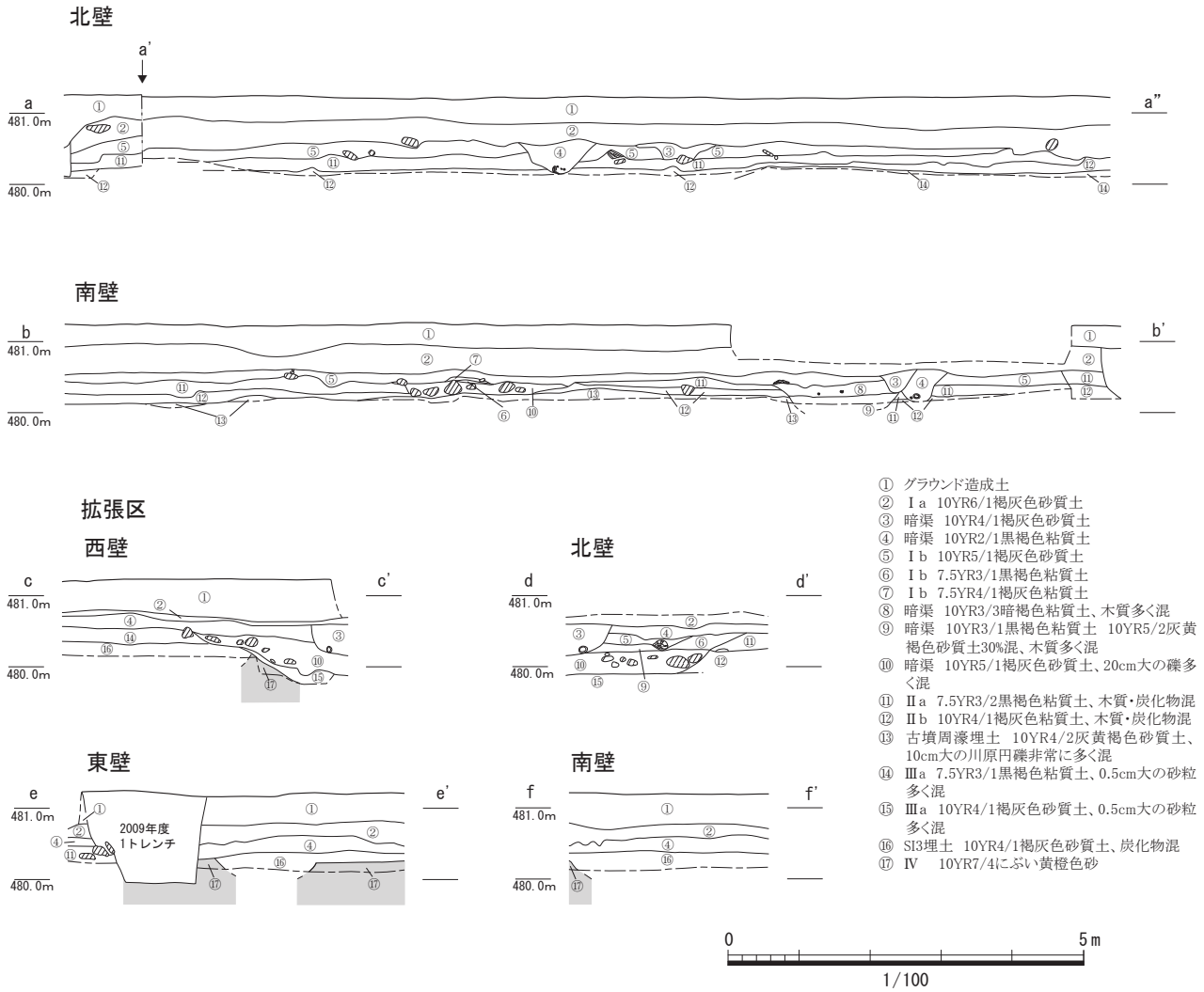
23 は土師器坏の略完形品で、平底の底部からやや丸みをもって立ち上がる器形。口縁部はヨコナデ、

第14図　1トレンチ平面図

体部は指頭による調整である。時期は概ね８世紀代の所産と考えられる。

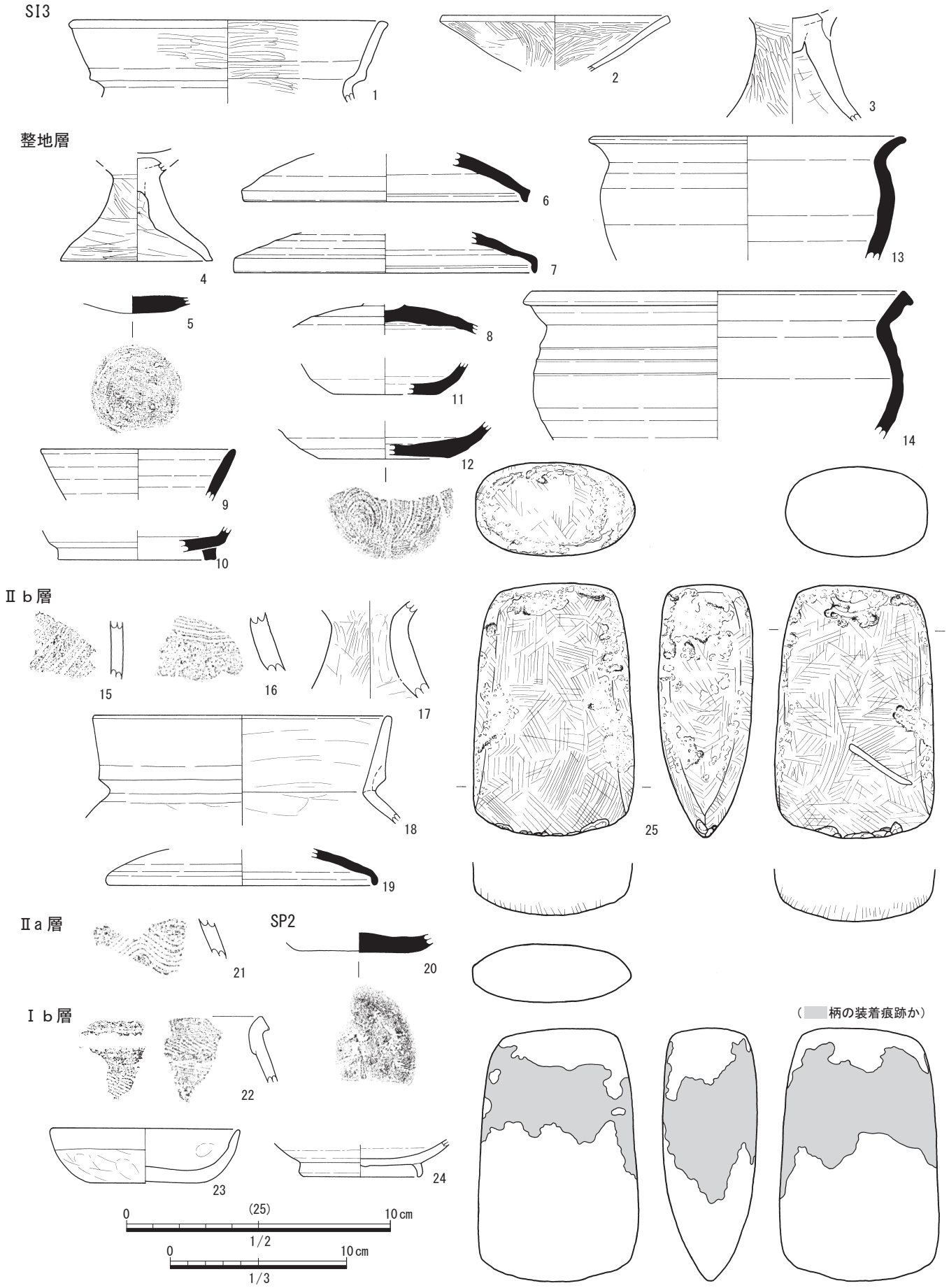
24は灰釉陶器埦の高台部片。高台部は三日月形の高台が取りつくもので、黒笹90窯式に比定される。時期は９世紀後半の範疇と考えられる。

25は緑色岩類製の太型蛤刃石斧の完形品である。製作時の敲打痕及び研磨痕が観察できる。また、表面の柄装着部分には他の礫皮と比べ色調が異なっていることから柄装着に起因する可能性もある。所謂大陸系磨製石器の一つで、中部高地からの搬入品とみられる。時期は弥生中期後半と考えられる。飛騨地方の発掘例ではウバガ平遺跡（高山市）に次いで２例目である。

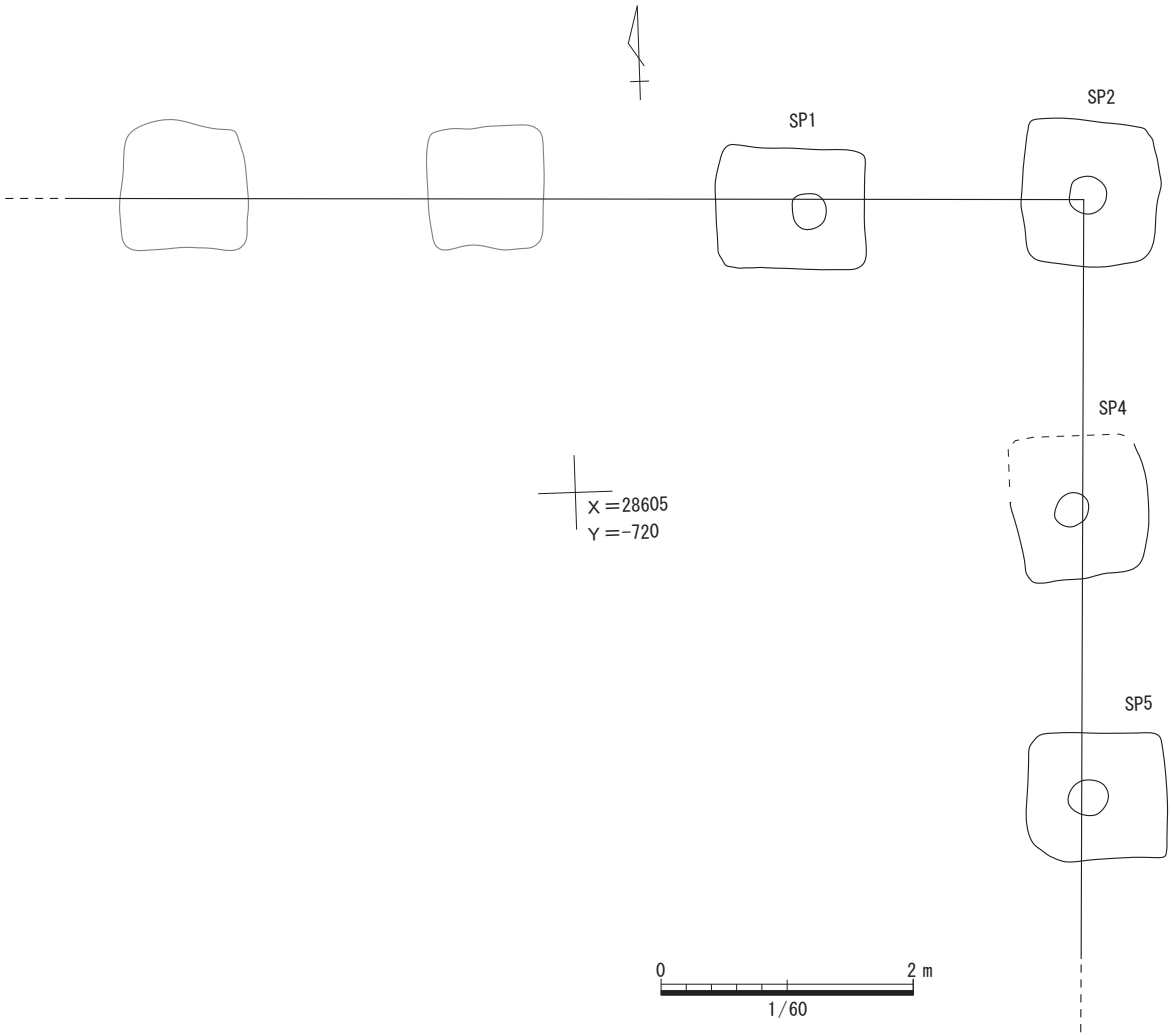


第15図　1トレンチ断面図

第16図　1トレンチ遺物出土状況図



第 17 図　１トレンチ出土遺物実測図



第18図　3号区画塀跡遺構図（薄いラインは前回調査で検出した遺構）

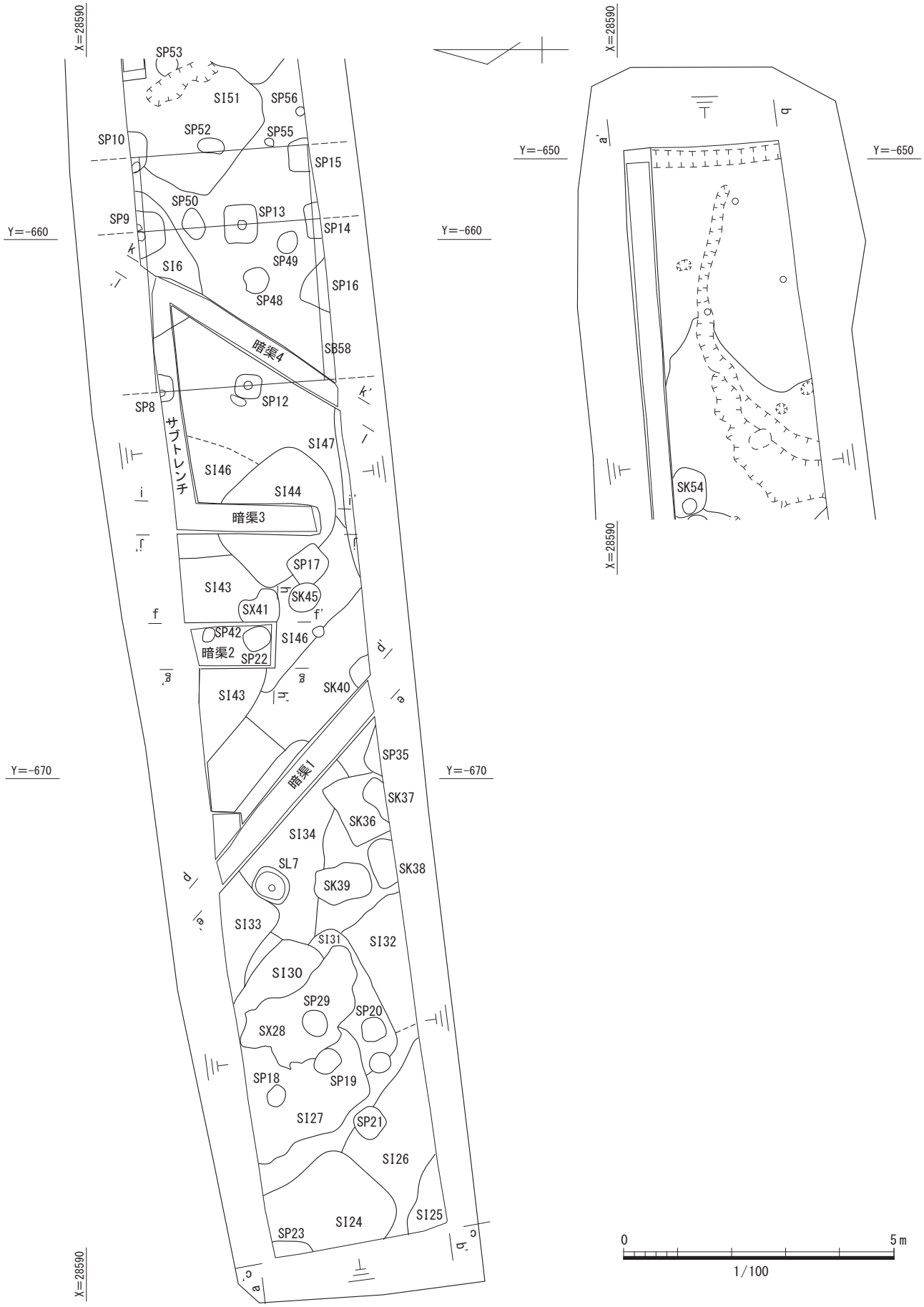
2　2トレンチ

（1）調査概要（第 19 ～ 21 図）

２トレンチでは、杉崎廃寺跡創建後に堆積した第Ⅱ層が後世の水田耕作による影響で部分的にしか残っておらず、過去の東トレンチで確認していた硬化面が第Ⅲ層上面にあたることから、古墳時代と古代の遺構を同一面において確認することとなった。確認された遺構は、竪穴住居跡が 15 棟、掘立柱建物跡が２棟、土坑が８基、不明遺構が１基、柱穴跡が 26 基である。

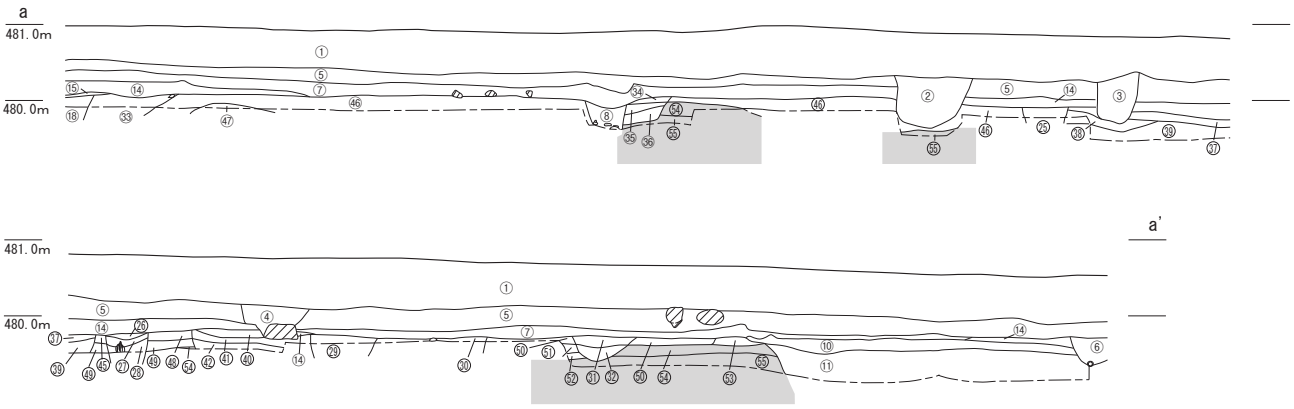
古代の遺構では、柱が残存する柱掘り方プランを２穴（SP8・SP9）確認した。残存する柱径は約 10cmで、伽藍中枢部に比べて半分以下の太さである。この２穴を手がかりに建物を復元したのが建物跡 SB58 である。主軸方位が杉崎廃寺の主要堂塔と揃っていることと、確認時に出土した遺物の年代観より概ね寺院に関連する建物跡と推測される。

２トレンチの東端では、第Ⅳ層の地山が大きく落ち込む地点を平断面で確認することができ、これまでの調査成果と合わせると寺地の東端を確定することができたものと考えられる。この知見により、寺地は最大長部で概ね東西 130m、南北 110m と推測される。

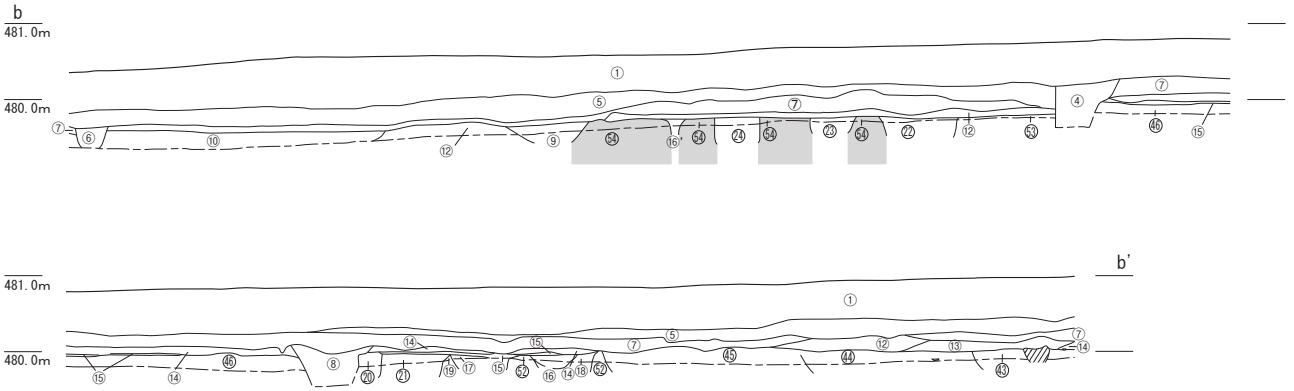


第19図　2トレンチ平面図

北壁土層断面図



南壁土層断面図

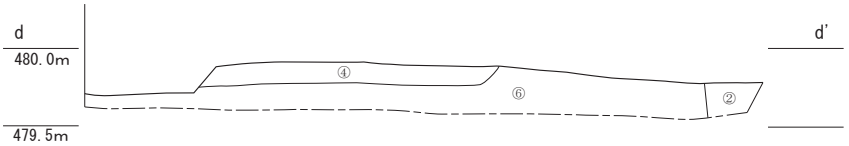


西壁土層断面図

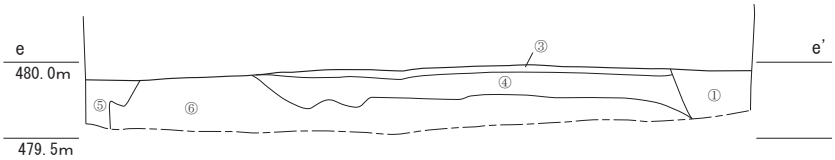
① グラウンド造成土
② 暗渠　10YR5/2 灰黄褐色砂礫土、30cm 大の礫を混
③ 暗渠　10YR5/2 灰黄褐色砂礫土、30cm 大の礫を混
④ 暗渠　10YR5/2 灰黄褐色砂礫土、30cm 大の礫を混
⑤ Ⅰa　7.5YR4/1 褐灰色粘質土、10cm 大の小礫混
⑥ 暗渠　10YR4/2 灰黄褐色粘質土
⑦ Ⅰb　10YR4/2 灰黄褐色粘質土
⑧ 暗渠　10YR4/2 灰黄褐色粘質土
⑨ 撹乱　10YR3/2 黒褐色粘質土、しまりわるい
⑩ 落ち込み埋土　10YR4/1 褐灰色粘質土、炭化物混
⑪ 落ち込み埋土　10YR4/1 褐灰色粘土、炭化物混
⑫ Ⅰc　10YR5/1 褐灰色砂質土、1cm 大の礫、植物根多く混
⑬ Ⅰd　10YR4/1 褐灰色砂質土、1cm 大の礫多く混
⑭ Ⅱa　10YR4/1 褐灰色砂質土、炭化物混
⑮ Ⅱb　10YR5/2 灰黄褐色砂質土
⑯ SK38 埋土　10YR5/1 褐灰色粘質土しまりよし
⑯' SP56 埋土　10YR7/6 明黄褐色粒多く混
⑰ SK37 埋土（平安？）　10YR3/1 黒褐色粘質土、炭化物非常に多く混
⑱ SP23 埋土（平安？）　10YR3/1 黒褐色砂質土、炭化物混しまりよし
⑲ SK36 埋土　10YR4/2 灰黄褐色粘質土、炭化物混しまりよし
⑳ SP40 埋土（柱穴を切る）　10YR3/1 黒褐色粘質土、炭化物混
㉑ SP35 埋土　10YR5/3 にぶい黄橙色粘質土しまりわるい
㉒ SP16 埋土　10YR4/1 褐灰色粘質土
㉓ SP14 埋土　10YR4/1 褐灰色砂質土、炭化物混
㉔ SP15 埋土　10YR4/1 褐灰色砂質土、炭化物混
㉕ SP 埋土　10YR4/1 褐灰色砂質土、炭化物混
㉖ SP ８埋土　10YR6/1 褐灰色粘質土、炭化物混
㉗ SP ８埋土　10YR5/1 褐灰色粘質土、炭化物混
㉘ SP ８埋土　10YR4/1 褐灰色粘質土、炭化物混
㉙ SP ９埋土　10YR4/1 褐灰色粘質土、炭化物混
㉚ SP10 埋土　10YR4/1 褐灰色粘質土、炭化物混
㉛ SK11 埋土　10YR5/1 褐灰色粘質土、10YR6/4 にぶい黄橙色砂 20%
㉜ SK11 埋土　10YR5/1 褐灰色粘質土、10YR6/4 にぶい黄橙色砂 30%
㉝ SI24 埋土　10YR5/1 褐灰色粘質土、炭化物多く混しまりわるい
㉞ SI34 埋土　10YR5/1 褐灰色粘質土、炭化物混
㉟ SI34 埋土　10YR6/1 褐灰色粘質土、炭化物混
㊱ SI34 埋土　10YR4/1 褐灰色粘質土、炭化物混
㊲ SI46 埋土　10YR4/1 褐灰色砂質土、炭化物混
㊳ SI46 埋土　10YR6/3 にぶい黄橙色砂質土
㊴ SI46 埋土　10YR5/1 褐灰色粘質土、炭化物混
㊵ SI ６埋土　10YR5/1 褐灰色粘質土、炭化物混
㊶ SI ６埋土　10YR4/1 褐灰色粘質土、炭化物混
㊷ SI ６埋土　10YR3/1 褐灰色粘質土、炭化物混
㊸ SI25 埋土
㊹ SI26 埋土
㊺ SI32 埋土
㊻ Ⅲa　10YR3/2 黒褐色粘質土、炭化物混
㊼ SI27 埋土
㊽ Ⅲa　10YR6/1 褐灰色粘質土、砂粒少し混
㊾ Ⅲa　10YR4/1 褐灰色粘土
㊿ Ⅲa　10YR6/1 褐灰色粘土
(51) Ⅲa　10YR5/1 褐灰色粘土
(52) Ⅲa　10YR6/1 褐灰色粘土
(53) Ⅲb　10YR5/2 灰黄褐色粘質土、10YR7/4 にぶい黄橙色砂質土 40%
(54) Ⅳa　10YR6/4 にぶい黄橙色砂
(55) Ⅳb　10YR6/2 灰黄褐色粘土

第20図　２トレンチ断面図(1)

暗渠１　北東壁

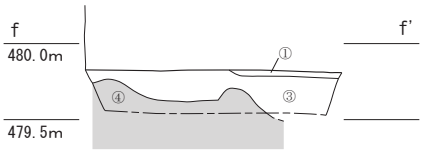


暗渠１　南西壁

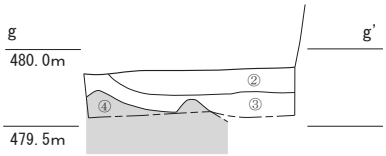


① SI33埋土　10YR4/1褐灰色粘質土
② 10YR4/1褐灰色粘質土、砂粒・炭化物混
③ SI34埋土　10YR3/1黒褐色砂質土、黄橙色粒砂質ブロック多く混
④ SI34埋土　10YR5/1褐灰色粘質土、炭化物混
⑤ SP　埋土　10YR3/1黒褐色粘質土、炭化物混
⑥ Ⅲb　10YR5/2灰黄褐色粘質土、10YR7/4にぶい黄橙色砂質土40%

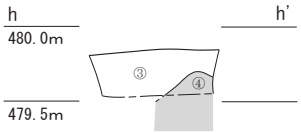
暗渠2　東壁



暗渠2　西壁

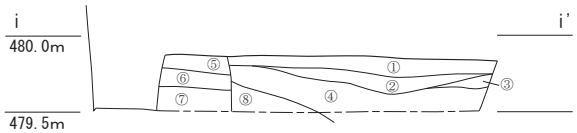


暗渠2　南壁

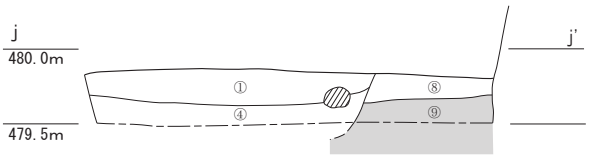


① SK41埋土　10YR6/1褐灰色粘質土、10YR8/4浅黄橙色粘土20%混
② 10YR4/1褐灰色砂質土、炭化物混
③ SI43埋土　10YR6/1褐灰色砂質土、10YR6/3にぶい黄橙色砂質土20%混
④ Ⅳa　10YR6/4にぶい黄橙色砂

暗渠3　東壁

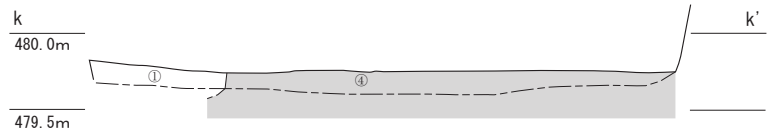


暗渠3　西壁

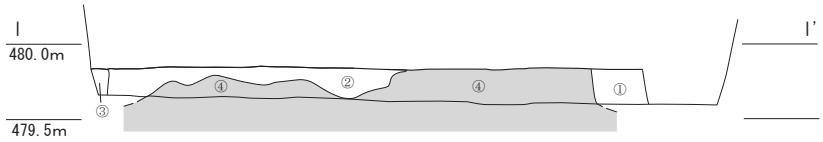


① SI44埋土　10YR5/2灰黄褐色粘質土、炭化物混
② SI44埋土　10YR6/1褐灰色粘質土、炭化物混、粘性強い
③ SI44埋土　10YR6/1褐灰色粘質土、炭化物非常に多く混
④ SI44埋土　10YR4/1褐灰色粘質土、炭化物混、粘性強い
⑤ SI46埋土　10YR4/1褐灰色砂質土、炭化物混
⑥ SI46埋土　10YR6/3にぶい黄橙色砂質土
⑦ SI46埋土　10YR5/1褐灰色粘質土、炭化物混
⑧ Ⅲa　10YR6/1褐灰色粘質土、砂粒少し混
⑨ Ⅳa　10YR6/4にぶい黄橙色砂

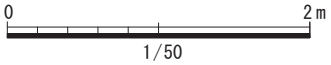
暗渠4　南東壁



暗渠4　北西壁



① SI6埋土　10YR5/1褐灰色土
② SI47埋土　10YR4/2灰黄褐色粘質土、炭化物混しまりわるい
③ SI埋土　10YR4/1褐灰色砂質土、炭化物混
④ Ⅳa　10YR6/4にぶい黄橙色砂

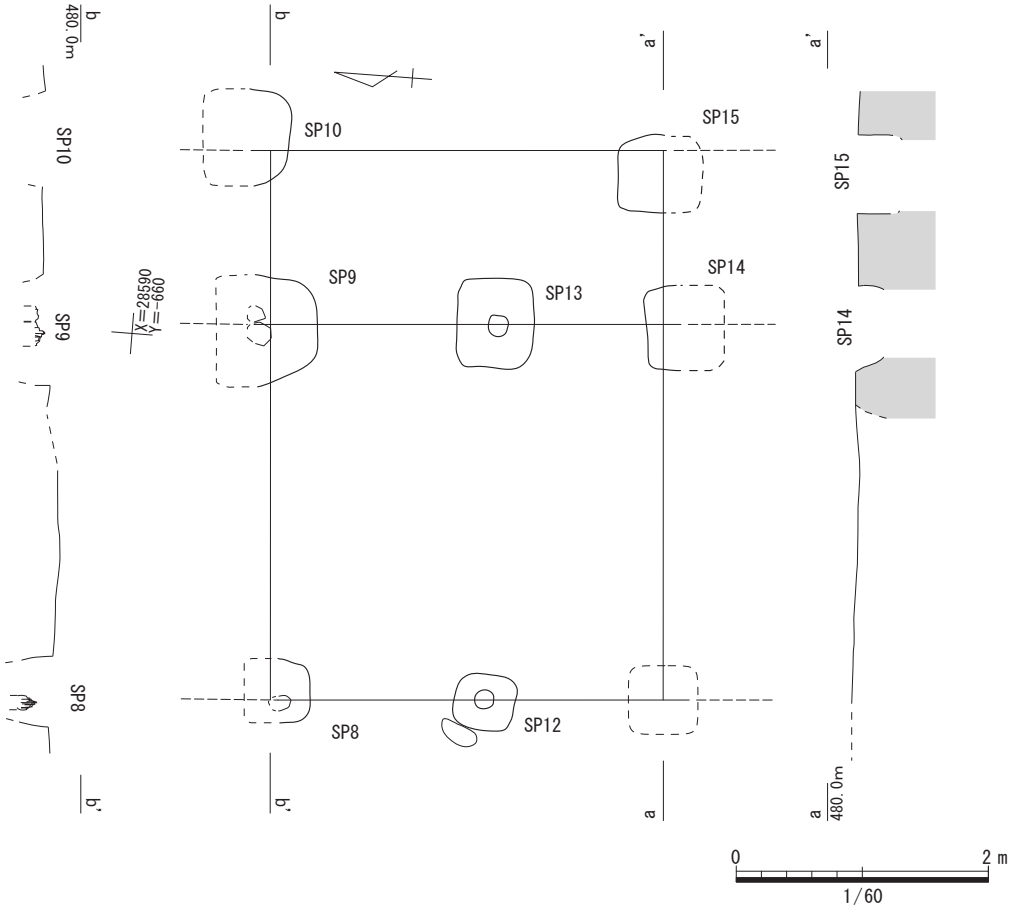


第21図　２トレンチ断面図(2)

出土遺物については１トレンチ同様に遺構掘削を行っていないため、遺構確認時の資料である。遺構外出土遺物については層位ごとに報告する。竪穴住居跡については各々詳述せず、検出時に出土したものの中で、遺構に伴うと考えられるもののみを遺構別に記述した。

(2) 遺構及び遺構内出土遺物

建物跡 SB58（第 22 図） ２トレンチの中央よりやや東寄りで確認した。範囲は X = 28585.5 ～ 28585.9、Y = 657.9 ～ 663.0 である。建物の範囲はトレンチ外にも及んでいるものと考えられるため、全容は不明である。柱痕が残存した２穴（SP8・SP9）を手がかりに建物を復元したのものが建物跡 SB58 である。その復元にあたっては、構成する柱掘り方の平面プラン、それぞれの軸方向、柱間寸法などをもとに示した。建物を構成する柱掘り方プランは、SP8・9・10・12・13・14・15 の７穴である。７穴をもとに建物の平面形式について見てみると、棟方向・規模などの詳細は不明であるが、南北方向では、SP10-SP15、SP9-SP13-SP14、SP8-SP12 の柱列ラインが想定でき、それに直行する東西方向では、SP10-SP9-SP8、SP15-SP14 の柱列ラインが想定できる。座標軸に対する柱列の向きは Y 軸に対して４度西へ振る。これらの知見より建物と判断することは難しいが、微高地上の端部に位置することから、寺地を区画するための何らかの施設であったかもしれない。



第 22 図　建物跡 SB58 遺構図

炉跡 SL7（第 23・24 図）　3 個の川原石を「コ」の字状に配置した構造のもので、いわゆる「コの字状石囲炉」と呼ばれるものである。石囲炉の中には土師器の甕（26）が埋設されていた。川原石は被熱し、開口部付近には覆土中に炭化物が多く含んでいたが、焼土は確認できなかった。このような構造の炉は、弥生後期から古墳中期にかけて下呂市から飛騨市の飛騨地方で調査されており、これまで 14 例が知られているが、土器埋設炉の構造のものは初例である。

出土した土師器甕（26）は完形品で、口縁部は「く」の字状に屈曲し、胴部は球形状に膨らみ、径の小さな底部が付く。口縁部は内外面ともヨコナデ調整で、胴部外面は縦位のハケ目、内面はハケ目ののちヘラナデにより仕上げられる。

竪穴住居跡（第 25・26 図）　竪穴住居跡は 15 軒を確認した。確認時の平面プランは概ね方形を呈する。遺構掘削を行っていないため明確な帰嘱時期の検討を行っていない。遺構確認時の出土状況から、竪穴住居跡に伴うと考えられる遺物は、SI16 の土師器小片 2 点、SI44 の土師器小片 3 点、SI51 の土師器小片 4 点である。そのうち、SI44 出土の土師器高坏の脚部片 1 点（27）と SI51 の土師器甕の胴部片 1 点（28）を図示した。27 は高坏脚裾部のみの破片であるが、外面はナデにより仕上げられる。28 の甕胴部片は回転ナデにより仕上げられ、胎土が密である。時期は両者とも古墳前期に属するものと考えられる。

Ⅲ層（第 25 ～ 27 図）　弥生土器小片 3 点、土師器小片 2,183 点、須恵器小片 414 点、石製品 7 点、木製品等 14 点が出土し、そのうち、弥生の壺・高坏 3 点（29 ～ 31）、古墳前期から古代の土師器各器種 23 点（32 ～ 54）、古墳後期から古代の須恵器各器種 43 点（55 ～ 97）、石製品 1 点（98）、木製品 2 点（99・100）の計 72 点を図示した。またモモの種子について写真のみ掲載した。

29・30 は弥生後期の高坏口縁部片である。同一個体であるが、内外面調整の残りがそれぞれ異なるため 2 片とも図示した。口縁部は外方上に立ち上がり、端部で外反し、端部断面は方形状を呈する。器面の調整は内外面とも概ね横方向のヘラミガキである。

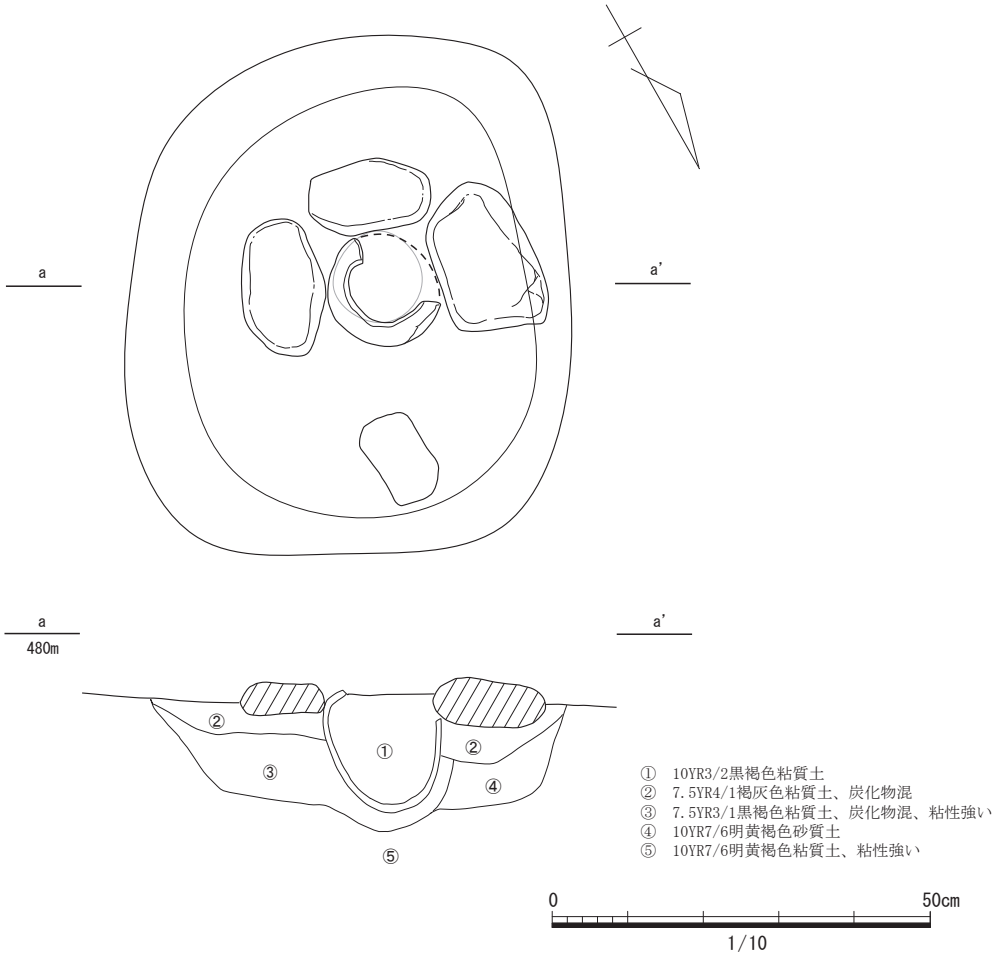
31 は有段口縁を特徴とする壺口縁部片である。口縁部は外傾して立ち上がり、内面には段をもつ。北陸系月影式に比定でき、弥生後期後半に属するものと考えられる。

32・33 は甕の口縁部片である。32 の口縁端部は短く立ちぎみに屈曲し、端部外面にキザミが施される。時期は古墳前期初頭頃と考えられる。33 は有段口縁をもつ口縁部片で、口縁部内面には段がないことから古墳前期初頭に属するものと推測される。

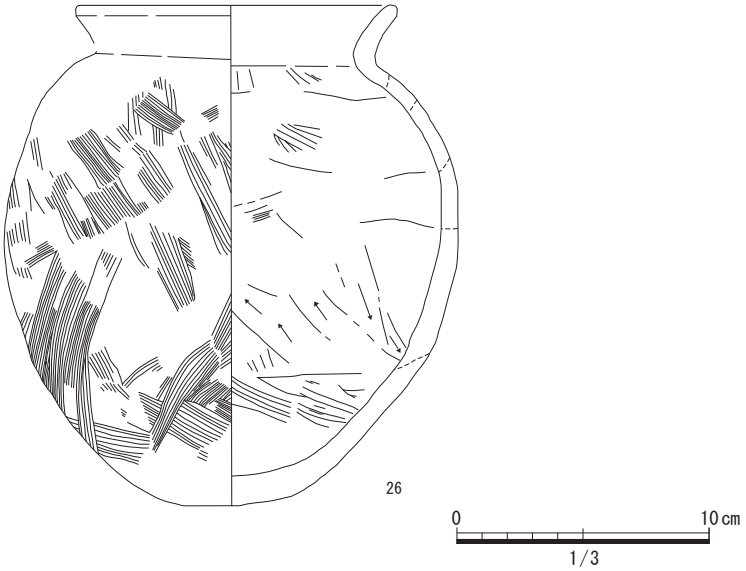
34 ～ 42 は土師器高坏の破片。34･35 は坏部片。36 ～ 40 は脚部片で、36 以外は低脚タイプである。36 は柱脚状のもので、裾部との間に境をもち、「ハ」の字に開く。37 ～ 40 の脚柱部は斜下方に開き、裾部は内湾ぎみに開く。37・38 の脚柱部は裾部との間に明瞭な境をもたず、39・40 の脚柱部と裾部との間には明瞭な境をもつ。41・42 は脚裾部が大きく開くもの。器台の可能性がある。坏・脚部とも外面調整はミガキもしくはナデにより仕上げられる。

43 は小形器台の受け部片。44 は小形壺、45 は小形鉢とみられる器種。いずれも古墳前期に属する。

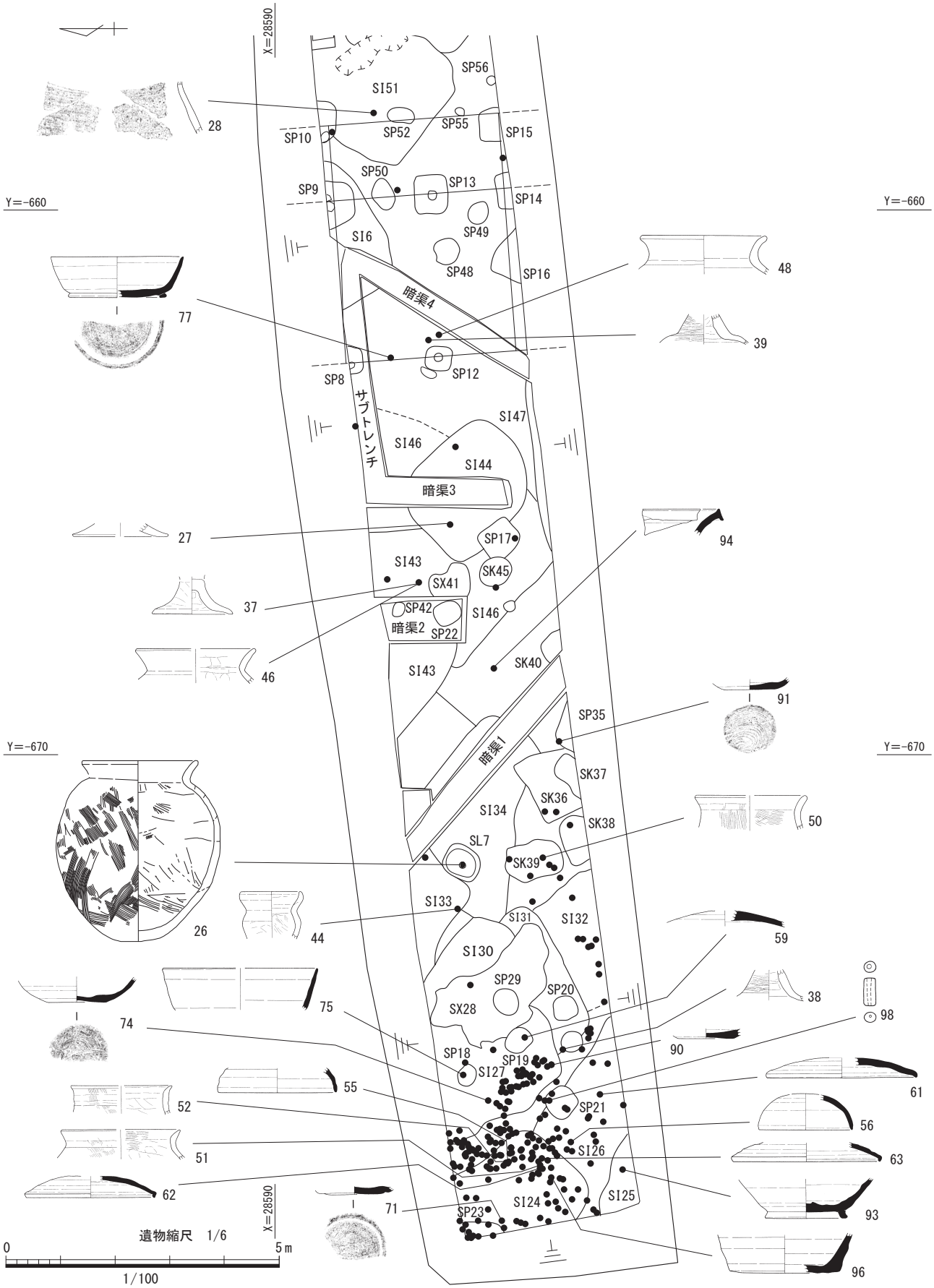
46 ～ 52 は土師器甕の口縁部片。器面調整は、口縁部が内外面ともヨコナデにより仕上げられる。胴部外面は 46 ～ 48 がヘラナデ、49 ～ 52 が縦・斜位のハケ目、内面は概ねヘラナデにより仕上げられる。46・47・49 は口頸部が「く」の字状に屈曲する形態。48 は強く外反する。50 は緩く外反する形態。51 は短めに外傾し、52 は直立ぎみに立ち上がり、端部で外反する形態。46 ～ 49 は概ね古墳後期、50 ～ 52 のハケメによるものはやや時期が下がるものと考えられる。



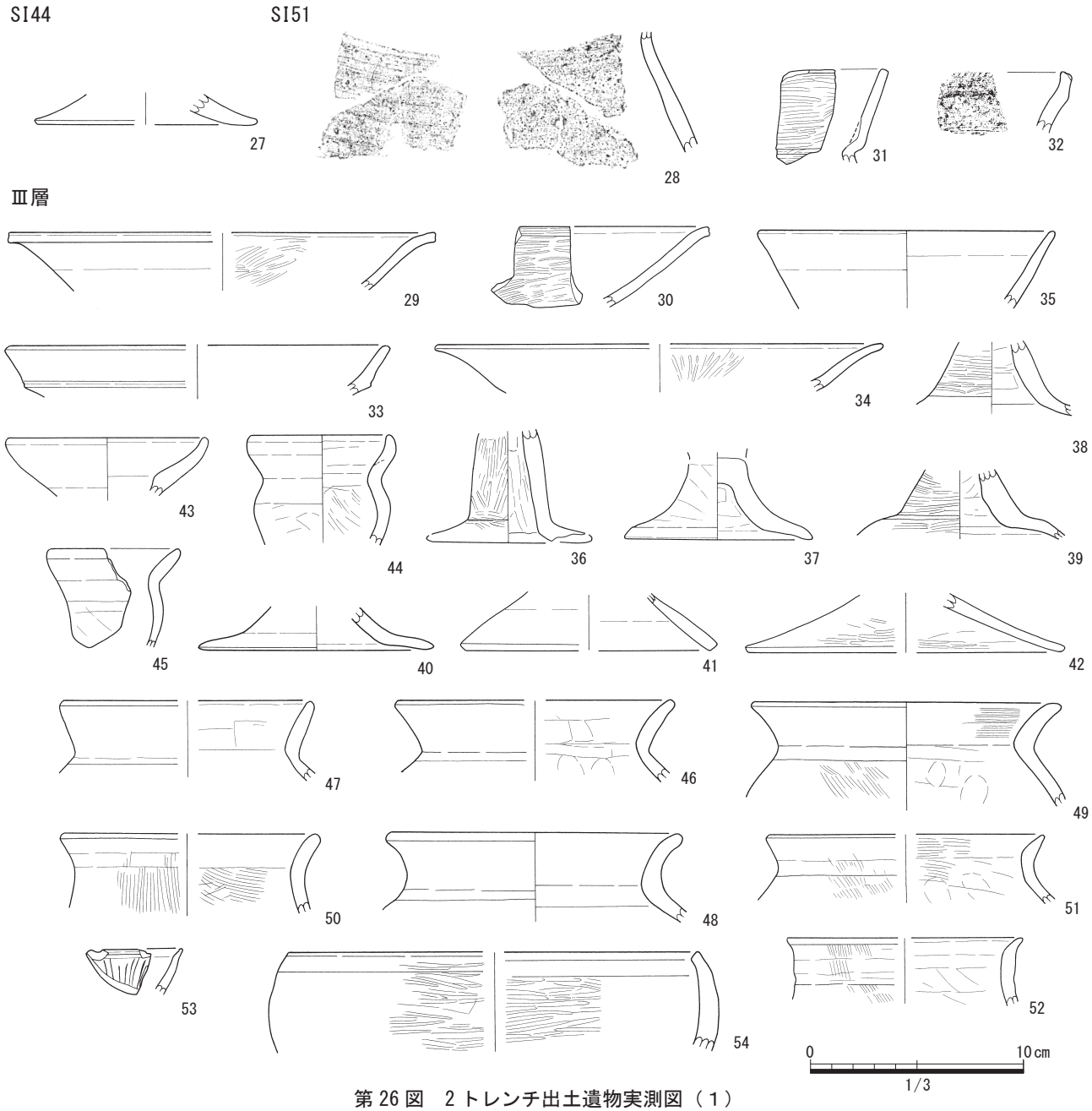
第23図　土器埋設炉SL7遺構図



第24図　土器埋設炉SL7出土遺物実測図



第25図　2トレンチ遺物出土状況図

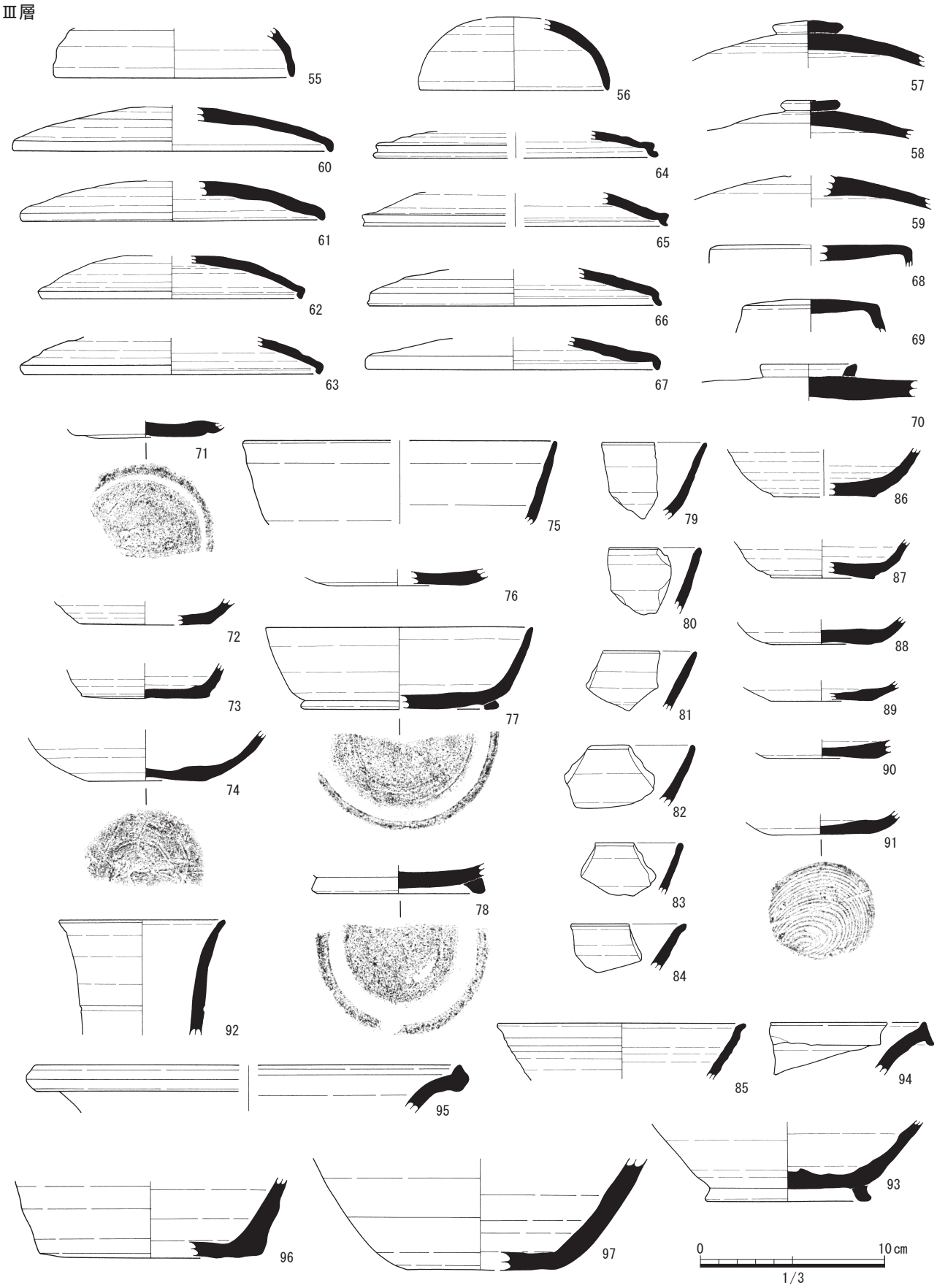


第 26 図　2 トレンチ出土遺物実測図（１）

53 は体部内面に放射状の暗文が施される坏で、口唇部内面に１条の凹線がめぐる。胎土・色調より畿内産のものと考えら、時期は概ね平城宮Ⅰに比定される。54 は鉄鉢形の器種。内・外面とも横位のヘラミガキにより仕上げられる。

55・56 は須恵器坏Ｈ蓋の口縁部片で、ともに半球形の器形である。７世紀代のものと考えられる。

57 ～ 67 は須恵器蓋の破片。57 ～ 59 は天井部片で、57・58 の天井部には扁平な摘みが付く。摘み径より推測すると８世紀前後の所産と考えられる。60 ～ 67 は口縁部片で、口縁端部の形態により異なる。60・61 は丸みを帯びる形態。62・63 は内傾する。64・65 は屈曲して外反する。66 は外反する。67 はほぼ垂直に屈曲する形態。68・69 は短頸壺や広口壺などの蓋と考えられる。70 は環状摘みをもつもので、大形の器種に対応すると蓋と考えられる。いずれも８世紀代のものと考えられるが、60・61 は８世紀前半のものと考えられる。



第 27 図　2 トレンチ出土遺物実測図（２）

71 ～ 97 は須恵器坏・埦・瓶・甕類の破片資料。71 ～ 74 は底部片である。ヘラ切り手法で切り離された坏Ｇであり、概ね８世紀前半のものである。75 は坏Ａまたは坏Ｂの口縁部片。76 は坏Ａの底部片。77・78 は坏Ｂで、77 は腰部のやや内側に高台が付く。

79 ～ 85 は坏または埦の口縁部片。体部は回転ナデによる調整で、坏・埦の種別は体部形態だけでは判別し難い。84・85 は口縁端部が外反するもので、講堂から出土した須恵器埦Ａの口縁部に近似する。

86 ～ 91 は埦Ａの底部片で、底部は糸切り未調整の製品である。８世紀後半以降のものと考えられる。

92 は長頸壺の口頸部片で、口縁部は直口縁の形態をなし、頸部に１条の沈線がめぐる。８世紀中頃までの所産と考えられる。93 は瓶類の底部で、高台は踏ん張るように付されている。

94 ～ 97 は甕の破片で、94・95 は口縁部片、96・97 底部片である。

98 は碧玉製の管玉である。前回調査及び１トレンチで検出した古墳に伴う可能性がある。

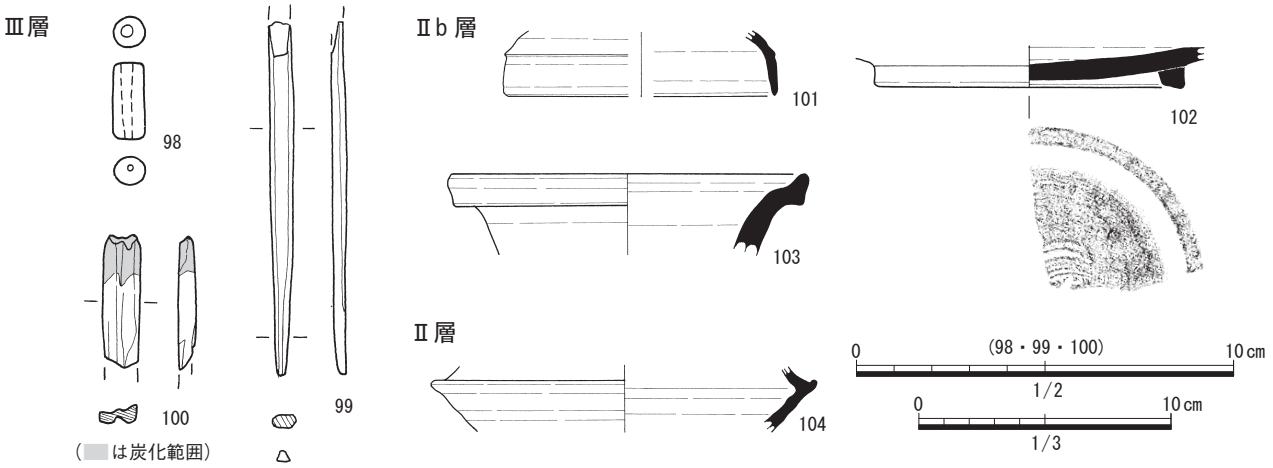
99 は箸、100 は火付木と考えられるものである。植物遺存体としてはモモの種子が出土している。

(3) 遺構外出土遺物

Ⅱｂ層　土師器小片 229 点、須恵器小片 93 点の計 322 点が出土した。このうち、須恵器坏Ｈ蓋・坏Ｂ・壺の３点 （101 ～ 103）を図示した。

101 は坏Ｈ蓋の小形品である。天井部と口縁部との境には明瞭な稜が認められる。小ぶりの形態を重視すると７世紀中葉から後半の所産と考えられる。102 は坏Ｂの底部片とみられる資料で、底部の中心には糸切り痕がわずかに残る。103 は壺の口縁部片で、口縁端部は受け口状を呈する。

Ⅱ層　土師器小片 56 点、須恵器小片 54 点の計 110 点が出土した。そのうち、須恵器坏Ｈ身１点(104) を図示した。体部片で、口径が 13cm内外のものと考えられる。時期は概ね７世紀前半頃と推測される。



第 28 図　２トレンチ出土遺物実測図 (3)

第３表　遺構一覧表

地区名	遺構番号	遺構種別	検出面	平面形状	堆積状況	断面形状	底面形状	法量（m） 上端 長軸	上端 短軸	深さ	埋土	備考（切り合い、出土遺物等）
1トレ	1	SP	Ⅱa	方形	－	方形	－	1.15	1	－	－	3号区画塀跡柱穴
1トレ	2	SP	Ⅱb	方形	－	方形	－	1.15	1.05	－	－	3号区画塀跡柱穴
1トレ	3	SI	Ⅳ	方形	－	方形	－	2.8 以上	2.7 以上	－	第 15 図拡張区　⑯	古墳時代初頭
1トレ	4	SP	Ⅱb	方形	－	方形	－	1.15	1.05	－	－	3号区画塀跡柱穴、近世暗渠に切られる
1トレ	5	SP	Ⅳ	方形	－	方形	－	1.1	1	－	－	3号区画塀跡柱穴、SI3 を切る
2トレ	6	SI	Ⅲ	方形	－	方形	－	2.5 以上	1 以上	－	第 20 図北壁　㊵ ㊶ ㊷ 第 21 図暗渠 4　①	柱穴に切られる（北壁断面図）
2トレ	7	SL	Ⅲ	方形	中央窪む	逆台形	方形	0.7	0.6	0.36	第 23 図遺構図	コの字状石囲炉跡
2トレ	8	SP	Ⅲ	方形	－	方形	－	0.5	－	－	第 20 図北壁　㉖ ㉗ ㉘	－
2トレ	9	SP	Ⅲ	方形	－	逆台形	－	0.9	－	－	第 20 図北壁　㉙	SI6 を切る
2トレ	10	SP	Ⅲ	方形	－	－	－	0.8	－	－	第 20 図北壁　㉚	SI51 を切る
2トレ	11	SP	Ⅲ	－	－	逆三角形	－	0.8	－	0.35	第 20 図北壁　㉛ ㉜	－
2トレ	12	SP	Ⅲ	方形	－	－	－	0.5	0.45	－	－	－
2トレ	13	SP	Ⅲ	方形	－	－	－	0.7	0.6	－	－	－
2トレ	14	SP	Ⅲ	方形	－	逆台形	－	0.7	－	－	第 20 図南壁　㉓	－
2トレ	15	SP	Ⅲ	方形	－	方形	－	0.6	－	－	第 20 図南壁　㉔	－
2トレ	16	SP	Ⅲ	方形	－	方形	－	0.5 以上	－	－	第 20 図南壁　㉒	－
2トレ	17	SP	Ⅲ	方形	－	－	－	0.7	0.6	－	－	SI44 を切る
2トレ	18	SP	Ⅲ	円形	－	－	－	0.4	0.35	－	－	SI27 を切る
2トレ	19	SP	Ⅲ	円形	－	－	－	0.5	0.4	－	－	SI27 を切る
2トレ	20	SP	Ⅲ	円形	－	－	－	0.45	0.4	－	－	SI31 を切る
2トレ	21	SP	Ⅲ	方形	－	－	－	0.55	－	－	－	SI26 を切る
2トレ	22	SP	Ⅲ	方形	－	－	－	0.5	0.4	－	－	暗渠２内
2トレ	23	SP	Ⅲ	不定形	－	－	－	0.7 以上	0.3 以上	－	第 20 図北・西壁 ⑱	SI24 を切る
2トレ	24	SI	Ⅲ	方形	－	方形	－	2.3 以上	1.9 以上	－	第 20 図北・西壁 ㉝	SI26 を切る
2トレ	25	SI	Ⅲ	－	－	－	－	－	－	－	第 20 図南・西壁 ㊸	SI26 を切る
2トレ	26	SI	Ⅲ	－	－	－	－	－	－	－	第 20 図南壁　㊹	－
2トレ	27	SI	Ⅲ	方形	－	－	－	2.2 以上	1.4 以上	－	第 20 図北壁　㊼	SI31 を切る
2トレ	28	SX	Ⅲ	不定形	－	－	－	2.6	1.2	－	－	SI27・30・31 を切る
2トレ	29	SP	Ⅲ	円形	－	－	－	0.5	－	－	－	SX28 を切る
2トレ	30	SI	Ⅲ	方形	－	－	－	2.2 以上	0.8 以上	－	－	SI31 を切る
2トレ	31	SI	Ⅲ	方形	－	－	－	2.6	0.9 以上	－	－	SI32 を切る
2トレ	32	SI	Ⅲ	方形	－	－	－	2.2	1.35 以上	－	第 20 図南壁　㊺	－
2トレ	33	SI	Ⅲ	方形	－	－	－	1.5 以上	1.2 以上	－	第 21 図暗渠 1　①	SI34 を切る
2トレ	34	SI	Ⅲ	不定形	－	－	－	3.3	1.5	－	第 20 図北壁　㉞ ㉟ ㊱ 第 21 図暗渠 1　③ ④	－
2トレ	35	SP	Ⅲ	方形	－	－	－	0.7 以上	0.4 以上	－	第 20 図南壁　㉑	SK36 を切る
2トレ	36	SK	Ⅲ	方形	－	－	－	1.2	1.1 以上	－	第 20 図南壁　⑲	SI34 を切る
2トレ	37	SK	Ⅲ	不定形	－	－	－	0.7 以上	0.5	－	第 20 図南壁　⑰	SK36 を切る
2トレ	38	SK	Ⅲ	方形	－	－	－	0.9	0.45 以上	－	第 20 図南壁　⑯	－
2トレ	39	SK	Ⅲ	不定形	－	－	－	1.05	0.7	－	－	SI34 を切る
2トレ	40	SK	Ⅲ	方形	－	－	－	0.5 以上	0.4 以上	－	－	－
2トレ	41	SK	Ⅲ	不定形	－	－	－	0.75	0.6 以上	－	第 21 図暗渠 2　①	SI43・46 を切る
2トレ	42	SP	Ⅲ	円形	－	－	－	0.3	－	－	－	暗渠２内
2トレ	43	SI	Ⅲ	不定形	－	－	－	3.8	1.2 以上	－	第 21 図暗渠 2　③	－
2トレ	44	SI	Ⅲ	方形	－	－	－	2.3	1.9	－	第 21 図暗渠 3　① ② ③ ④	－
2トレ	45	SK	Ⅲ	円形	－	－	－	0.6	0.5	－	－	SP17、SI46 を切る
2トレ	46	SI	Ⅲ	方形	－	－	－	4.2	3.3	－	第 20 図北壁　㊲ ㊳ ㊴ 第 21 図暗渠 3　⑤ ⑥ ⑦	－
2トレ	47	SI	Ⅲ	方形	－	－	－	3.2 以上	－	－	－	SI46 を切る
2トレ	48	SP	Ⅲ	円形	－	－	－	0.5	－	－	－	－
2トレ	49	SP	Ⅲ	円形	－	－	－	0.45	－	－	－	－
2トレ	50	SP	Ⅲ	不定形	－	－	－	0.6	0.4	－	－	－
2トレ	51	SI	Ⅲ	方形	－	－	－	2.5 以上	2.4	－	－	－
2トレ	52	SP	Ⅲ	円形	－	－	－	0.55	0.3	－	－	SI51 を切る
2トレ	53	SP	Ⅲ	円形	－	－	－	0.4	－	－	－	SI51 を切る
2トレ	54	SK	Ⅲ	不定形	－	－	－	0.9	0.6	－	－	－
2トレ	55	SP	Ⅲ	円形	－	－	－	0.2	－	－	－	－
2トレ	56	SP	Ⅲ	円形	－	－	－	0.2	－	－	第 20 図南壁　⑯’	－
1トレ	57	SD	Ⅱb	－	－	－	－	－	－	－	－	－
2トレ	58	SB	Ⅱb	－	－	－	－	7.2 以上	5.2	－	－	－

第４表　遺物一覧表（１）

遺物番号	トレンチ名	層位	出土遺構	種別	器種	法量（cm）			破片数	胎土	焼成	色調		成形・調整等	備考	挿図	図版番号
						口径	底径	器高				（外面）	（内面）				
1	1	－	SI3	土師器	壺	(17.2)	－	(4.5)	1	やや密。	良好	2.5Y8/3 淡黄	2.5Y8/3 淡黄	外面：横方向ヘラミガキ。内面：横方向ヘラミガキ。	北陸系有段口縁。弥生時代後期終末～古墳時代前期初頭。	17	6
2	1	－	SI3	土師器	高坏	(12.6)	－	(3.1)	12	やや密。直径1mm以下の長石をわずかに含む。	良好	5YR6/6 橙	2.5Y8/3 淡黄	外面：縦斜方向ヘラミガキ。内面：口縁部横方向・坏底部縦斜方向ヘラミガキ。	坏部。	17	5
3	1	－	SI3	土師器	高坏	－	－	－	2	やや密。	良好	7.5YR7/4 にぶい橙	5YR7/4 にぶい橙	外面：脚上部横方向ヘラミガキ、脚柱部縦方向ヘラミガキ。内面：坏底部ヘラミガキ　脚柱部横方向ヘラナデ、裾部縦方向ヘラナデ。	低脚高坏。坏底部～脚部。坏部は接合面で剥離、ホゾ継ぎの痕跡あり。	17	5
4	1	整地層	－	土師器	高坏	－	(8.5)	(5.2)	1	長石をわずかに含む。	良好	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	外面：器面摩耗するが脚柱部縦斜方向ヘラミガキ痕跡が残る。脚裾部ヘラナデ、のち横方向ヘラミガキ　内面：脚柱部ヘラケズリ、脚裾部横方向ヘラナデ	脚部。古墳時代中期。	17	5
5	1	整地層	－	須恵器	坏H身	－	(5.5)	(0.9)	1	密。直径2mm以下の長石をわずかに含む。	良好	5Y6/1 灰	5Y6/1 灰	外面：底部回転ヘラ切り、のちナデ。内面：回転ナデ。	無台坏。底部破片。	17	6
6	1	整地層	－	須恵器	蓋	(16.0)	－	(2.7)	1	密。直径1.5mm以下の長石をわずかに含む。	良好	7.5Y5/1 灰	10Y5/1 灰	外面：回転ナデ。内面：回転ナデ。	摘み蓋。内外面薄く炭付着。	17	6
7	1	整地層	－	須恵器	蓋	(17.0)	－	(2.0)	1	密。	良好	7.5Y5/1 灰	7.5Y4/1 灰	外面：回転ナデ。内面：回転ナデ。	摘み蓋。成形時の歪みあり。	17	6
8	1	整地層	－	須恵器	蓋	－	－	(1.8)	1	密。直径1mm以下の長石をわずかに含む。	良好	7.5YR5/1 褐灰	10YR5/1 褐灰	外面：天井部回転ヘラ削り。体部回転ナデ。内面：回転ナデ。	摘み蓋。摘み貼り付け部分で剥離。内面に硯面あり墨付着、転用硯か。	17	5
9	1	整地層	－	須恵器	坏AorB	(10.8)	－	(2.9)	1	密。直径1mm以下の長石をわずかに含む。	良好	7.5Y4/1 灰	7.5Y6/1 灰	外面：回転ナデ。内面：回転ナデ。	口縁端部に若干煤付着。灯明皿か。	17	6
10	1	整地層	－	須恵器	坏B	－	(9.0)	(1.7)	1	密。直径1mm以下の長石をわずかに含む。	良好	7.5Y5/1 灰	7.5Y5/1 灰	外面：底部高台貼付、周縁ナデ。体部回転ナデ。内面：回転ナデ。	有台坏。内外面煤付着。	17	6
11	1	整地層	－	須恵器	埦A	－	(6.0)	(1.8)	1	密。直径5mm以下の長石を含む。	良好	2.5GY6/1 オリーブ灰	2.5GY5/1 オリーブ灰	外面：底部回転糸切り、体部回転ナデ。内面：回転ナデ。	無台碗。底部破片。	17	6
12	1	整地層	－	須恵器	鉢	－	(7.2)	(1.7)	3	密。直径2mm以下の長石・石英を含む。	良好	2.5Y6/2 灰黄	2.5Y6/2 灰黄	外面：底部：回転糸切り、外周回転ヘラケズリ。体部回転ナデ。内面：回転ナデ。	内面硯面あり墨付着、転用硯か。	17	6
13	1	整地層	－	須恵器	鉢	(17.5)	－	(7.0)	2	密。	良好	5Y6/1 灰	7.5Y6/1 灰	外面：回転ナデ。内面：回転ナデ。	－	17	6
14	1	整地層	－	須恵器	鉢	(21.0)	－	(8.4)	1	密。直径3mm以下の長石をわずかに含む。	良好	7.5Y5/1 灰	10YR5/1 灰	外面:ヘラケズリ、のち回転ナデ。内面:回転ナデ。	－	17	6
15	1	Ⅱb	－	弥生土器	甕	－	－	－	1	砂粒。長石を含む。	普通	2.5Y8/2 灰白	2.5Y5/1 黄灰	外面：ヘラ描き沈線による横羽状文。内面：縦方向板ナデ。	胴部破片。飛騨地方に普及した弥生時代中期後半の内垣内式土器・横羽状文甕。	17	6
16	1	Ⅱb	－	弥生土器	壺	－	－	－	1	砂粒。長石を含む。	普通	10YR6/3 にぶい黄橙	10YR6/4 にぶい黄橙	外面：数条平行沈線。内面：磨滅。	頸部破片。中部高地系、弥生時代中期末～後期初頭。	17	6
17	1	Ⅱb	－	土師器	器台	－	－	－	1	直径0.5mm以下の長石・赤色酸化土を含む。	良好	10YR8/2 灰白	7.5YR7/3 にぶい橙	外面：縦方向ヘラミガキ、のちナデ。内面：脚柱部縦方向ユビナデ。脚裾部横方向ヘラナデ。	脚柱部。	17	5
18	1	Ⅱb	－	土師器	甕	(16.8)	－	(6.1)	5	密。直径1mm以下の長石を含む。	良好	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/2 にぶい黄橙	外面：口縁部横ナデ。体部ヘラナデ。内面：横方向ヘラナデ。	北陸系有段口縁。内面には段がない。古墳時代前期初頭。	17	5
19	1	Ⅱb	－	須恵器	蓋	(15.0)	－	(2.1)	1	密。直径2mm以下の長石をわずかに含む。	良好	10Y5/1 灰	5Y5/1 灰	内面：回転ナデ。外面：回転ナデ。	摘み蓋。8世紀前半頃。	17	6
20	1	－	SP2	須恵器	坏G身	－	7.1	(1.1)	1	直径4mm以下の長石をわずかに含む。	良好	5Y8/1 灰白	5Y7/1 灰白	外面：底部ヘラ切り、のちナデ。体部ナデ。内面：回転ナデ。	底部破片。	17	6
21	1	Ⅱa	－	弥生土器	壺	－	－	－	1	直径2mm以下の長石をわずかに含む。	良好	10YR4/1 褐灰	2.5Y6/1 黄灰	内面：横方向に板ナデ。外面：櫛描波状文。	中部高地系、吉田式。弥生時代中期末～後期。	17	6
22	1	Ⅰb	－	弥生土器	甕	－	－	－	1	直径4mm以下の長石・石英・チャート・雲母を含む。	普通	2.5Y7/1 灰白	5Y7/1 灰白	口縁が短く折れる。口縁内面に段あり。外面：横方向ナデの後ハケ目。内面：口縁部縦斜方向ハケ目。体部横方向ハケ目。	弥生後期の西日本系か。	17	6
23	1	Ⅰb	－	土師器	坏	10.6	6.5	3.1	3	直径1.5mm以下の長石・石英・雲母をわずかに含む。	普通	7.5YR7/3 にぶい橙	5YR7/4 にぶい橙	内面：横ナデ。外面：底部手持ちヘラケズリ、体部ユビオサエ、のちヘラナデ。口縁部横ナデ。	8世紀代。	17	5
24	1	Ⅰb	－	灰釉陶器	埦	－	6.5	(1.9)	1	密。	良好	5Y7/1 灰白	5Y7/1 灰白	外面：体部回転ナデ。底部回転ヘラケズリ、三日月高台貼付、周縁ナデ。内面:回転ナデ。	底部破片。灰釉が直線的に残り、ハケ塗り。黒笹90窯式。9世紀後半。	17	5
25	1	Ⅰb	－	磨製石斧	太型蛤刃	－	－	－	－	－	－	10Y3/1 オリーブ黒	10Y3/1 オリーブ黒	－	緑色岩類製。中部高地系。弥生時代中期後半。質量389.8g。	17	6
26	2	－	SL7	土師器	甕	12.8	3.8	18.5	1	やや密。直径2mm以下の石英をわずかに含む。	良好	2.5Y5/2 暗灰黄	2.5Y5/3 黄褐	外面：縦方向ハケ目。口縁部ヨコナデ。内面：横方向ハケ目、のちナデ。	コの字状石囲炉に伴う埋設土器。	24	8
27	2	－	SI44	土師器	高坏	－	(10.0)	(1.4)	1	密。	普通	7.5YR7/4 にぶい橙	5YR7/6 橙	内面：横方向ナデ。外面：横方向ナデ。	脚裾部。古墳時代前期。	26	8
28	2	－	SI51	土師器	甕	－	－	(5.7)	3	密。1mm以下の長石をわずかに含む。	良好	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	内面：回転ナデ。外面：回転ナデ。	体部破片。古墳時代前期。	26	8
29	2	Ⅲ	－	弥生土器	高坏	20.0	－	(2.7)	1	密。長石をわずかに含む。	良好	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	外面：摩耗するがヘラミガキの痕跡あり。内面：横斜方向ヘラミガキ。	坏部。口縁部外反、端部方形。30と同一個体。	26	8
30	2	Ⅲ	－	弥生土器	高坏	(20.0)	－	(2.7)	1	密・直径1mm以下の長石をわずかに含む。	良好	5YR6/6 橙	2.5Y R 6/6 橙	外面：横方向ヘラミガキ。内面：横斜方向ヘラミガキの痕跡残る。	坏部。口縁部外反、端部方形。29と同一個体。	26	8
31	2	Ⅲ	－	弥生土器	壺	－	－	(4.3)	1	密。	良好	10YR7/2 にぶい黄橙	10YR3/1 黒褐	外面：横方向ヘラミガキ。内面：横方向ヘラミガキ。半分以上剥離。	内面剥離するが、有段の痕跡あり。北陸系月影式。弥生時代後期後半。	26	8
32	2	Ⅲ	－	土師器	甕	－	－	(2.8)	1	直径3m以下の長石・石英・雲母・赤色酸化土を含む。	普通	7.5YR7/3 にぶい橙	7.5YR7/3 にぶい橙	外面：横方向ナデ。端部外面にキザミあり。内面：横方向ナデ。	口縁部が外傾し、端部に段をもち内傾する受口状口縁。外面に炭付着。古墳時代前期初頭。	26	8
33	2	Ⅲ	－	土師器	甕	(17.5)	－	(2.4)	1	直径1mm以下の長石・石英・赤色酸化土を含む。チャート・雲母をわずかに含む。	普通	10YR7/2 にぶい黄橙	2.5Y8/2 灰白	外面:横方向ナデ。工具による沈線あり。内面：横方向ナデ。	有段口縁。内面に段なし。内外面に炭付着。古墳時代初頭。	26	8

第５表　遺物一覧表（２）

遺物番号	トレンチ名	層位	出土遺構	種別	器種	法量（cm）			破片数	胎土	焼成	色調		成形・調整等	備考	挿図	図版番号
						口径	底径	器高				（外面）	（内面）				
34	2	Ⅲ	－	土師器	高坏	22.0	－	(1.8)	1	直径 2mm 以下の長石・赤色酸化土をわずかに含む。	普通	5YR6/4 にぶい橙	5YR6/4 にぶい橙	外面：縦斜方向ヘラミガキ。外面：摩耗するが横方向ヘラミガキの痕跡残る。	坏部。	26	8
35	2	Ⅲ	－	土師器	高坏	(14.7)	－	(2.7)	1	密。直径 1mm 以下の長石をわずかに含む。	良好	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR7/6 橙	外面：回転ナデ。内面：回転ナデ。	坏部。古墳時代後期か。	26	8
36	2	Ⅲ	－	土師器	高坏	－	－	(5.1)	3	密。	普通	7.5YR8/4 浅黄橙	5YR8/4 淡橙	外面：縦方向ヘラミガキ。内面：ヘラナデ。	脚柱部。	26	8
37	2	Ⅲ	－	土師器	高坏	－	8.8	(3.9)	1	やや密。	普通	2.5Y7/3 浅黄	2.5Y7/2 灰黄	外面：横斜方向ナデか。内面：横方向ナデ。	脚部。坏部とは接合面で剥離。	26	7
38	2	Ⅲ	－	土師器	高坏	－	－	(3.4)	1	密。	普通	7.5YR8/4 浅黄橙	5YR8/4 淡橙	外面：横方向ヘラミガキ。内面：脚柱部横方向ヘラナデ、脚裾部ヨコナデ。	脚部。低脚タイプ。	26	8
39	2	Ⅲ	－	土師器	高坏	－	－	(3.2)	1	密。	普通	7.5YR7/6 橙	7.5YR7/6 橙	外面：横方向ヘラミガキ。内面：脚柱部ヘラナデ、脚裾部ヨコナデ。	脚部。低脚タイプ。	26	8
40	2	Ⅲ	－	土師器	高坏	－	(11.0)	(2.0)	1	直径 1mm 以下の赤色酸化土をわずかに含む。	普通	7.5YR8/4 浅黄橙	7.5YR8/4 浅黄橙	外面：脚裾部ヨコナデ。内面：脚裾部ヨコナデ。	脚部。低脚タイプ。	26	8
41	2	Ⅲ	－	土師器	高坏 or 器台	(20.8)	－	(2.2)	1	粗。直径 1.5mm 以下の長石・石英・雲母をわずかに含む。	普通	5YR6/4 にぶい橙	5YR6/4 にぶい橙	内面：横方向ナデ。外面：横方向ナデ。	脚部。	26	8
42	2	Ⅲ	－	土師器	高坏 or 器台	(11.4)	－	(2.7)	2	直径 2mm 以下の長石・石英・チャートをわずかに含む。	普通	2.5Y7/1 灰白	2.5Y8/2 灰白	外面：脚裾部横方向ヘラミガキ。内面：脚裾部横方向ヘラミガキ。	脚部。	26	8
43	2	Ⅲ	－	土師器	器台	(9.0)	－	(2.7)	1	密。	普通	7.5YR8/4 浅黄橙	7.5YR7/4 にぶい橙	外面：磨滅により調整不明。内面：磨滅するが横方向ヘラミガキの痕跡あり。	小型器台。古墳時代前期。	26	8
44	2	Ⅲ	－	土師器	壺	(6.5)	－	(5.2)	1	密。長石をわずかに含む。	良好	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	外面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラナデ。内面：口縁部ヨコナデ、体部縦方向ユビナデ。	小型丸底壺か。古墳時代前期。	26	8
45	2	Ⅲ	－	土師器	鉢	－	－	(4.6)	1	密。	良好	5YR7/6 橙	7.5YR7/6 橙	外面：口縁部横ナデ。体部縦斜方向ヘラナデ。内面：口縁部横ナデ。体部横方向ヘラナデ。	小型鉢か。古墳時代前期。	26	8
46	2	Ⅲ	－	土師器	甕	(12.6)	－	(3.3)	2	直径2mm 長石･石英･チャート・赤色酸化土をわずかに含む。	良好	10YR8/2 灰白	10YR7/2 にぶい黄橙	外面：口縁部横ナデ。内面：口縁部横方向ヘラナデ、頸部ユビオサエ、のちヘラナデ。	「く」の字口頸部。古墳時代後期か。	26	9
47	2	Ⅲ	－	土師器	甕	(11.6)	－	(3.7)	1	直径 2mm 以下の長石・石英・チャートをわずかに含む。石英・雲母をわずかに含む。	良好	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	外面：横方向ナデ。内面：口縁部～頸部横方向ヘラナデ。	「く」の字口頸部。外面煤付着。古墳時代後期か。	26	9
48	2	Ⅲ	－	土師器	甕	(13.3)	－	(4.2)	1	やや密。直径 2mm 以下の長石・石英・雲母を含む。	良好	2.5Y6/2 灰黄	10YR7/2 にぶい黄橙	外面：口縁部横ナデ。内面：口縁部横方向ナデ。体部ヘラナデ。	頸部強く外反。外面に炭化物付着。古墳時代後期か。	26	9
49	2	Ⅲ	－	土師器	甕	(13.8)	－	(4.8)	4	密。直径 3mm 以下の長石・砂粒を多く含む。	良好	2.5Y8/2 灰白	2.5Y8/2 灰白	外面：口縁部横方向ナデ、体部縦斜方向ハケ目。内面：口縁部横方向ハケ目、頸部ユビオサエ、のち横方向ヘラナデ。	「く」の字口頸部。古墳時代後期か。	26	9
50	2	Ⅲ	－	土師器	甕	(11.8)	－	(3.7)	1	直径 2mm 以下の長石・石英・チャートをわずかに含む。	良好	10YR6/3 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	外面：縦方向ハケ目。内面：横方向ハケ目。	外面に炭化物付着。	26	10
51	2	Ⅲ	－	土師器	甕	(12.8)	－	(3.2)	1	直径 1mm 以下の長石・石英・赤色酸化土を含む。	良好	2.5Y6/1 黄灰	2.5Y7/2 灰黄	外面：縦方向ハケ目、のち方向横ナデ。内面：口縁部横方向ハケ目。体部指オサエ、のち横方向ナデ。	頸部緩くくびれ、口縁部が外反する。	26	9
52	2	Ⅲ	－	土師器	甕	(11.0)	－	(3.1)	1	直径 1mm 以下の長石・石英を含む。	良好	2.5Y7/2 灰黄	2.5Y7/1 灰白	内面：口縁部横方向ナデ。体部縦斜方向ヘラナデ。外面：縦方向ハケ目、のち横方向ナデ。	口縁部が外反する。	26	9
53	2	Ⅲ	－	土師器	坏C	－	－	(2.1)	1	密。直径 1mm 以下の長石をわずかに含む。	良好	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	外面：口縁部横ナデ。体部ヘラミガキ。内面：口縁部横ナデ、口唇部に１条の沈線、体部放射線状暗文。	畿内産暗文土器。平城Ⅰ。	26	7
54	2	Ⅲ	－	土師器	鉄鉢	(19.2)	－	(4.6)	1	密。	良好	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	外面：口唇部横ナデ。体部横方向ヘラナデ、のち横方向ヘラミガキ。内面：口唇部横ナデ。体部横方向ヘラナデ、のちヘラミガキ。	口縁部破片。	26	10
55	2	Ⅲ	－	須恵器	坏Ｈ蓋	(12.6)	－	(2.7)	1	密。	良好	N5/ 灰	N6/ 灰	外面：天頂部回転ヘラケズリ。体部回転ナデ。内面：回転ナデ。	半球形。7 世紀代。	27	9
56	2	Ⅲ	－	須恵器	坏Ｈ蓋	(10.2)	－	(3.9)	3	密。	良好	N4/ 灰	2.5GY3/ 暗灰	外面：体部ヘラナデ。内面：回転ナデ。	半球形。内面に自然釉。7 世紀代。	27	9
57	2	Ⅲ	－	須恵器	蓋	(12.6)	－	(2.5)	2	密。直径 1mm 以下の長石をわずかに含む。	良好	2.5Y5/1 黄灰	2.5Y6/1 黄灰	外面：天頂部回転ヘラケズリ。摘み部回転ナデ。体部回転ナデ。内面：回転ナデ。	摘み蓋。8 世紀初頭。	27	7
58	2	Ⅲ	－	須恵器	蓋	(11.2)	－	(2.1)	1	密。	良好	7.5YR6/1 褐灰	10YR7/1 灰白	外面：天頂部回転ヘラケズリ。摘み部回転ナデ。体部回転ナデ。内面：回転ナデ。	摘み蓋。8 世紀初頭。	27	7
59	2	Ⅲ	－	須恵器	蓋	(12.7)	－	(1.7)	2	密。直径 1mm 以下の石英をわずかに含む。	良好	2.5Y7/1 灰白	2.5Y7/1 灰白	外面：天頂部回転ヘラケズリ、体部回転ナデ。内面：回転ナデ。	摘み蓋。8 世紀初頭。	27	9
60	2	Ⅲ	－	須恵器	蓋	(17.2)	－	(2.4)	2	密。	良好	2.5Y6/1 黄灰	2.5Y8/1 灰白	外面：天頂部回転ヘラケズリ。体部回転ナデ。内面：回転ナデ。	摘み蓋。口縁部に丸みを持つ。8 世紀前半。	27	9
61	2	Ⅲ	－	須恵器	蓋	(16.5)	－	(2.2)	1	密。直径 2mm 以下の長石をわずかに含む。	良好	7.5Y6/1 灰	2.5GY6/1 オリーブ灰	外面：天頂部回転ヘラケズリ。体部回転ナデ。内面：回転ナデ。	摘み蓋。口縁部に丸みを持つ。8 世紀前半。	27	9
62	2	Ⅲ	－	須恵器	蓋	14.0	－	(2.3)	1	密。直径 1mm 以下の長石をわずかに含む。	良好	5B4/1 暗青灰	5B3/1 暗青灰	外面：天頂部回転ヘラケズリ。体部回転ナデ。内面：回転ナデ。	摘み蓋。口縁端部が内傾。内面口縁部に自然釉。	27	9
63	2	Ⅲ	－	須恵器	蓋	(16.0)	－	(2.0)	1	密。直径 2mm 以下の長石をわずかに含む。	良好	2.5Y7/1 灰色	2.5Y7/1 灰白	外面：回転ナデ。内面：回転ナデ。	摘み蓋。口縁端部が内傾。外面に自然釉。	27	9
64	2	Ⅲ	－	須恵器	蓋	(15.0)	－	(1.9)	1	やや密。直径 1.5mm 以下の長石をわずかに含む。	不良	7.5YR5/2 灰褐	(口縁) 7.5YR5/3 にぶい褐 (体部) 7.5YR5/2 灰褐	外面：天頂部回転ヘラケズリ、体部回転ナデ。内面：回転ナデ。	摘み蓋。口縁端部が屈曲して外反。	27	9

第６表　遺物一覧表（３）

遺物番号	トレンチ名	層位	出土遺構	種別	器種	法量（cm）			破片数	胎土	焼成	色調		成形・調整等	備考	挿図	図版番号
						口径	底径	器高				（外面）	（内面）				
65	2	Ⅲ	－	須恵器	蓋	(16.4)	－	(1.8)	1	密。直径2mm以下の長石をわずかに含む。	良好	2.5GY6/1 オリーブ灰	5GY5/1 オリーブ灰	外面：回転ナデ。内面：回転ナデ。	摘み蓋。口縁端部が屈曲して外反。	27	9
66	2	Ⅲ	－	須恵器	蓋	(15.6)	－	(2.0)	1	密。	良好	2.5Y6/1 黄灰	2.5Y8/1 灰白	外面：天頂部回転ヘラケズリ、体部回転ナデ。内面：回転ナデ。	摘み蓋。口縁端部が外反。	27	－
67	2	Ⅲ	－	須恵器	蓋	(16.0)	－	(1.7)	1	密。直径1mm以下の長石・石英をわずかに含む。	良好	5Y5/1 灰	7.5YR4/1 褐灰	外面：自然釉のため確認できず。内面：回転ナデ。	摘み蓋。口縁端部が垂直に屈曲。外面に自然釉。	27	9
68	2	Ⅲ	－	須恵器	蓋	(11.0)	－	(0.9)	1	密。	良好	N5/ 灰	N4/ 灰	外面：天井部回転ヘラケズリ。内面：回転ナデ。	壺蓋。	27	9
69	2	Ⅲ	－	須恵器	蓋	(8.0)	－	(1.8)	1	密。	良好	7.5Y4/2 灰オリーブ	5Y5/1 灰	外面：回転ヘラケズリ。内面：回転ナデ。	壺蓋か。外面に自然釉。	27	9
70	2	Ⅲ	－	須恵器	蓋	(11.7)	－	(2.0)	1	密。直径3mm以下の長石をわずかに含む。	良好	自然釉のため明瞭	7.5Y6/1 灰	外面：回転ヘラケズリ、摘み部回転ナデ。内面：回転ナデ、のちヘラナデ。	大型器種の蓋。外面に自然釉。	27	9
71	2	Ⅲ	－	須恵器	坏Ｇ	－	6.5	(0.9)	1	密。	良好	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	外面：底部回転ヘラ切り後、一定方向ナデ。内面：回転ナデ。	無台坏。	27	10
72	2	Ⅲ	－	須恵器	坏Ｇ	－	(6.0)	(1.2)	1	密。	良好	N6/0 灰	7.5Y6/1 灰	外面：底部ヘラ切り、体部回転ナデ。内面：回転ナデ。	無台坏。	27	10
73	2	Ⅲ	－	須恵器	坏Ｇ	－	7.0	(1.9)	1	密。直径1mm以下の石英をわずかに含む。	良好	N5/0 灰	N5/0 灰	外面：底部回転ヘラ切り、体部回転ナデ。内面：回転ナデ。	無台坏。	27	10
74	2	Ⅲ	－	須恵器	坏Ｇ	－	6.4	(2.7)	1	密。直径1mm以下の長石をわずかに含む。	良好	5Y4/1 灰	N4/1 灰	外面：底部ヘラ切り、のちナデ、外縁ヘラケズリ。体部回転ナデ。内面：回転ナデ。	無台塊。	27	10
75	2	Ⅲ	－	須恵器	坏 AorB	(17.0)	－	(4.6)	1	密。直径2mm以下の石英をわずかに含む。	良好	2.5GY7/1 明オリーブ灰	2.5YG8/1 灰白	外面：回転ナデ。内面：回転ナデ。	口縁部破片。	27	9
76	2	Ⅲ	－	須恵器	坏Ａ	－	6.5	(0.9)	1	密。直径1mm以下の長石をわずかに含む。	良好	7.5Y6/1 灰	7.5Y6/1 灰	外面：底部ヘラ切り、のち回転ヘラケズリ、外縁一方向ヘラケズリ。体部回転ナデ。内面：回転ナデ。	無台坏。	27	10
77	2	Ⅲ	－	須恵器	坏Ｂ	14.3	10.4	4.4	1	密。直径1mm以下の長石をわずかに含む。	良好	N7/ 灰白	N7/ 灰白	外面：底部回転ヘラケズリ、のち全面ナデ。高台部貼付、のち周縁ナデ。体部回転ナデ。内面：回転ナデ。	高台は腰部より内側に添付。	27	7
78	2	Ⅲ	－	須恵器	坏Ｂ	－	8.7	(1.5)	1	密。直径3mm以下の長石を多く含む。	良好	5G5/1 緑灰	5B5/1 青灰	外面：底部回転ヘラ切り、のち全面ナデ。高台貼付、のち周縁ナデ。内面：回転ナデ。	－	27	10
79	2	Ⅲ	－	須恵器	坏or埦	－	－	(4.0)	1	やや密。直径3mm以下の長石をわずかに含む。	良好	10YR6/2 灰黄褐	10YR7/3 にぶい黄橙	外面：回転ナデ。内面：回転ナデ。	口縁部破片。	27	9
80	2	Ⅲ	－	須恵器	坏or埦	－	－	(3.6)	1	密。	良好	5GY2/1 オリーブ黒	N4Y 灰白	外面：回転ナデ。内面：回転ナデ。	口縁部破片。	27	9
81	2	Ⅲ	－	須恵器	坏or埦	－	－	(3.2)	1	密。	良好	2.5Y7/1 灰白	2.5Y7/1 灰白	外面：回転ナデ。内面：回転ナデ。	口縁部破片。	27	9
82	2	Ⅲ	－	須恵器	坏or埦	－	－	(3.3)	1	密。砂粒をわずかに含む。	良好	7.5Y4/2 灰褐	N5/0 灰	外面：回転ナデ。内面：回転ナデ。	口縁部破片。	27	9
83	2	Ⅲ	－	須恵器	坏or埦	－	－	(2.8)	1	やや密。	良好	10YR7/2 にぶい黄橙	10YR7/2 にぶい黄橙	外面：回転ナデ。内面：回転ナデ。	口縁部破片。	27	9
84	2	Ⅲ	－	須恵器	埦Ａ	－	－	(2.5)	1	密。	良好	N5/ 0 灰	N6/0 灰	外面：回転ナデ。内面：回転ナデ。	口縁部外反。	27	9
85	2	Ⅲ	－	須恵器	埦Ａ	(13.5)	－	(3.1)	1	密。直径1mm以下の長石をわずかに含む。	良好	N5/0 灰	N6/0 灰	外面：回転ナデ。内面：回転ナデ。	口縁部外反。	27	9
86	2	Ⅲ	－	須恵器	埦Ａ	－	5.5	(2.6)	1	密。長石をわずかに含む。	良好	10YR4/1 褐灰	5YR4/2 灰褐	外面：底部回転糸きり。体部回転ナデ。内面：回転ナデ。	無台碗。	27	10
87	2	Ⅲ	－	須恵器	埦Ａ	－	5.5	(2.1)	1	密。直径1mm以下の長石をわずかに含む。	良好	N5/0 灰	2.5GY5/1 オリーブ灰	外面：底部回転糸きり。体部回転ナデ。内面：回転ナデ。	無台碗。内面に硯面あり。	27	10
88	2	Ⅲ	－	須恵器	埦Ａ	－	5.5	(1.4)	1	密。	不良	5YR6/8 橙	5YR7/8 橙	外面：底部回転糸きり。体部回転ナデ。内面：回転ナデ。	無台碗。	27	10
89	2	Ⅲ	－	須恵器	埦Ａ	－	5.5	(1.2)	1	密。直径1mm以下の石英をわずかに含む。	良好	2.5YR4/3 にぶい赤褐	5YR2/1 黒褐	外面：底部回転糸きり。体部回転ナデ。内面：回転ナデ。	無台碗。	27	10
90	2	Ⅲ	－	須恵器	埦Ａ	－	6.0	(1.1)	1	密。長石をわずかに含む。	良好	7.5Y6/1 灰	7.5Y6/1 灰	外面：底部回転糸きり。体部回転ナデ。内面：回転ナデ。	無台碗。	27	10
91	2	Ⅲ	－	須恵器	埦Ａ	－	5.5	(1.1)	1	直径1mm以下の長石をわずかに含む。	良好	5B6/1 青灰	5PB6/1 青灰	外面：底部回転糸きり。体部回転ナデ。内面：回転ナデ。	無台碗。	27	7
92	2	Ⅲ	－	須恵器	長頸壺	(8.8)	－	(6.3)	1	密。直径1mm以下の長石をわずかに含む。	良好	N7/1 灰白	－	外面：回転ナデ。頸部に１条の沈線あり。口縁部に縁帯なし。内面：回転ナデ。	口縁部破片。8 世紀中頃。	27	10
93	2	Ⅲ	－	須恵器	瓶類	－	8.5	(4.4)	5	密。直径3mm以下の長石をわずかに含む。	良好	N5/0 灰	N6/0 灰	外面：底部回転ヘラケズリ。高台貼付、周縁ナデ。体部回転ナデ。内面：回転ナデ。	底部破片。	27	7
94	2	Ⅲ	－	須恵器	甕	－	－	(2.8)	1	密。直径0.5mm以下の長石・石英をわずかに含む。	良好	N5/0 灰	－	内面：回転ナデ。外面：回転ナデ。	口縁部破片。内外面に自然釉。	27	10
95	2	Ⅲ	－	須恵器	甕	(23.5)	－	(2.5)	1	密。	良好	N4/0 灰	5Y5/1 灰	内面：回転ナデ。外面：回転ナデ。	口縁部破片。	27	10
96	2	Ⅲ	－	須恵器	甕	－	12.0	(4.4)	1	密。直径1mm以下の長石をわずかに含む。	良好	7.5Y6/1 灰	N6/1 灰	内面：回転ナデ。外面：底部ヘラナデ、体部回転ナデ。	底部破片。	27	10
97	2	Ⅲ	－	須恵器	甕	－	8.0	(6.1)	1	密。直径3mm以下の長石をわずかに含む。	良好	10GY5/1 緑灰	2.5GY5/1 オリーブ灰	内面：回転ナデ。外面：底部ナデ、体部下半回転回転ヘラケズリ、上半回転ナデ。	底部破片。	27	10
98	2	Ⅲ	－	石製品	管玉	2.0	0.8	0.8	－	－	－	－	－	片側穿孔。	碧玉製。完存。質量 2.7g。	28	7
99	2	Ⅲ	－	木製品	箸	－	－	－	－	－	－	－	－	－	下半部片。	28	8
100	2	Ⅲ	－	木製品	火付け木	－	－	－	－	－	－	－	－	－	端部炭化。	28	8
101	2	Ⅱb	－	須恵器	坏Ｈ蓋	(10.7)	－	(2.6)	1	密。直径1mm以下の砂粒をわずかに含む。	良好	10YR7/1 灰白	10YR7/1 灰白	内面：回転ナデ。外面：回転ナデ。	坏蓋。7 世紀中葉～後半。	28	10
102	2	Ⅱb	－	須恵器	坏Ｂ	－	12.0	(1.7)	1	密。直径2mm以下の長石・砂粒をわずかに含む。	良好	2.5Y8/4 淡黄	7.5YR6/4 にぶい橙	内面：回転ナデ。外面：底部回転糸きり、高台貼付のち周縁ナデ、体部回転ナデ。	底部破片。	28	10
103	2	Ⅱb	－	須恵器	壺	14.0	－	(3.2)	1	密。直径1mm以下の長石をわずかに含む。	良好	7.5Y7/1 灰白	N7/ 灰白	内面：回転ナデ。外面：回転ナデ。	口縁部破片。外面に自然釉。	28	10
104	2	Ⅱ	－	須恵器	坏Ｈ身	－	－	(2.6)	1	密。直径2mm以下の長石をわずかに含む。	良好	2.5GY5/1 オリーブ灰	5YR5/1 褐灰	内面：回転ナデ。外面：回転ナデ。	坏身。7 世紀前半。	28	10

第４章　総　括

杉崎廃寺の残礎について、延べ５ヶ年にわたる発掘調査が行われるまでは、地誌等の書誌いずれも宮谷寺跡と記し、平安後期から織豊時代にかけて法灯を維持した宮谷寺の遺址とされてきた。

ところが、平成３年10月から平成７年10月までの調査成果により杉崎廃寺跡は７世紀末に創建され、９世紀初頭に焼失、その後再建された形跡のないことが確認された（古川町教育委員会1998）。

平安初期に堂塔が焼失してから今日まで、金堂の礎石は原位置を保ちつづけ、層塔の礎石もいつの頃か心礎は近くへ移されたが、他の礎石は掘り起こされたままの状態でほぼ原位置に散乱していた。およそ1,200年もの間、これは希有の驚嘆すべき事実といわざるをえない。

これまでの調査成果については、報告書並びに第１章で述べてきたとおり、白鳳期創建の寺院跡であることが明らかにされた。伽藍配置は金堂と塔が左右並立する法起寺式であるが、伽藍の中軸線に対して西に寄った金堂の南北軸線上に中門と講堂を配置する、この並びは伽藍中軸線とは一致せず、層塔だけが東へやや張り出す形となり、他に例をみない、また小規模な伽藍として当時注目された。金堂と塔が左右並立、あるいは講堂との三者鼎立による視覚的バランスを重視した意匠ともとれる。

講堂や鐘楼の礎石も創建当時の原位置を保ち、伽藍全体の遺存状態もよく比類ないものであった。鐘楼と経蔵は、講堂に付随して普通はその前方に東西対称の形で配置されるが、鐘楼のみの発見で、左右対称を原則とする古代寺院の配置としては様相を異にする事例であった。

伽藍を区画する施設は、簡素な一列の掘立柱塀を設ける形式で、中門の両側から発して講堂の妻に取りつくもので、基壇建物の周囲には人頭大の玉石が敷き詰められ、伽藍全面を玉石で敷設した例は全国でも初めての発見となった。

杉崎廃寺跡の寺地について、当時の調査では明らかにできなかったが、寺地の西限を示す排水施設（１号溝）が掘立柱塀と並列して南側に延びていたことから中門の前方には南門の存在が推測された。講堂の後方には複数棟の建物が確認され、その中心の東西棟建物を僧房と考えた。また、その脇には総柱構造の倉が置かれていた。調査を堂塔のみに限らず、寺の周囲に広げたことから細部についても徐々にわかってきたが、周辺施設の解明はなお今後の課題として残された。

伽藍全体に対する理解が進み始めたのは、保育園の園舎問題が起きた2010（平成22）年からである。岐阜県史通史編原始（岐阜県1972）によれば、濃飛両国に分布する古代寺院跡（白鳳期）について、美濃地域に15ヶ寺、飛騨地域に８ヶ寺以上を数え、通史から約20年後の東海埋蔵文化財研究会－古代仏教東へ－寺と窯－寺院編（東海埋蔵文化財研究会岐阜大会実行委員会 1992）の資料集では、美濃に30余寺、飛騨に15ヶ寺を数えるが、学術的に発掘調査が行われ、伽藍配置や堂塔の一部が明らかにできたのは、わずか８ヶ寺（美濃－弥勒寺・宮代廃寺・山田寺・正家廃寺・美濃国分寺，飛騨－杉崎廃寺・寿楽寺廃寺・飛騨国分尼寺）にすぎない。これ以外の寺院跡は、わずかに塔心礎や礎石の一部を残すだけのもや、瓦類の散布によって知られる程度である。杉崎廃寺の調査はその一例であるが、大規模かつ計画的な発掘調査の必要性を改めて認識することとなった。

市政後の2005（平成17）年には公衆トイレの計画がおこり、多目的広場の東端で確認調査が行われた。2009（平成21）年には伽藍地北側の多目的広場が園舎建設の候補地となり、遺構の有無と遺構面深度の確認調査が行われ、翌2010年には園舎建設の最有力候補地となった。ここまでの経緯は

すでに述べたことであるが、これが発端となって伽藍地北東隅(１トレンチ)と東側地区(２トレンチ)の確認調査が行われることとなった。調査の結果、北東隅を決める区画塀と東側地区遺構群の確認を受けて飛騨市は多目的広場を園舎建設の候補地から外す英断を下したのである。

杉崎廃寺の今回の調査成果からみると、伽藍地北東隅を決める区画塀の柱掘り方を確認したことで伽藍地の規模を捉えることができた。この結果、僧房域北辺の３号区画塀が確定でき、併せて伽藍地南辺の境界をおさえることができた。西辺は伽藍中枢部を区画した掘立柱塀と排水施設（１号溝）が並列して延びていたことからそれを境界とした。また、２トレンチの試掘確認調査により杉崎廃寺の寺地が微高地の縁辺をもって境界とした可能性が高まった。伽藍中枢部、伽藍地、寺地として示した第29図が杉崎廃寺跡遺跡全体図である。

現在われわれがみる古代寺院は堂塔を中心とした伽藍中枢部だけが普通であるが、『資財帳』では寺地の広さをはじめ伽藍内の全建物の種類や規模、納められた仏像、教巻、宝物類や住僧の人数まで記された例もある。例えば法隆寺の内容は『法隆寺伽藍縁起并流記資財帳』により知ることができる。寺地が方100丈、南大門、中門、僧門３棟、五重塔、金堂、回廊、経楼、鐘楼、食堂、僧房、温室が伽藍中枢部を占め、太衆院として、厨、竈屋、政所屋、碓屋、稲屋、木屋、客坊、倉庫などの施設が設けられていた。また、伽藍の構成がより具体的にわかる史料として『額田寺伽藍並条里図』などの古図がある。かつて額安寺に伝来し、国立歴史民俗博物館に所蔵される史料である。図中には南大門、中門、金堂、講堂、三重塔などの伽藍を構成する主要堂塔や、その後方や東脇に僧房を、東に食堂、食殿、竈屋を配し、その北方に倉垣院、東方に太衆院を付属させ、別区劃で南院や馬屋を設けている。

こうした記録を残す寺院はほぼ南都の大寺や官寺などに限られ、地方では目にすることはできない。しかし、伽藍地の周囲には僧侶の日常生活を支える太衆院（食殿・大炊屋・竈屋）や日常事務を掌る政所などの諸施設や家政機関が置かれた可能性が高いのである。

事実、僧房域のすぐ北側には竪穴住居が発見され、須恵器の埦類を中心とする食器類がまとまって出土し、「見寺」「寺」「田倉」「井」「寺卌立」などの墨書資料が含まれていた。ここに大炊屋や竈屋などの炊事場的な施設を認めることができるのではなかろうか。また、２トレンチの東端では掘立柱建物跡の存在を匂わす遺構が確認されている。遺構の解明を必要とするが、寺院に関連する諸施設の可能性が指摘できるのである。

伽藍中枢部を礼拝空間、伽藍地を住僧の修学空間、周囲の寺地を家政空間と仮称すると、伽藍地の東及び北側には未調査区の家政空間が広がっている。寺院内部の様子をさらに一歩踏み込んで検討できる領域がそこにはあり、今回の調査事例は飛騨における地方寺院の先鞭をつけるものとなろう。

未だ多くの問題や課題を残しているが、杉崎廃寺跡の調査成果で得られた情報が飛騨地域における造寺活動やその背景、造営主体者の問題などの解明に向けて多少なりとも解明されることを願いたい。

（河合　英夫）

引用参考文献

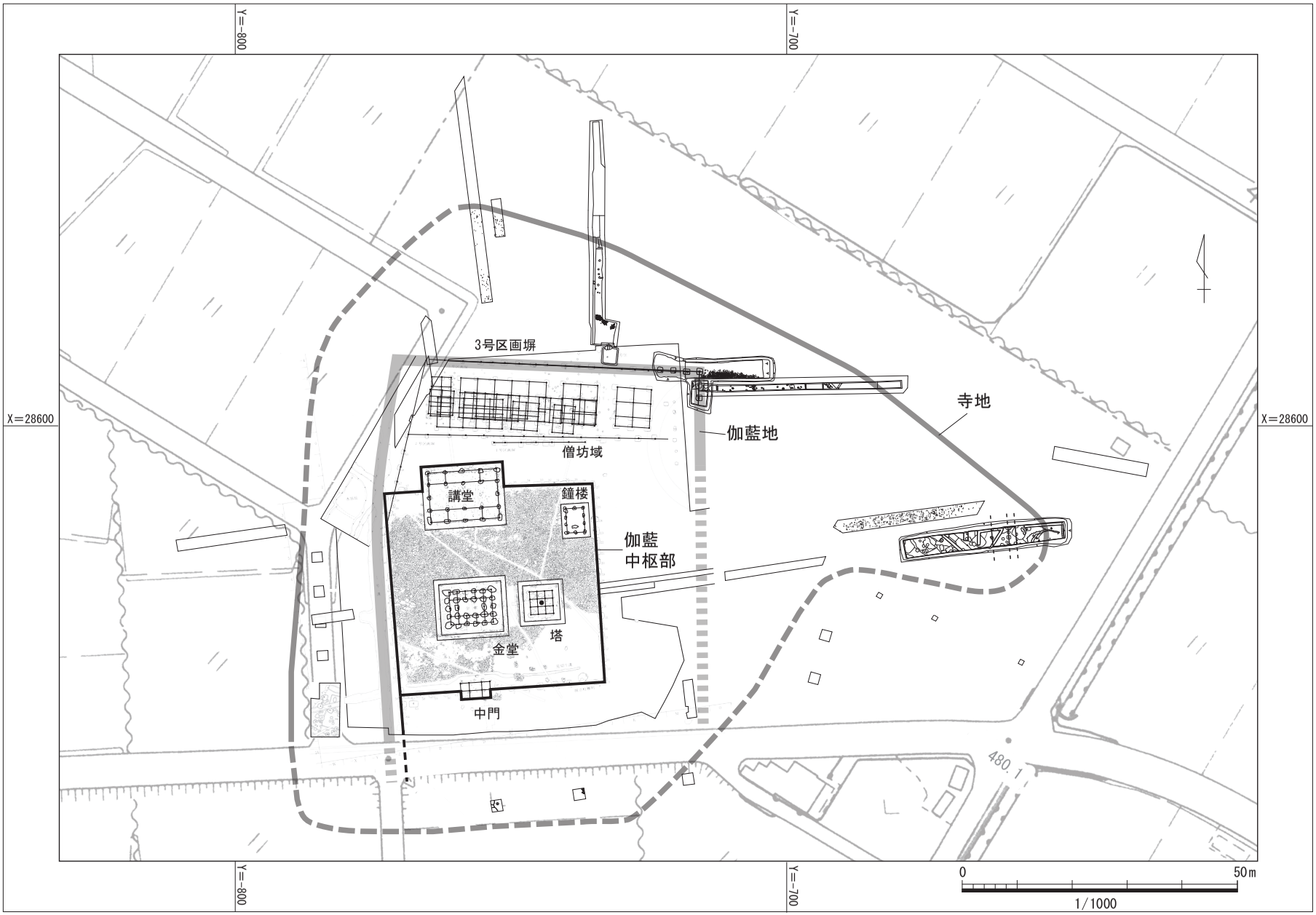
岐阜県 1972『岐阜県史 通史編 原始』

国立歴史民俗博物館 2001『[共同研究] 古代荘園絵図と在地社会についての史的研究「額田寺伽藍並条里図」の分析』国立歴史民俗博物館研究報告第88集

東海埋蔵文化財研究会岐阜大会実行委員会 1992『古代仏教東へ－寺と窯－』1.寺院編

ＮＨＫ 1994『法隆寺昭和資財帳調査完成記念 国宝法隆寺展』

古川町教育委員会 1998『岐阜県吉城郡古川町杉崎廃寺跡発掘調査報告書』



第29図　杉崎廃寺跡遺跡全体図

引用・参考文献

愛知県史編さん委員会　2010『愛知県史』（史料編 4　考古 4　飛鳥～平安）　愛知県
石川日出志　1995「飛騨の弥生中期横羽状文甕」『飛騨と考古学』　飛騨考古学会
犬塚みつ編　1939『犬塚行藏飛驒考古學遺稿』犬塚行藏飛驒考古學遺稿刊行會
上原真人　1986「仏教」『岩波講座日本考古学』4　岩波書店
大阪府教育委員会　1978『陶邑Ⅲ』
大阪府立近つ飛鳥博物館　2006『年代のものさし』（陶邑の須恵器）
大阪府立近つ飛鳥博物館　2007『河内古代寺院巡礼』（平成 19 年度春季特別展）
大塚　章　1994「寿楽寺廃寺出土の軒丸瓦について－飛騨地方の古代寺院に関する一考察」『岐阜県博物館調査研究報告』15　岐阜県博物館
大野政雄　1960「杉崎廃寺跡」『岐阜県指定文化財調査報告書』第 6 巻　岐阜県教育委員会
小笠原好彦・林　博通ほか　1989「穴太廃寺」『近江の古代寺院』　近江の古代寺院刊行会
尾野善裕　1999「東濃窯灰釉陶器編年小考」『岐阜史学』第 96 号　岐阜史学会
甲斐弓子　2006「7 世紀の伽藍配置にみられる政治背景」『月刊　考古学ジャーナル』№.545　ニューサイエンス社
甲斐弓子　2010『わが国古代寺院にみられる軍事的要素の研究』　雄山閣
加納俊介・石黒立人編　2002『弥生土器の様式と編年』（東海編）　木耳社
河合英夫　1994「岐阜・杉崎廃寺」『木簡研究』第 16 号　木簡学会
河合英夫・島田敏男　1994「飛騨の伽藍－杉崎廃寺の調査－」『月刊文化財』3　第一法規出版
岐阜県　1972『岐阜県史』（通史編原始）
岐阜県　2001『わかりやすい岐阜県史』
岐阜県　2003『岐阜県史』（考古資料）
岐阜県・財団法人岐阜県文化財保護センター　1998『丸山遺跡』
岐阜県土木部・財団法人岐阜県文化財保護センター　1995『岡前遺跡』
岐阜県博物館　1992『特別展　飛驒のあけぼの』
岐阜県博物館　1995『特別展　美濃・飛驒の古代史発掘－律令国家の時代－』
建設省・財団法人岐阜県文化財保護センター　1992『国道 41 号線改良工事に伴う発掘調査報告書』
国府町教育委員会　1993『半田垣内遺跡』
国府町教育委員会　1993『岐阜県国府町遺跡地図』
国府町教育委員会　2005『石橋廃寺調査報告書』
国府町史刊行委員会　2007『国府町史』（考古・指定文化財編）
国府町史刊行委員会　2011『国府町史』（通史編 1）
小淵忠司　2011「飛驒の須恵器と灰釉陶器」『研究事業報告』（平成 22 年度版）　岐阜県ミュージアム飛驒
財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター　2006『西ヶ洞廃寺跡・中野山越遺跡・中野大洞平遺跡・大洞平 5 号古墳』
財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター　2007『中野大洞平遺跡Ⅱ』

財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター　2007『野内遺跡Ａ地区』
財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター　2009『野内遺跡Ｂ地区』
財団法人岐阜県文化財保護センター　2002『太江遺跡・寿楽寺廃寺跡』
財団法人岐阜県文化財保護センター　2005『太江遺跡Ⅱ』
財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所　2002『石名田木舟遺跡発掘調査報告』（能越自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅲ）
財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所　2006『下老子笹川遺跡発掘調査報告』（能越自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅴ）
齊藤孝正・後藤健一　1995『須恵器修正図録』（第３巻　東日本編Ⅰ）　雄山閣出版
滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会　2001『穴太遺跡発掘調査報告書Ⅳ』
白川修平　1994「杉崎廃寺跡遺跡」『第３回飛騨国府シンポジウム　日本歴史の中の飛騨』（両面宿儺と新羅の僧「行心」）　飛騨国府シンポジウム実行委員会
鈴木嘉吉編　1971『上代の寺院建築』日本の美術 10　至文堂
角竹喜登　1938「杉崎廃寺跡」『岐阜県史蹟名勝天然記念物調査報告書』第７輯　岐阜県
関　　晃　1954「新羅沙門行心」『続日本紀研究』第１巻第９号　続日本紀研究会
髙橋浩二　2000「古墳出現期における越中の土器様相－弥生時代後期から古墳時代前期前半土器の編年的位置付け－」『庄内式土器研究』XX Ⅱ　庄内式土器研究会
高山市教育委員会　1988『飛騨国分寺発掘調査報告書』
高山市教育委員会　1990『飛騨国分尼寺発掘調査報告書』
高山市教育委員会　2003『三仏寺廃寺発掘調査報告書』
田中　彰　2000「飛騨の古代寺院　発掘調査２例」『月刊　考古学ジャーナル』№.462　ニューサイエンス社
田辺昭三　1966『陶邑古窯址群Ⅰ』　平安学園考古学クラブ
田辺昭三　1981『須恵器大成』　角川書店
坪井清足・鈴木嘉吉編　1974『埋もれた宮殿と寺』（古代史発掘９）　講談社
東海考古学フォーラム岐阜大会実行委員会　1998『土器・墓が語る　美濃の独自性　～弥生から古墳へ～』（第６回東海考古学フォーラム岐阜大会）　東海考古学フォーラム岐阜大会実行委員会
東海土器研究会　2000『須恵器生産の出現から消滅』（猿投窯・湖西窯編年の再構築）
東海埋蔵文化財研究会岐阜大会実行委員会　1992『古代仏教東へ－寺と窯－』1.寺院編、2.窯編
独立行政法人文化財研究所　奈良文化財研究所　2003『古代の官衙遺跡』（Ⅰ遺構）
独立行政法人文化財研究所　奈良文化財研究所　2004『古代の官衙遺跡』（Ⅱ遺物・遺構編）
中野効四郎　1970『岐阜県の歴史』（県史シリーズ 21）　山川出版社
中村　浩　1981『和泉陶邑の研究』　柏書房
中村　浩　2001『和泉陶邑窯出土須恵器の型式編年』　芙蓉書房出版
楢崎彰一・横山浩一編　1974『都とむらの暮し』（古代史発掘 10）　講談社
西　弘海　1986『土器様式の成立とその背景』西弘海遺稿集刊行会
日本考古学協会新潟大会実行委員会　1993『東日本における古墳出現過程の再検討』（日本考古学協会　1993 年度新潟大会　シンポジウム 2）

長野市教育委員会　2001『長野吉田高校グランド遺跡Ⅱ』
箱崎和久　2011「〈学会展望〉発掘－寺院建築関係－」『建築史学』第57号　建築史学会
八賀　晋　1988「飛騨の古墳と古代寺院」『飛騨国府シンポジウム　古代の飛騨』（その先進性を問う）飛騨国府シンポジウム実行委員会
八賀　晋編　2001『美濃・飛騨の古墳とその社会』　同成社
八賀　晋　2004『信包八幡神社古墳測量調査報告書』　飛騨市教育委員会
馬場伸一郎　2009「磨製石斧の流通と交易」『中部の弥生時代研究』　六一書房
早川万年　2001「飛騨の古代寺院名についての覚書」『文字の登場、そして広まり－古代中世の人と文字をめぐって－』美濃加茂市民ミュージアム
飛騨の山樵館　1999『杉崎廃寺跡』
飛騨国府シンポジウム実行委員会　1988『飛騨国府シンポジウム　古代の飛騨』（その先進性を問う）
飛騨国府シンポジウム実行委員会　1991『第2回飛騨国府シンポジウム 飛騨と文化』（豊かな生活の再現）
飛騨国府シンポジウム実行委員会　1994『第3回飛騨国府シンポジウム 日本歴史の中の飛騨』（両面宿儺と新羅の僧「行心」）
飛騨国府シンポジウム実行委員会　1997『第4回飛騨国府シンポジウム　飛騨の古墳時代』（その文化と生産）
飛騨市教育委員会　2010『増島城跡』
婦中町教育委員会　2002『千坊山遺跡群試掘調査　報告書』
婦中町教育委員会　2003『鍛冶町遺跡発掘調査報告』
古川町教育委員会　1967『岐阜県沢遺跡調査予報』
古川町教育委員会　1989『上町遺跡Ｃ地点発掘調査報告書』
古川町教育委員会　1991『上町遺跡Ｄ地点発掘調査報告書』
古川町教育委員会　1993『中野山越遺跡発掘調査報告書』
古川町教育委員会　1994『上町遺跡トヨタ地点・０地点・栗原センター地点発掘調査報告書』
古川町教育委員会　1998『杉崎廃寺跡発掘調査報告書』
古川町教育委員会　2001『上町遺跡金子地点・氷見地点発掘調査報告書』
細江村郷土史研究会　1956『御番屋敷遺址の研究』　細江村教育委員会
町田　章編　1989『古代の宮殿と寺院』古代史復元８　講談社
町田勝則　1996「石器の研究法－報告文作成に伴う観察・記録法①－」『長野県の考古学』（財）長野県埋蔵文化財センター研究論集Ⅰ
松田之利ほか　2000『岐阜県の歴史』　山川出版社
三好清超　2011「杉崎廃寺跡における寺域確認調査について」『研究事業報告』（平成22年度版）　岐阜県ミュージアムひだ
森　郁夫　2009『日本古代寺院造営の諸問題』　雄山閣
森　浩一・八賀　晋編　1997『飛騨　よみがえる山国の歴史』　大巧社
山路直充　2001「国分寺における寺院地と伽藍地（上）」『古代』第110号　早稲田大学考古学会
渡辺博人　1988「美濃須衛窯の須恵器生産－飛鳥・白鳳時代を中心として－」『古代文化』第40巻第6号　財団法人古代学協会

1 トレンチ　3 号区画塀跡の延長部検出状況（西から）

1 トレンチ　柱穴跡 SP4・SP5 検出状況（南から）

図版 2

2 トレンチ　古墳周溝 SD57 検出状況（北東から）

2 トレンチ　遺構検出状況（南から）

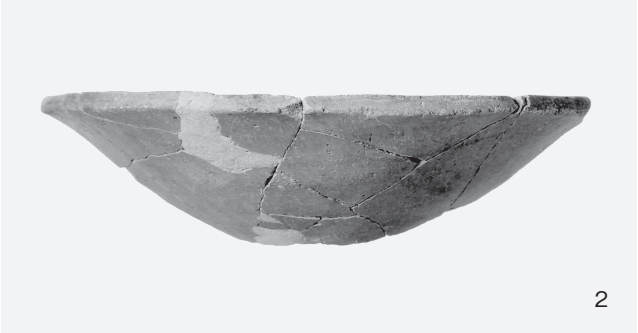
2 トレンチ　建物跡 SB58 検出状況（南から）

2 トレンチ　柱穴跡 SP9 検出状況（南から）

図版 4

2 トレンチ　コの字状石囲炉跡 SL7 断面図（東から）

2 トレンチ　地山の落ち込み検出状況（南西から）

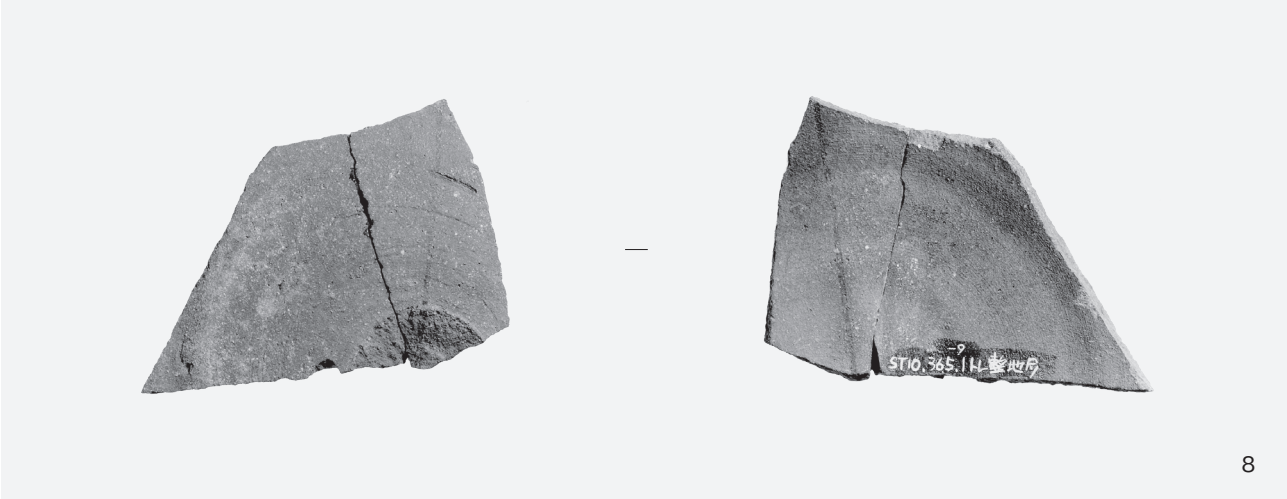

2

23

3

17

4



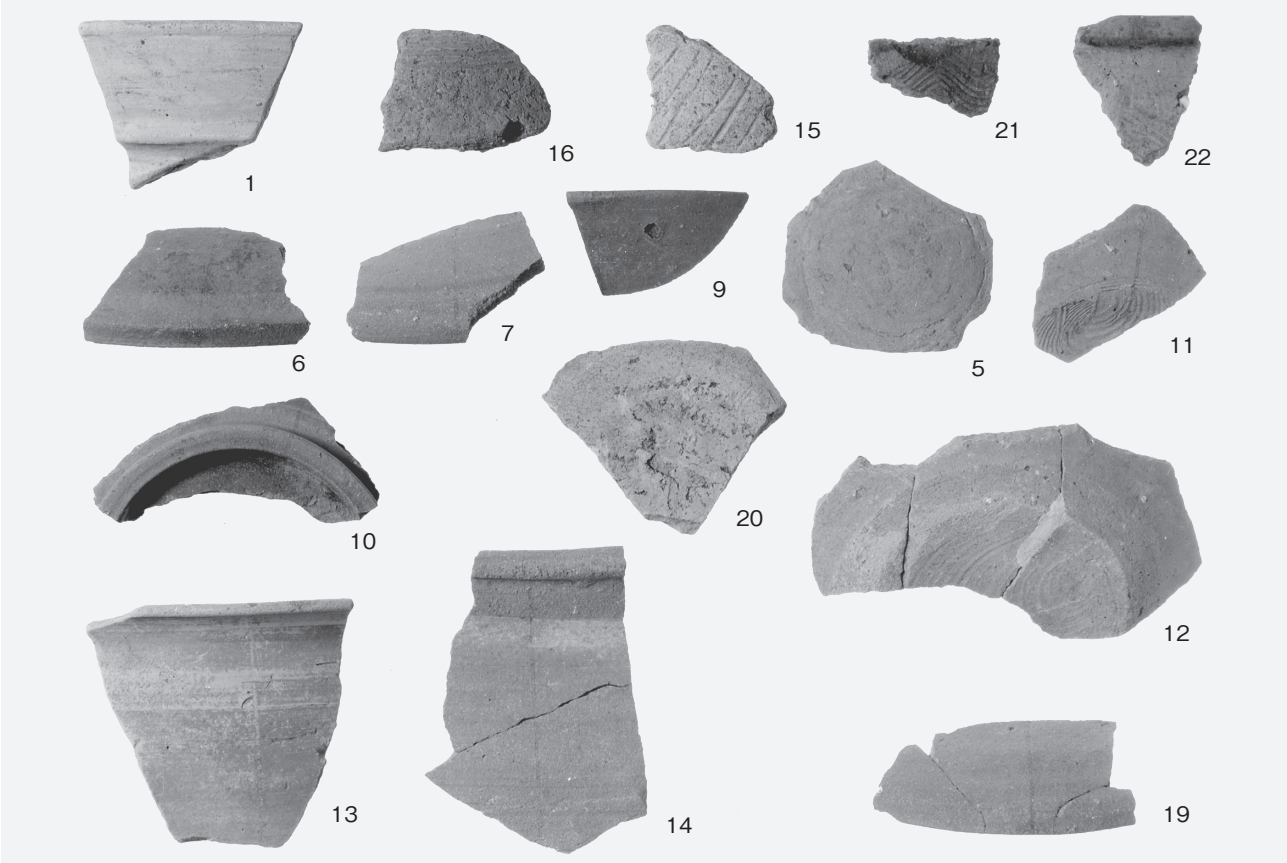
8

24

18

1 トレンチ　出土遺物（1）

図版 6



1 トレンチ出土遺物（2）

57

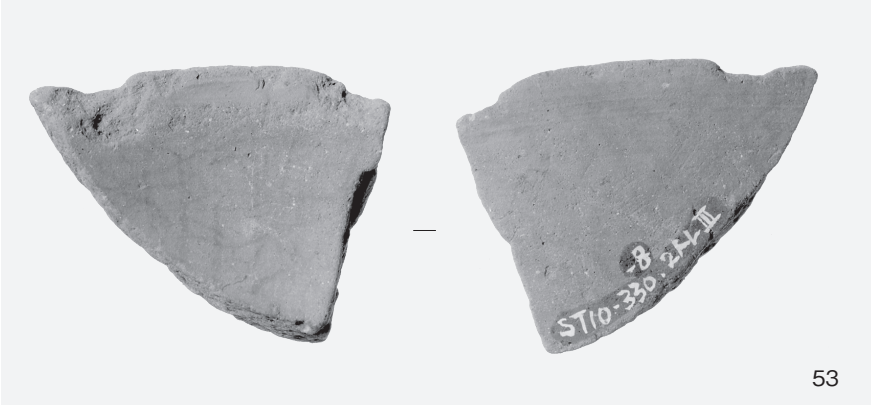
58

77

93

37

91

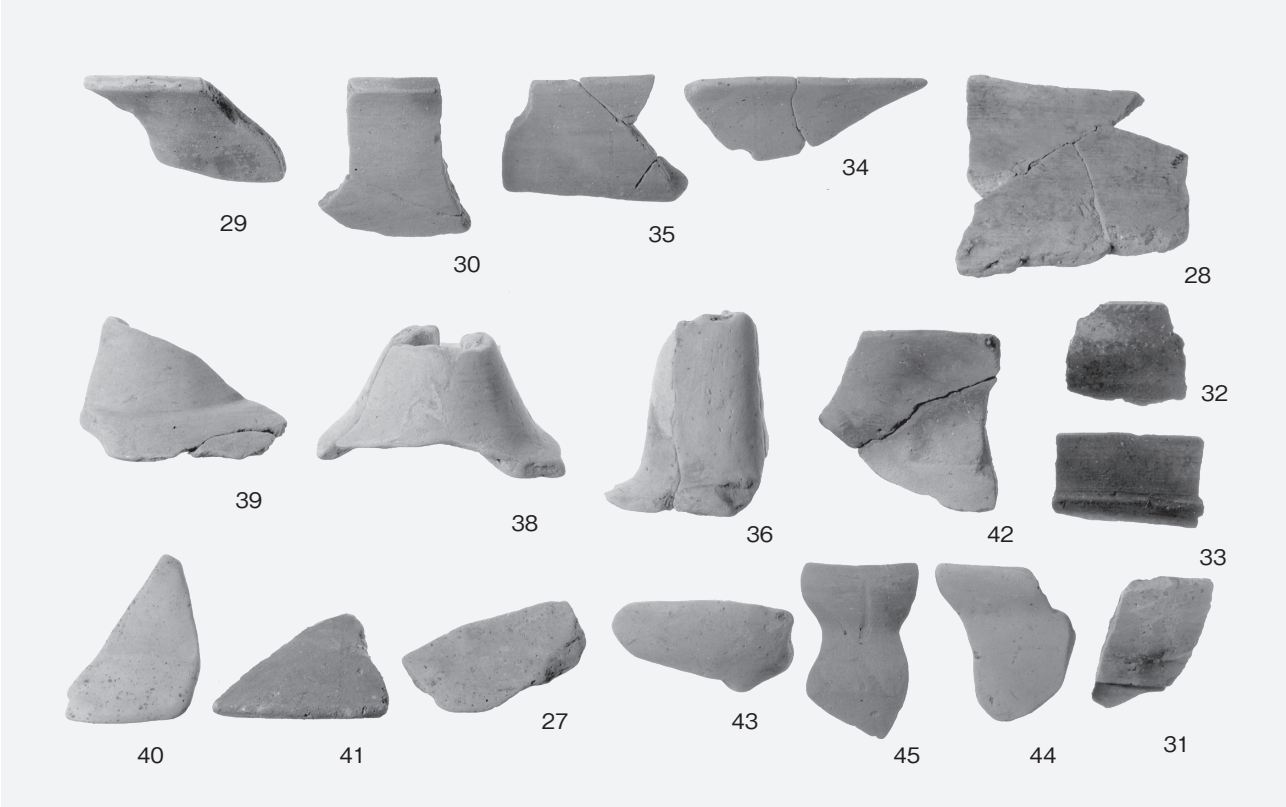


53

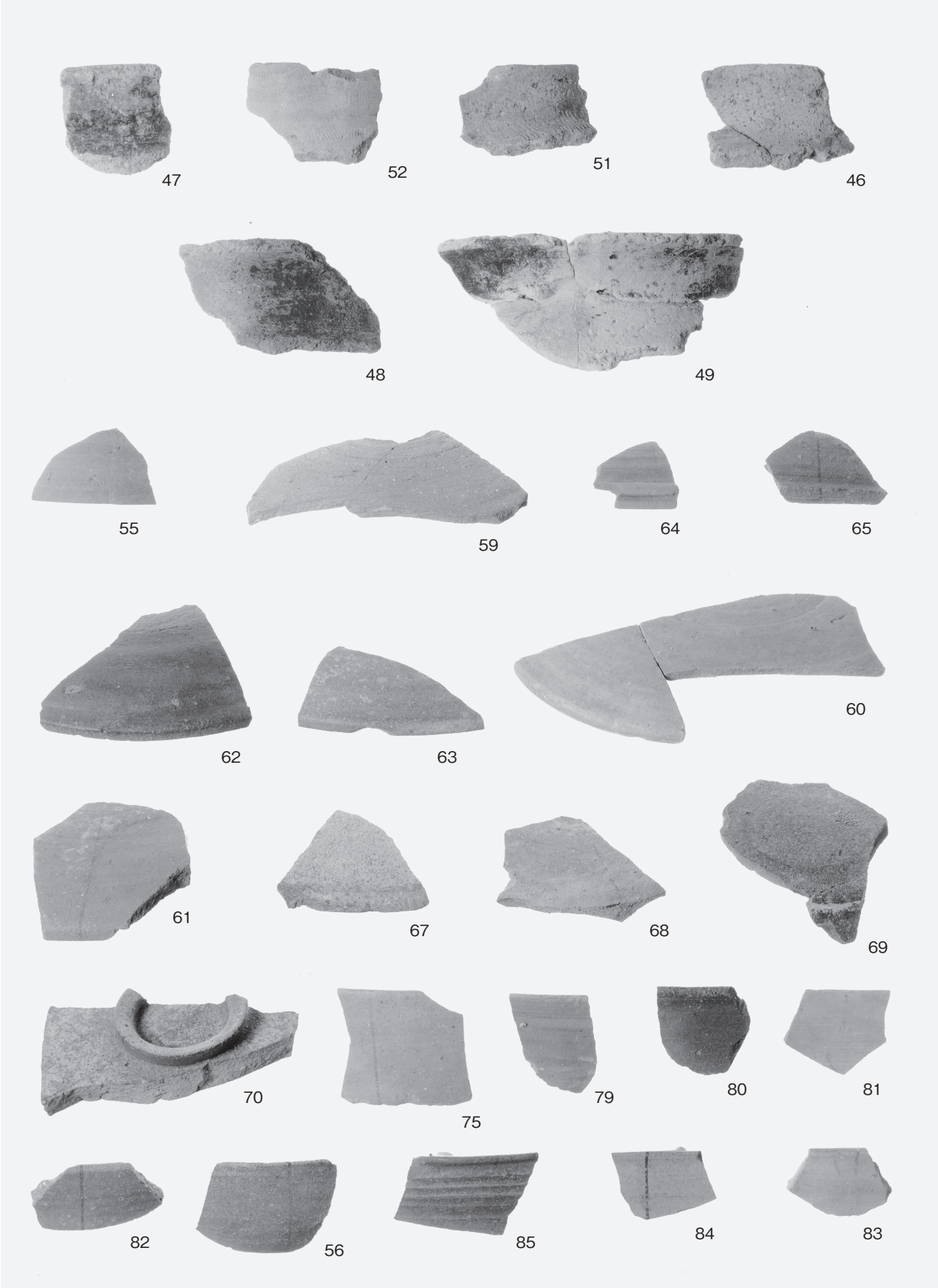
98

2 トレンチ　出土遺物（1）

図版 8

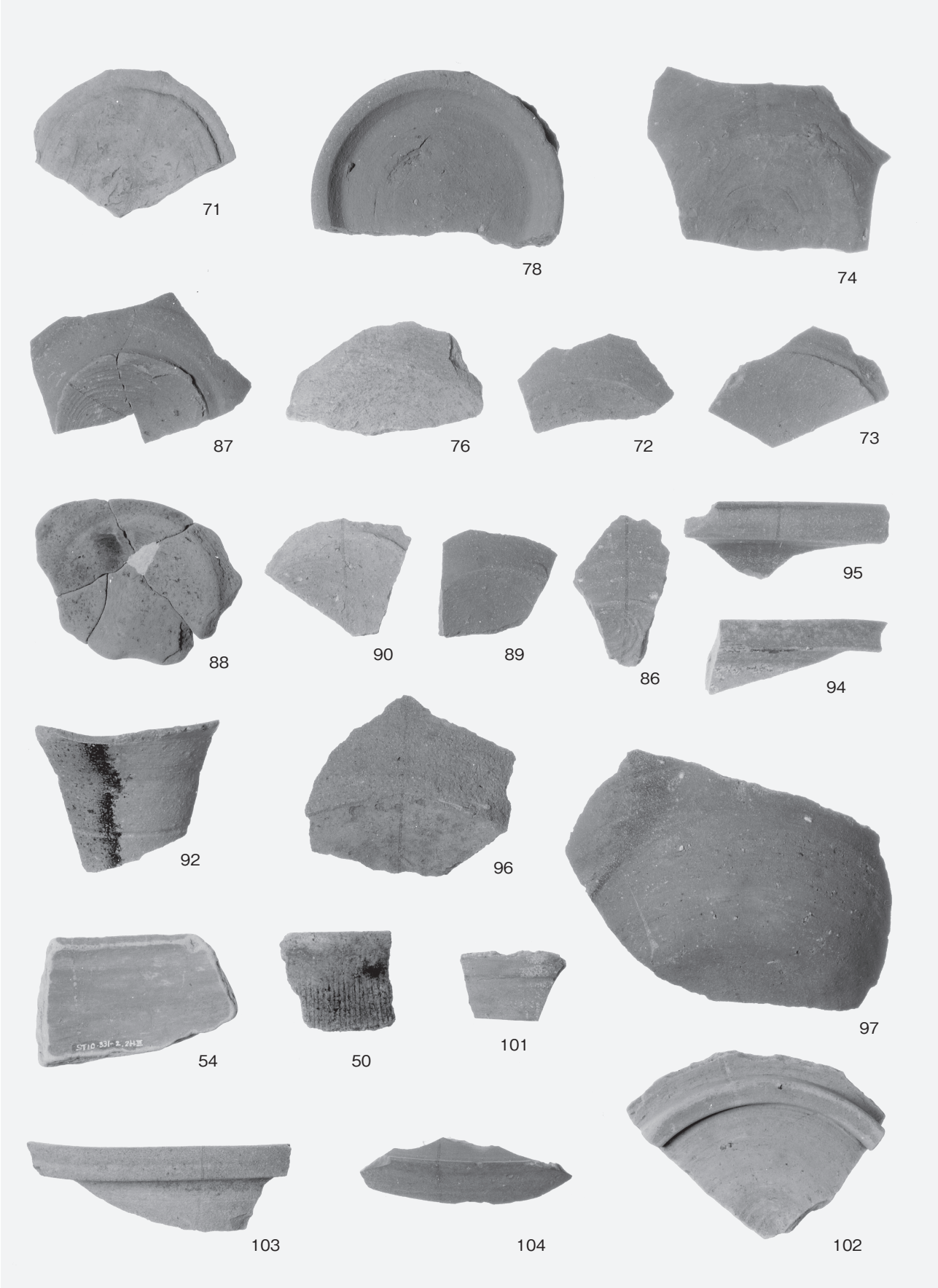


2 トレンチ出土遺物（2）


47
52
51
46
48
49
55
59
64
65
62
63
60
61
67
68
69
70
75
79
80
81
82
56
85
84
83

2 トレンチ　出土遺物（3）

図版 10



2 トレンチ　出土遺物（4）

報告書抄録

ふりがな	すぎさきはいじあと２
書名	杉崎廃寺跡２
副書名	－
シリーズ名	飛騨市文化財調査報告書
シリーズ番号	第５集
編著者名	三好清超　河合英夫
編集機関	飛騨市教育委員会
所在地	〒509-4292　岐阜県飛騨市古川町本町２番22号　　TEL 0577-73-7496　FAX 0577-73-7497
発行年月日	2012年３月19日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
すぎさきはいじあと 杉崎廃寺跡	ぎふけんひだし 岐阜県飛騨市 ふるかわちょう 古川町 すぎさき 杉崎	21217	00151	36° 15’ 28”	137° 9’ 32”	20100811 ～ 20100921	159㎡	保育園園舎に伴う試掘確認調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
杉崎廃寺跡	社寺跡	白鳳時代	伽藍中枢部区画塀 掘立柱建物跡 竪穴住居跡 炉跡	須恵器、土師器、木製品等	伽藍中枢部の北東隅を区画する施設と、伽藍東側地区において、寺院に伴う雑舎と考えられる建物跡を確認。

要約

岐阜県飛騨市古川町杉崎に、白鳳後期の杉崎廃寺跡は位置する。1991（平成３）から1995（平成７）年に伽藍中枢部の調査が行われており、小規模ながら主要堂塔を備え、７世紀末葉から８世紀初頭に創建された白鳳期の寺院跡であることが明らかとなっていた。主要堂塔の伽藍配置は、南面する金堂の東に塔が並び、金堂の正面に中門、後ろに講堂、北東隅に鐘楼を配し、伽藍中枢部を一本柱塀が取り囲む。また、伽藍の中軸線に対してやや西に寄る金堂の南北軸線上に中門と講堂を置くなど、全体として変則的な伽藍配置となっている。伽藍の内部に敷き詰められた玉石敷は全国でも初めての発見であった。また、周辺域の寺地については、西側寺地の境界は排水施設であり、中門の南側には南門の存在が推測され、北側の区画施設は３号区画塀であることが明らかとなったが、東側の寺地については不明であった。

今回調査の成果は大きく２点である。一つは、伽藍地を囲む東側の区画施設を確認したことである。この発見で伽藍全体の規模をほぼ明らかにすることができた。二つ目は、東側の寺地を確定できたことである。舌状に張り出した伽藍の東側には寺院に付属する雑舎の存在を想定することができた。これらのことより、主要堂塔を備えた本格的な寺院が飛騨の地にあり、その面積が全国でも最小規模であることが判明した。飛騨の古代寺院の全貌を示す杉崎廃寺跡は非常に貴重な遺跡であると考えられる。

飛驒市文化財調査報告書　第５集

杉崎廃寺跡２

発　行　日　2012年３月19日
編集・発行　飛驒市教育委員会
〒509-4292
岐阜県飛驒市古川町本町２番22号
TEL 0577（73）7496
印　　刷　山都印刷株式会社